兵庫県文化財調査報告書　第91冊

北園遺跡発掘調査報告書

―都市計画街路尼崎港川西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―

1991

兵庫県教育委員会

北園遺跡発掘調査報告書

— 都市計画街路尼崎港川西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

1991

兵庫県教育委員会

例　言

1．本書は、伊丹市北園に所在する北園（きたぞの）遺跡（北村（きたむら）廃寺）の発掘調査報告書である。なお、当遺跡は「北園遺跡」として報告したが、調査の結果寺院址と判断されるため、今後は「北村廃寺」と呼称されたい。

2．調査は、都市計画街路尼崎港川西線の道路改良工事に伴うもので、兵庫県西宮土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が昭和61年11月・昭和62年１月に確認調査を、昭和62年２月に調査必要地域全面にわたる発掘調査を実施した。

3．出土遺物および諸記録の整理作業は、昭和62年度に兵庫県教育委員会が、平成２年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．立命館大学の高橋学氏には調査に参加して頂き、地理学的見地から種々の助言をいただいた。卒塔婆・文字瓦の文字の読解には、兵庫県立博物館の小林基伸・神戸桂文の両氏の手を煩わせた。本遺跡から出土した瓦については、高井悌三郎・藤沢一夫両氏から御指導を得た。またこれらの諸氏以外に発掘調査および整理作業段階で以下の各氏の御指導・助言を得た。

有岡正次、太田喜美子、岡野慶隆、小長谷正治、川口宏海、倉田芳郎、藤井直正、村川行弘

5．本書で示す標高値は、東京湾平均海水準を基とする。なお、図に使用した方位は磁北を示している。真北は、これより東へ約６°40′振っている（昭和60年現在）。

6．遺物の番号は、本文、挿図、図版ともに統一している。

7．本文は、目次に示したとおり村上泰樹・甲斐昭光・藤田淳が分担執筆した。編集は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて村上が行い、森本貴子がこれを助けた。

8．本報告書にかかる遺物、写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１番地５）および魚住収蔵庫（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-１）に保管している。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯 …… （村上泰樹） … 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 3
　　１．１・２次確認調査 …… （藤田　淳） … 3
　　２．全面調査 …… （村上） … 7
　第３節　整理作業の経過 …… （村上） … 9
第２章　遺跡の環境 …… 11
　第１節　地理的環境 …… （村上） … 11
　第２節　歴史的環境 …… （甲斐昭光） … 13
第３章　調査の結果 …… 17
　第１節　調査の概要 …… （甲斐） … 17
　第２節　遺　　構 …… 21
　　１．室町時代末から江戸時代初頭の遺構 …… （村上） … 21
　　２．平安時代後期から室町時代の遺構 …… （村上・甲斐） … 23
　　３．古墳時代の遺構 …… （甲斐） … 37
　第３節　遺　　物 …… 37
　　１．室町時代末から江戸時代初頭の遺物 …… （村上） … 38
　　２．平安時代後期から室町時代の遺物 …… （村上） … 38
　　３．奈良時代の遺物 …… （甲斐） … 75
　　４．古墳時代の遺物 …… （甲斐） … 75
　　５．弥生時代の遺物 …… （甲斐） … 77
第４章　まとめにかえて …… （村上） … 79

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図・周辺字限図 …… 2
第２図　確認調査土層柱状図 …… 4
第３図　確認・全面調査区位置図 …… 5
第４図　遺跡周辺等高線図 …… 12
第５図　北園遺跡周辺の主要遺跡 …… 14
第６図　Ｃ地区西壁土層断面図 …… 18
第７図　Ａ・Ｂ地区西壁土層断面図 …… 19
第８図　畝状遺構１ …… 21
第９図　畝状遺構２ …… 22
第10図　Ａ地区東半の掘立柱建物群 …… 24
第11図　掘立柱建物１ …… 24
第12図　掘立柱建物２ …… 25

第13図　掘立柱建物３ …… 26
第14図　掘立柱建物４ …… 27
第15図　掘立柱建物５ …… 28
第16図　掘立柱建物６ …… 29
第17図　掘立柱建物７ …… 29
第18図　掘立柱建物８ …… 30
第19図　掘立柱建物９ …… 31
第20図　土坑１ …… 32
第21図　土坑２・３ …… 33
第22図　土坑４ …… 34
第23図　池状遺構 …… 35
第24図　溝５・６土層断面図 …… 36
第25図　流路１土層断面図 …… 37
第26図　土師器 …… 39
第27図　黒色土器・瓦器・瓦質土器・41
第28図　瓦質土器 …… 42
第29図　須恵器 …… 43
第30図　陶磁器 …… 45
第31図　軒丸瓦Ⅰａ・ｂ類、Ⅱ類 …… 47
第32図　軒丸瓦Ⅱ類 …… 48
第33図　軒平瓦Ⅰａ・ｂ類、Ⅱ類、Ⅲ類 …… 50
第34図　軒平瓦Ⅲ類 …… 52
第35図　丸瓦Ⅰ・Ⅱ類 …… 54
第36図　丸瓦Ⅱ・Ⅲ類 …… 55
第37図　平瓦Ⅰ類 …… 56
第38図　平瓦Ⅱ・Ⅲ類 …… 57
第39図　鳥衾瓦・雁振瓦Ⅰ・Ⅱ類 …… 59
第40図　熨斗瓦Ⅰ・Ⅱ類 …… 61
第41図　鬼　瓦 …… 62
第42図　文様瓦 …… 63
第43図　文字瓦 …… 64
第44図　土　鈴 …… 66
第45図　温　石 …… 66
第46図　鉄製品 …… 67
第47図　五輪塔形卒塔婆 …… 68
第48図　流路２出土遺物 …… 75
第49図　流路１出土遺物 …… 76
第50図　弥生時代の遺物 …… 77
第51図　石製品（扁平片刃石斧） …… 78
第52図　扁平片刃石斧（写真） …… 78
付図　遺構全体図

表　目　次

表１　出土瓦種別構成表 …… 46
表２　瓦分類別出土位置 …… 65
表３　出土土器観察表 …… 69
表４　出土瓦計測表 …… 72

図　版　目　次

図版１　上空からみた北園遺跡
図版２　１．調査区東方の猪名川を望む
　　２．確認調査　坪１
　　３．確認調査　坪18
図版３　Ａ・Ｃ地区の全景
図版４　１．畝状遺構１

図版４　２．畝状遺構１
３．畝状遺構１断面（１）
４．畝状遺構１断面（２）
図版５　１．畝状遺構２
２．畝状遺構２
図版６　１．掘立柱建物１
２．掘立柱建物２～５
図版７　１．掘立柱建物２～５
２．掘立柱建物７
図版８　１．掘立柱建物８
２．掘立柱建物９
図版９　１．掘立柱建物１（Ｐ５）断面
２．掘立柱建物１（Ｐ１）断面
３．掘立柱建物４（Ｐ10）礫出土状況
４．掘立柱建物４（Ｐ10）根石
５．掘立柱建物２（Ｐ７）土器出土状況
６．掘立柱建物５（Ｐ７）土器出土状況
７．掘立柱建物９（Ｐ４）丸瓦出土状況
８．掘立柱建物９（Ｐ４）断面
図版10　１．土坑１～５
２．土坑１
図版11　１．土坑２
２．土坑３
図版12　１．土坑４検出状況
２．土坑４・土坑５
図版13　１．池状遺構
２．池状遺構
図版14　１．池状遺構断面
２．池状遺構　卒塔婆出土状況
図版15　１．溝４
２．溝５・溝６断面
図版16　１．流路１
２．流路１断面
３．流路１土器出土状況
４．流路２杭検出状況
図版17　１．土師器（１）
２．土師器（２）
図版18　１．土師器・瓦質土器
２．黒色土器・瓦器・須恵器
図版19　１．中国磁器・国産陶器（表面）
２．中国磁器・国産陶器（裏面）
図版20　１．黒色土器・瓦質土器・
国産陶器・須恵器
２．軒丸瓦
図版21　軒丸瓦・軒平瓦
図版22　軒平瓦・丸瓦
図版23　１．丸瓦
２．平瓦
図版24　１．平瓦Ⅱ類
２．平瓦Ⅲ類
図版25　鳥衾瓦・雁振瓦
図版26　熨斗瓦・鬼瓦
図版27　叩き目文様瓦・文字瓦
図版28　１．鉄製品
２．五輪塔形卒塔婆
図版29　１．流路１出土土器
２．弥生土器

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

北園遺跡は兵庫県伊丹市北園に所在する遺跡である。遺跡は伊丹市の北東隅、川西市境と隣接する部分に位置する。遺跡の東側は猪名川が南流し、西側には伊丹台地が控え、南側は猪名川支流の駄六川が流れている。遺跡は猪名川・駄六川の氾濫によって生じた沖積地・微高地上に立地する。

遺跡の中央は、尼崎港川西線が南北に走っている。昭和61年にこの尼崎港川西線の拡幅工事（都市計画街路尼崎港川西線道路改良工事）が計画された。工事該当地区周辺は、すでに周知されている北村遺跡が近接していることから、兵庫県教育委員会では工事の進捗状況に合わせて立会を行うことになった。

この立会は社会教育・文化財課主査　井守徳男が実施した。立会は昭和61年５・６月に２回行い、工事予定地内で遺物包含層を確認し、北園遺跡として周知された。この結果をもとに工事担当部局である西宮土木事務所伊丹出張所と遺跡の取扱いについて協議した。協議の結果、遺跡の範囲及び遺跡の性格を把握するため確認調査を実施することになった。

確認調査は、社会教育・文化財課技術職員　村上泰樹・市橋重喜（平成２年５月死去）の両名が担当し、昭和61年11月10日から17日にかけて実施した。

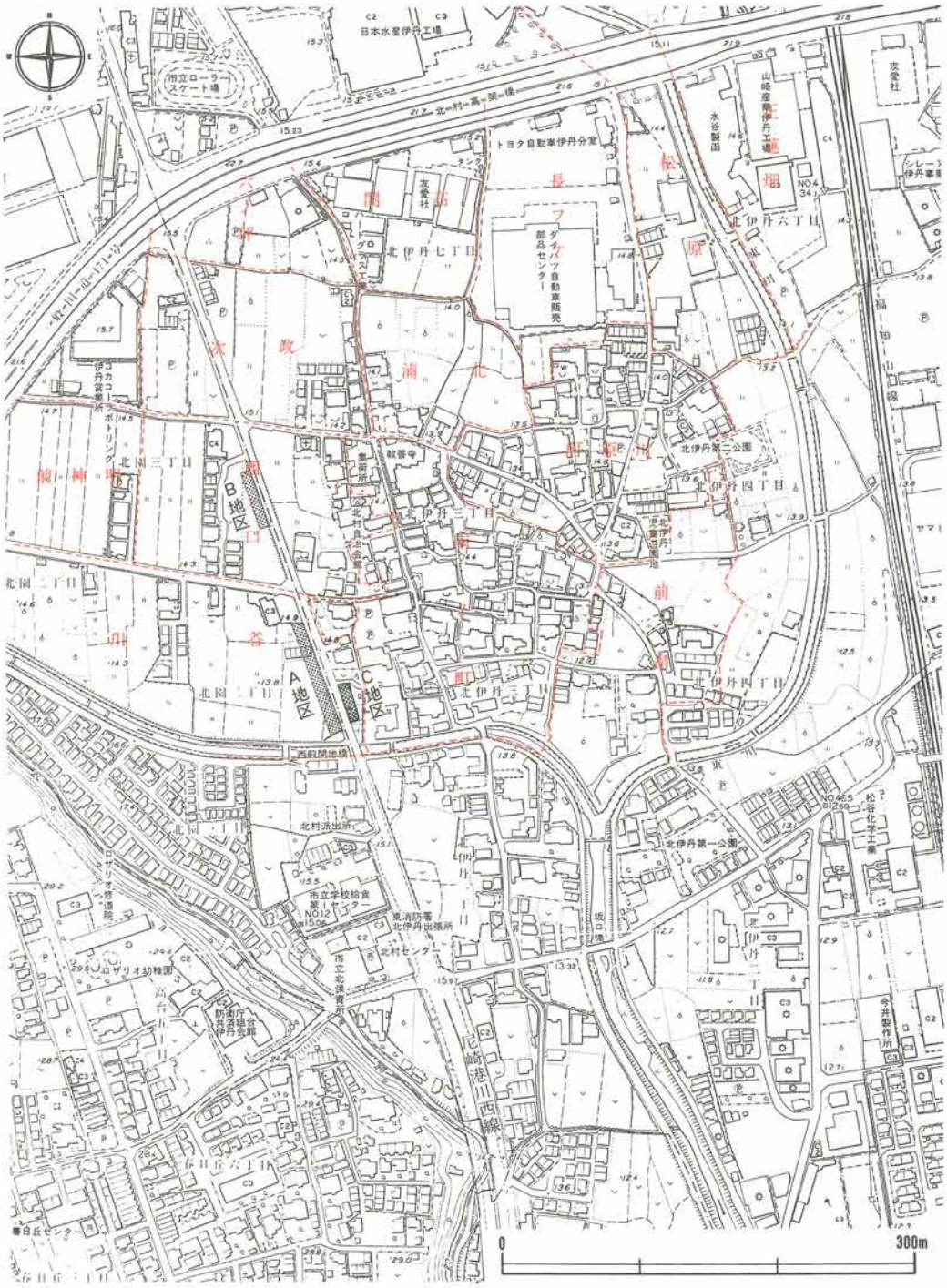
確認調査（第１次確認調査）では工事予定地内に２×２ｍの坪を17箇所設定した。調査の結果、17箇所の坪すべてに遺物包含層を確認し、土器の出土をみた。うち坪１～３・５と坪11では遺構を確認した。しかしこの調査では正確な遺構の広がりを把握するには不充分であったため、再度確認調査を実施した。

第２次確認調査は、村上、藤田　淳（社会教育・文化財課技術職員）の両名が担当し、昭和62年１月７日～14日にかけて実施した。この確認調査の結果、３箇所の地区（Ａ～Ｃ地区）で柱穴・流路等の遺構を検出した。

この２次にわたる確認調査の結果をもとに、西宮土木事務所伊丹出張所と遺跡の取扱いについて再度協議を行った。協議の結果、遺構が検出された３箇所の地区について全面調査を実施することになった。

全面調査は、発掘作業を株式会社染の川組に委託し、昭和62年２月２日から３月９日にかけて実施した。

調査は村上、甲斐昭光、別府洋二の３名が担当した。３名の担当者のうち別府は、甲斐の転出に伴い、甲斐に変わって担当者となり調査に従事した。



第１図　調査区位置図・周辺字限図

第２節　発掘調査の経過

１．１・２次確認調査

確認調査では、１次・２次を通じて、26箇所の坪（２×２ｍ）と３本のトレンチを設定した。坪およびトレンチの配置は第３図に示すように、道路を挟んだ東側と西側の両方にある。No.１～No.19までが１次確認調査の際に設定したもので、すべて坪である。No.20以降は２次確認調査において設定したもので、坪とトレンチを併用している。

１次確認調査ではすべての坪で黄灰・灰色シルトの中世遺物を含む層が認められた。そのうち、遺構が検出された坪はNo.１・３・５・11・18・19の６箇所である。これらはすべて道路西側部分にある。また、２次確認調査で遺構が検出された坪およびトレンチは、No.20・21・24・25・27の５箇所である。これらは、大きくは南半部のNo.１・３・５・20・21・27と北半部のNo.11・18・19・24・25に分かれる。

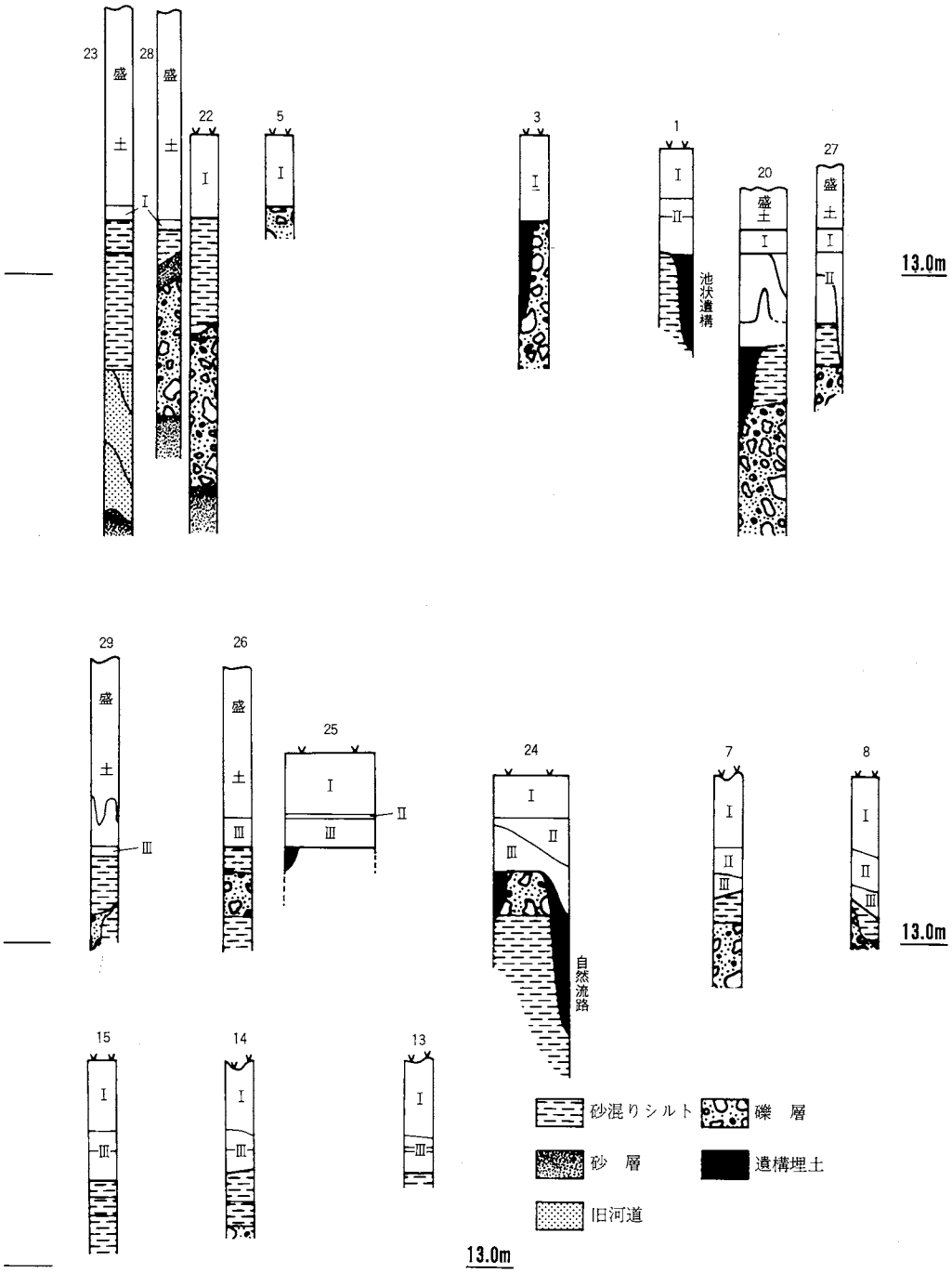
検出された遺構の内容は、南半部ではNo.１で室町時代の溝があり、瓦と天目茶碗が出土した。No.３・５では平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物の一部が検出された。No.20・21・27では室町時代の溝と水田状の遺構が検出され、少なくとも３時期以上の遺構面に分かれると判断された。北半部では、No.11・18・19で掘立柱建物の一部と土壙が検出された。No.24では鎌倉時代の遺物包含層の直下で、溝状遺構の東肩が検出された。No.25では同じく鎌倉時代の遺物包含層の直下で、ほぼ南北方向にのびる溝が２本検出された。

この結果、鎌倉時代～室町時代の遺構が分布する範囲は、南半部では、道路西側の駄六川北岸～No.22までの範囲と、道路東側の駄六川北岸～No.２までの範囲、北半部では、道路西側のNo.24西端～No.25東端までの範囲と判断した。

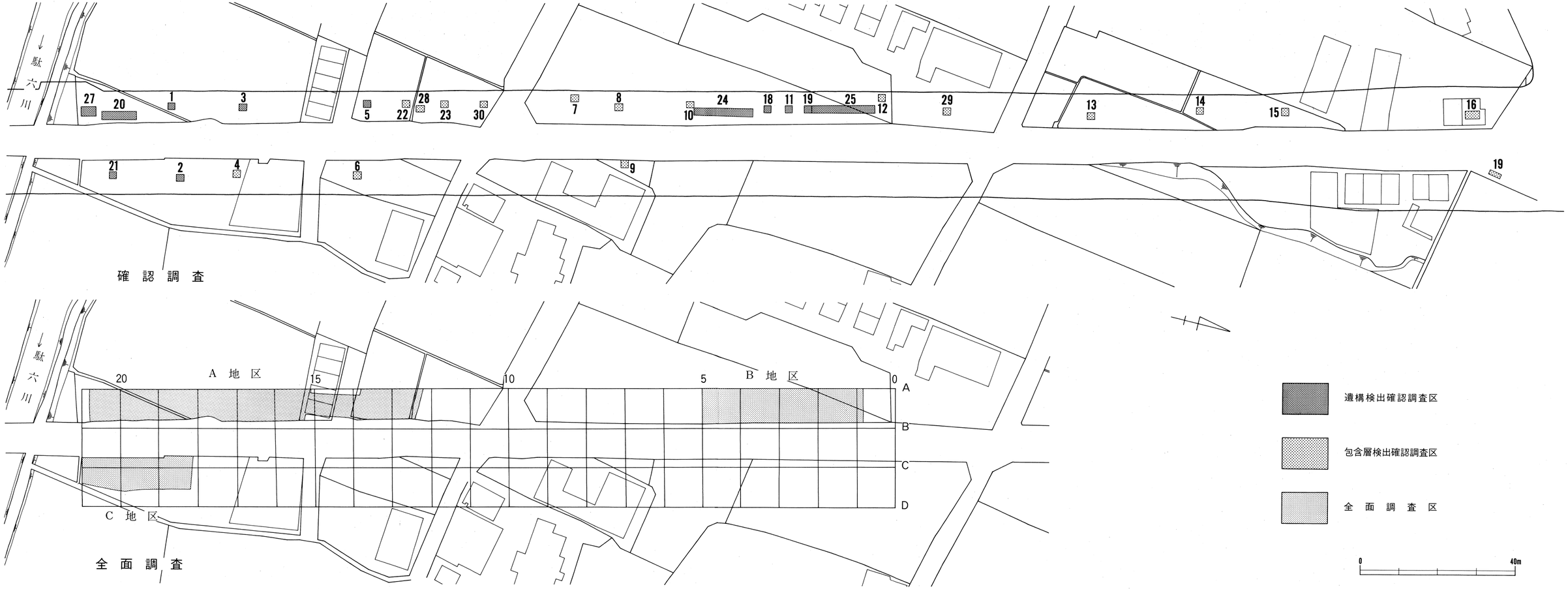
このほか、No.23では中世の遺物を含む包含層の下に弥生土器片が出土した旧河道を検出したが、遺物量が極めて少なく、木製品なども含んでいないため、全面調査の対象からは除外してよいと判断した。

次に、道路西側について、坪およびトレンチの断面を柱状図状に表したものを第２図に示す。

No.７以北ではⅢ層が中世の遺物を含む層であり、この層の直下が同時期の生活面と考えられる。遺構が検出されたNo.24～No.25の付近が最も高く、これより北および南ではわずかであるが、高度を下げていることがわかる。No.23以南でも掘立柱建物などが検出されたNo.５周辺が遺構面となる礫層の高度が最も高く、南側の駄六川へ向かって緩やかに高度を下げ、No.１付近からやや急激に低くなる。駄六川に近いNo.20・27では、これ以北で１面であった遺構面が、２面あるいは３面と重複している。No.20では、畦畔状の隆起の存在を明瞭に観察することができよう。



第２図　確認調査土層柱状図



第3図　確認・全面調査区位置図

2．全面調査

昭和61年11月、昭和62年１月の２回にわたり実施した坪・トレンチによる確認調査の結果、３箇所の地区で中世の柱穴・畝状遺構等が検出された。この確認調査の成果をもとに、兵庫県教育委員会と工事担当部局である兵庫県西宮土木事務所伊丹出張所との間で北園遺跡の取扱いについて協議を行った。協議の結果、遺構が検出された３箇所の地区（Ａ～Ｃ地区と呼称）について全面調査を実施し、記録保存することになった。

全面調査は、２月２日から同月20日までは技術職員村上泰樹・甲斐昭光の両名が調査を担当し、２月23日からは村上・別府洋二の両名が担当した。

発掘作業は株式会社染の川組に委託した。また遺跡の気球による空中写真撮影は株式会社ワールド航測に委託した。

調査対象区域は調査の便宜上、Ａ・Ｂ・Ｃ地区と分けた。調査は道路拡幅工事の工程の都合からＢ→Ａ→Ｃ地区の順で行い、Ａ地区については発掘調査で生ずる廃土処理の問題で３分割して調査を行うことになった。

調査の方法

調査を開始するにあたり、３箇所（Ａ～Ｃ地区）の調査地区全体に１辺10ｍの方眼を設定し、遺物の取り上げ・記録作業の基準として活用した。この方眼は、Ｂ地区の北側８ｍの所に基準点を設けた。基準点から東方向に10ｍ毎にＡ～Ｄの名称を付し、南方向には０～21の番号を付した。各方眼の名称は北西隅のポイント名を呼称した。その地区割りによれば、Ａ地区はＡ－12～21区（約663㎡）、Ｂ地区はＡ－０～４区（約343㎡）、Ｃ地区はＢ・Ｃ－18～20区（約226㎡）にそれぞれ該当する。

耕土および床土（Ⅰ層）はバックフォーによる機械掘削とし、包含層（Ⅱ・Ⅲ層）・遺構埋土は人力で掘削した。各調査地区の機械掘削が終了した時点で、調査区の東・西端の壁際に沿って幅50㎝の溝（以下側溝と呼称）を掘削し、遺構検出面の確定と排水用の溝として活用した。

また、Ａ地区については、遺跡の地形的な立地を知るため、高橋　学（立命館大学大学院）氏の指導を得て深掘りトレンチを設定することになった。

調査の経過

調査は昭和62年２月２日からＢ→Ａ（Ａ－12・13、Ａ－14～17区）→Ｃ→Ａ（Ａ－18～20区）地区の順で開始した。

Ｂ地区は２月２日より耕土・床土をバックフォーによって除去した。２月３・４日の両日にわたって包含層を人力で掘削し、遺構検出面の精査を行い、掘立柱建物跡・溝・流路を検出した。翌日からこれらの遺構を調査した。２月６日迄に遺構の掘削を終了したため、２月９日に遺跡の全景写真を撮影した。写真による記録作業終了後、遺構実測を開始し、２月10日にすべての作業を終了した。

Ａ地区は上述した理由で調査区をＡ－12・13区、Ａ－14～17区、Ａ－18～20区に３分割して調査した。Ａ－12・13区は２月９日に耕土・床土をバックフォーによって除去した。翌10日に包含層を人力で除去した後、遺構検出面の精査を行った。精査の結果、溝、土坑、掘立柱建物跡を検出した。２月11日には全ての遺構検出が終了したため全景写真を撮影した。２月12日には遺構の実測を終了し、その後柱穴の断ち割りを実施した。２月16日にはすべての作業を終了した。

Ａ－14～17区は２月12・13日の両日で耕土・床土をバックフォーによって除去した後、14日には人力による包含層掘削・遺構検出面の精査を終了した。精査の結果、掘立柱建物跡、土坑、溝の遺構が検出された。２月19日にはこれらの遺構の掘削が終了したため、空撮のため遺跡の清掃作業を実施した。気球による遺跡全景写真を２月20日に実施した後、２月24日まで遺構の断ち割り等の諸作業を実施した。調査の最終日には、高橋　学氏の指導を得て当地区に深掘りトレンチを設定し、バックフォーで掘削した。

Ａ－18～20区は、Ｃ地区の調査がほぼ終了した２月27日より調査を開始した。バックフォーで耕土を除去した後、遺構検出面の精査を実施した。精査の結果、畝状遺構の下層に大量の瓦が投棄された落ち込み（池状遺構）が確認された。３月４日には上層の畝状遺構の検出が終了したため、３月５日に２回目の気球による遺跡写真撮影を実施した。その後３月７日まで池状遺構の検出を行い、３月９日まで実測等の記録作業を実施した。

Ｃ地区の調査は、Ａ－14～17区の調査と並行して行った。２月20まで機械掘削・人力掘削によって耕土・包含層を除去し精査を行った。精査の結果、畝状遺構が検出された。２月27日には畝状遺構の検出を終了した。その後３月４日まで遺構実測、写真撮影等の作業を実施した。

以上の経過を経て、３月９日に北園遺跡の調査をすべて終了した。

発掘調査体制

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

事務担当	課　長	北村　幸久		技術職員	藤田　淳
	参　事	森崎　理一	全面調査担当		
埋蔵文化財調査係長		大村　敬通		技術職員	村上　泰樹
	主　査	井守　徳男		同	別府　洋二
調査担当				同	甲斐　昭光
第１次確認調査				調査補助員	河野　克人
	技術職員	村上　泰樹		同	辰己　孝行
	同	市橋　重喜		事務員	角谷　雅英
第２次確認調査				室内作業員	角谷祐岐子
	技術職員	村上　泰樹		同	川西　幸子

第３節　整理作業の経過

北園遺跡から出土した遺物は、コンテナー・バットに換算すると77箱を数える。その内訳は、瓦、弥生土器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、国産陶器、中国製磁器、石製品、鉄製品、木製品と多彩である。これらの遺物のなかでは、瓦が量的に一番多く出土している。

整理作業は、昭和62年度・平成２年度の２箇年にわたって実施した。昭和62年度は出土遺物の水洗、ネーミング、瓦・土器の接合・復元作業を行った。これらの諸作業と並行して、出土遺物の検討を行いながら実測遺物の抽出を行った。

平成２年度の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。昭和62年度の実績を踏まえ、瓦、土器、鉄製品、木製品の実測等出土品の資料化を行った後、遺物の写真撮影、遺構・遺物のトレース、レイアウト等の報告書作製作業を行った。整理作業に２年間の空白期間があったため、鉄製品の劣化が心配された。平成２年度の整理作業では、実測および写真撮影が終了した段階で出土鉄製品の保存処理も併せて実施した。

整理体制は以下の通りである。

昭和62年度整理体制

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

事務担当	課長	北村　幸久
	参事	森崎　理一
	課長補佐	福田　至宏
整理事務担当		
	課長補佐	松下　　勝
	主査	小川　良太
	主任	岡田　章一
整理担当		
	技術職員	村上　泰樹
	同	甲斐　昭光
	補助員	森岡みゆき
	同	二階堂　康
	同	岡崎　輝子
	同	奥林由季子
	同	吉田由起子

平成２年度整理体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

事務担当	所長	内田　隆義
	副所長	村上　紘揚
	総務課長	小池　英隆
整理事務担当		
	整理普及課長	松下　　勝
	技術職員	岸本　一宏
保存処理担当		
	主任	加古千恵子
	技術職員	別府　洋二
整理担当		
	主任	村上　泰樹
	技術職員	甲斐　昭光
	嘱託職員	森本　貴子

第２章　遺跡の環境

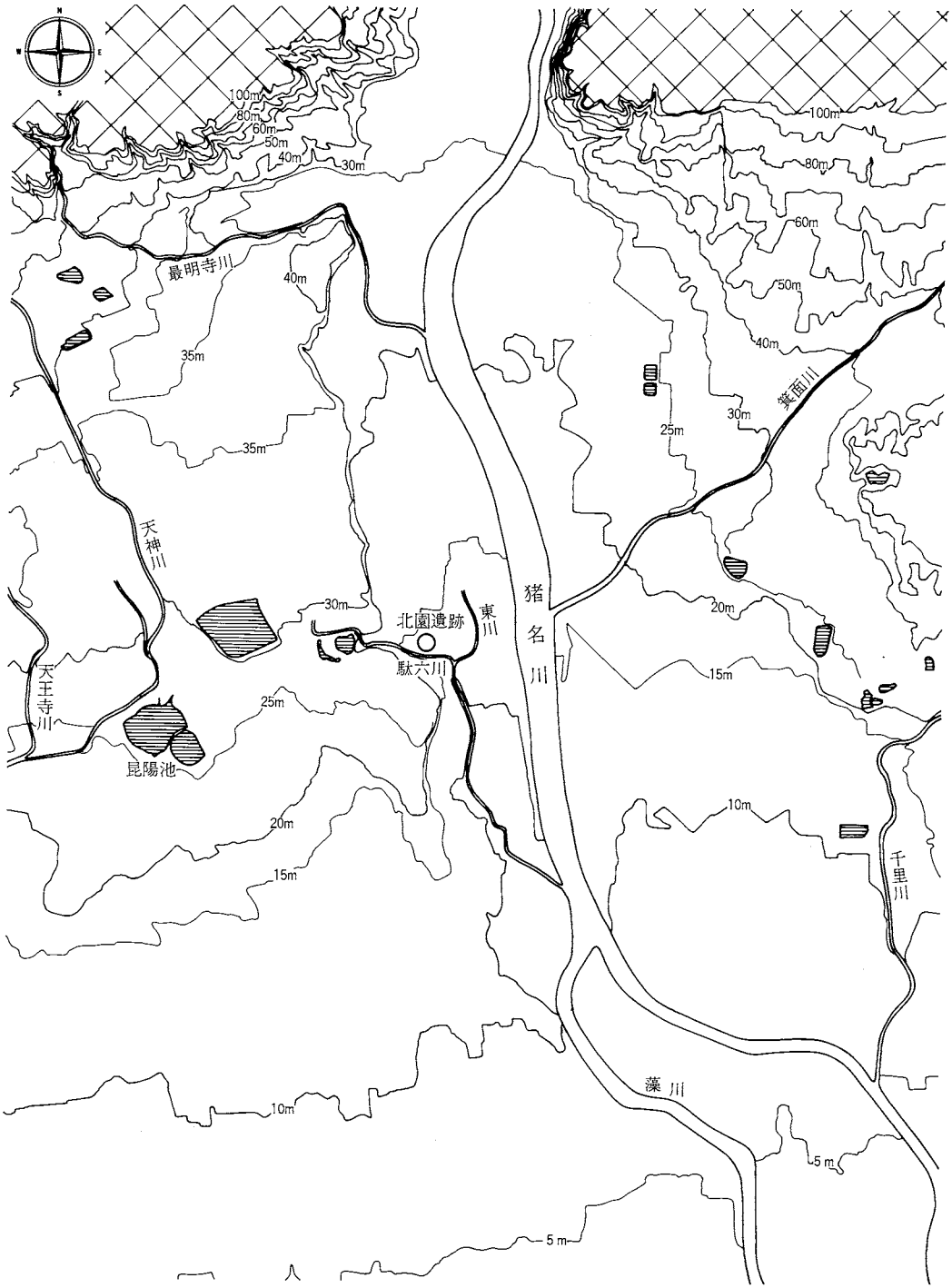
第１節　地理的環境

北園遺跡は、兵庫県伊丹市北園字谷川・西ノ口にあり、伊丹市の北側に位置する。伊丹市は兵庫県の南東部に位置し、川西・宝塚・西宮・尼崎市等の県内各市と隣接している。東は大阪府池田・豊中市の各市と境界をなしている。

地形的に概観すると、遺跡の所在する伊丹市は西を六甲山地、北を北摂山地、東を千里丘陵で囲まれた西摂平野のほぼ中央に位置する。伊丹市域の西摂平野は、北摂丘陵の長尾山丘陵から南に張り出す洪積段丘（伊丹台地）と伊丹市と豊中市の境界をなす猪名川の運ぶ土砂によって形成された沖積地とからなる。この猪名川の左岸域には、北に標高610ｍ前後の鉢伏山・明ケ田尾山を主峰とした支尾根、東は千里丘陵等の山地が控えている。これらの山地の間には、池田市五月丘地区・豊中市刀根山地区を中心に標高50ｍで限られる五月山丘陵・刀根山丘陵等をはじめとした洪積中位・下位段丘、沖積段丘が発達している。五月山丘陵・刀根山丘陵の間には大規模な扇状地が形成され、その先端部分は猪名川まで及んでいる。

猪名川右岸では、前述したように伊丹台地と呼ばれる洪積下位段丘が南側に張り出し、その南限は標高10ｍの等高線付近まで及んでいる。猪名川左岸・右岸に発達したこれらの段丘と、猪名川流域に形成された沖積地が伊丹市周辺の地形を特徴付けている。また猪名川下流域は、縄文海侵が現在の阪急神戸線付近にまで及んでおり、これより南側に展開するいわゆる尼崎平野の形成は縄文海侵以降に生じたと考えられている。北園遺跡は、猪名川右岸の沖積地の微高地上に立地している。標高13.5ｍ前後の地点である。さらに微視的に見ると、遺跡は猪名川の支流である駄六川、東川の両河川に挟まれた範囲にあり、これら両河川は遺跡の南側で合流し、猪名川と繋がる。遺跡の位置は駄六川側に位置しており、おそらく遺跡の立地する微高地の成因は主として駄六川の氾濫と深い繋がりをもっていたと推察される。第２図は、確認調査坪・トレンチ柱状土層図である。この柱状土層図を概観すると、微高地の発達過程は、現認できる最下層に礫が起伏に富んだ状態で堆積した後、徐々に砂混じりシルトないしはシルトが堆積し、起伏の凹部を埋めて平坦化していったと推察される。北園遺跡はこのような堆積過程を経て地表面が安定した地形の上に立地している。

参考文献　前田保夫　「田能遺跡の地質構成と尼崎の自然史」『田能遺跡発掘調査報告書』
尼崎市教育委員会1982
南　博史　「遺跡の位置」『伊丹市口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書』
伊丹市教育委員会・（財）古代學協会1988



第４図　遺跡周辺等高線図

第２節　歴史的環境

従来当地域においては、伊丹市伊丹廃寺、尼崎市田能遺跡など著名な遺跡の存在は早くから知られていたものの、遺跡の分布は希薄であると考えられていた。しかし近年、伊丹台地上での宅地開発や、猪名川流域の沖積地に拡がる市街地の再開発事業等の増加により、発掘調査件数も増え、新たな遺跡の発見が相次いでいる。

ここでは、猪名川中流域の伊丹市東部、尼崎市北部、大阪府豊中市、池田市の一部を含めた地域の弥生時代以降の遺跡を対象にして、北園遺跡の歴史的な環境について概観する。

弥生時代

当地における弥生時代の遺跡は、現在のところ川西市の猪名川西岸地域、伊丹市南部の猪名川東岸を中心とする地域の２つの地域に集中している。川西市の猪名川西岸には、前期から開始される栄根遺跡・下加茂遺跡が知られている。

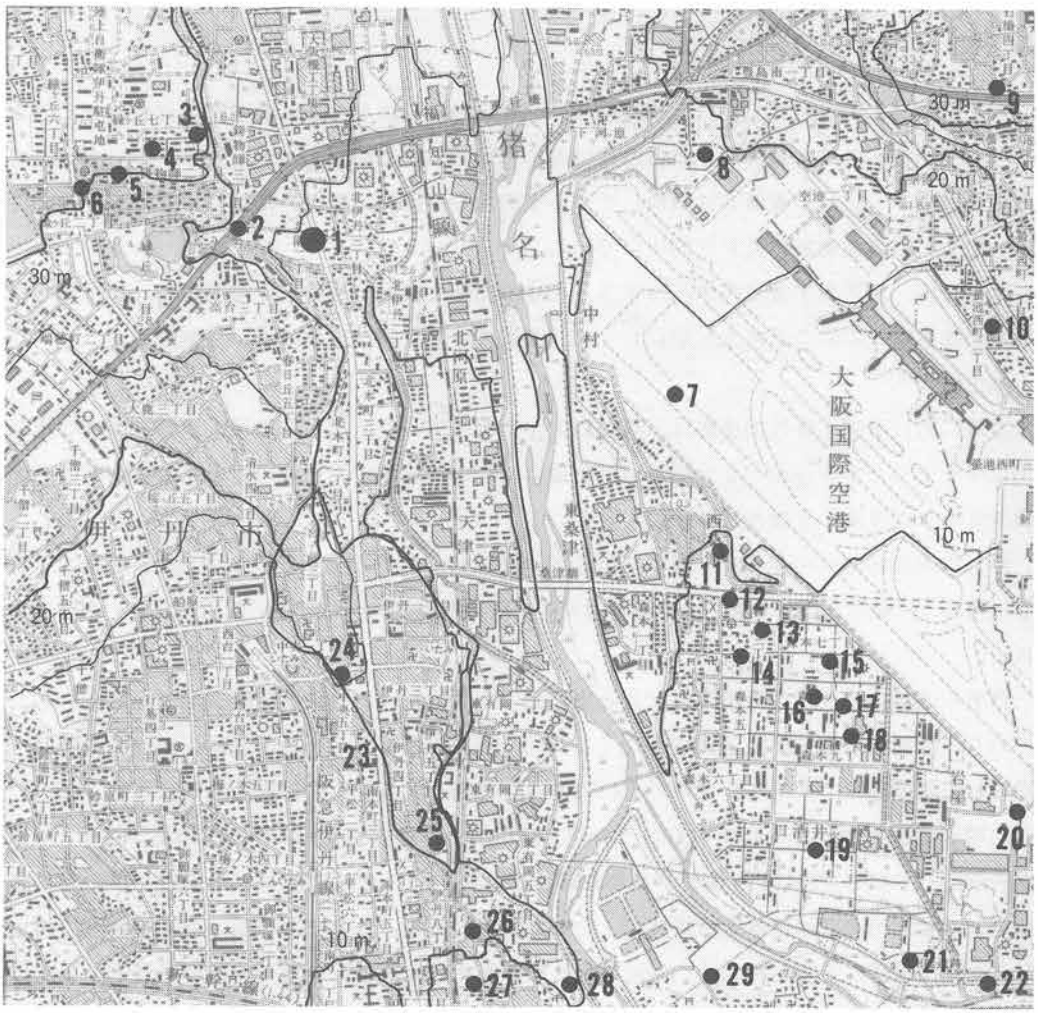
伊丹市南部の猪名川東岸に位置する前期の遺跡には、伊丹市大阪空港Ｂ遺跡[1]、森本３丁目地区遺跡[2]、森本９丁目遺跡[3]、口酒井遺跡[4]、原田西遺跡[5]、尼崎市田能遺跡[6]などが挙げられる。

猪名川流域の弥生時代の遺跡は、武庫川流域のそれに比べて集中的、継続的であるといわれており、後期まで継続する遺跡が少なくない[6]。伊丹市森本３丁目地区遺跡、口酒井遺跡[4][7]、尼崎市田能遺跡などであり、なかでも口酒井遺跡（第９次調査）では後期の竪穴住居、壺棺、円形周溝墓などが検出されている。この他、豊中市蛍ケ池西遺跡[8]、伊丹市西桑津遺跡[9]、森本居館跡[10]、北村遺跡[11]でも後期の遺物が確認されている。北村遺跡は、下水道工事の際に発見された駄六川北岸に位置する遺跡で、今回の調査の結果、僅かながら前・後期の遺物の出土をみた北園遺跡に近接している。先述した２つの集中地域の他に、市域北部の伊丹台地東麓付近にも前期以来の集落が営まれていた可能性を示すものである。

古墳時代

古墳時代に入ると集落遺跡の増加が認められる。後期の遺跡には、伊丹市南部猪名川東岸の原田西遺跡、西桑津遺跡、森本遺跡群（第５・６次調査）[12]、森本９丁目遺跡の他、北村遺跡、有岡城跡（第１・４・５・11・18次調査）[13]、小坂田遺跡[14]、池田市宮之前遺跡[15]、豊中市蛍ケ池西遺跡で確認された遺構、遺物が知られるようになる。

また、当地域では、早くからの市街地化の進行によって削平された古墳が、少なからず存在することが判明しつつある。緑ケ丘遺跡第１・３次調査の際には、円筒埴輪や須恵器などが出土し、台地上に多く存在したという緑ケ丘古墳群の存在を裏付けている[16]。この他、有岡城跡の砦である女郎塚砦、鵯塚砦は埴輪やガラス小玉の出土から、ともに中期古墳を利用したものであることが判明した[17][18]。また、尼崎市蛍塚古墳や池田市宮之前遺跡で検出された方墳等の



第５図　北園遺跡周辺の主要遺跡

1．北園遺跡（弥生前期・後期、古墳・中世）
2．北村遺跡（弥生後期・古墳～中世）
3．緑ケ丘遺跡第２次調査地点（弥生・古墳・中世）
4．緑ケ丘遺跡第１次調査地点（縄文・古墳・奈良）
5．伊丹廃寺（白鳳時代）
6．猿ケ山城跡
7．大阪空港Ｂ遺跡（縄文後期～弥生前期）
8．小坂田遺跡（古墳後期）
9．宮ノ前遺跡（旧石器・弥生中期・古墳後期・中世）
10．蛍ケ池西遺跡（旧石器・弥生後期・古墳後期）
11．森本遺跡第２次調査地点（縄文後・晩期・奈良・中世）
12．森本遺跡第６次調査地点（古墳後期・室町時代）
13．森本３丁目地区遺跡（弥生前期・後期・古墳前期）
14．森本居館跡（弥生後期・室町時代）
15．森本鶴田遺跡（縄文後期～晩期、中世）
16．森本遺跡第５次調査地点（古墳後期・室町時代）
17．森本遺跡第４次調査地点（中世）
18．森本９丁目地区遺跡（縄文後・晩期・古墳後期・中世）
19．口酒井遺跡（縄文晩期～弥生後期・古墳・平安時代）
20．原田西遺跡（弥生前期～古墳・室町時代）
21．田能遺跡（弥生前期～後期）
22．猪名川川床遺跡（縄文晩期・弥生・古墳）
23．有岡城跡（縄文後期・古墳・中世～近世）
24．女郎塚古墳（古墳中期）
25．鵜塚古墳（古墳中期）
26．蛍塚古墳（古墳後期）
27．北畑遺跡（弥生～古墳）
28．猪名寺廃寺跡（古墳・白鳳～室町）
29．春日神社遺跡（弥生～古墳・鎌倉時代）

存在も知られており、口酒井遺跡[19]や猪名寺廃寺[20]でも埴輪片が出土している。

奈良時代

奈良時代になると、当地域には法隆寺式伽藍配置をもつ白鳳時代の伊丹市伊丹廃寺[21]、尼崎市猪名寺廃寺[20]、川西市栄根寺廃寺[22]などの古代寺院が建立される。

平安時代

伊丹廃寺は、13世紀末頃に廃絶するまでの間、火災により平安時代後葉に再建されたことが判明している。再建時に使用された瓦は、金堂基壇を利用した3基の瓦窯で焼成されている巴文軒丸瓦であり、北園遺跡で出土した多くの瓦に酷似している。

口酒井遺跡では、平安時代中期の掘立柱建物などの遺構が検出され、同時期の溝は、その方向から条里の痕跡を示すものとされている。

平安時代後期の遺構は、原田西遺跡で掘立柱建物などが検出され、有岡城跡の調査でも、第17次調査等で土壙墓などが確認されている[23]。

鎌倉・室町時代

中世の伊丹には、伊丹姓を名乗る武士団が登場する。鎌倉時代末（1309年）には確実に存在し、摂関家の荘園である橘御園の代官にあたる要職にあったと思われる。1353年に伊丹城が攻撃され、防御しえたとの記録があることから、代官の居館として利用されていたものを、戦闘に耐える城塞としてこの頃までに整備したと考えられている。発掘調査でも、15世紀後半に主郭の拡大を裏付ける成果が得られた[24]。

また、猪名川を挟んで伊丹城跡の対岸にある森本居館跡でも室町時代の土師器、瓦器などが出土しており、森本遺跡群第5・6次調査でも室町時代後半の土器が確認されている。

これより北方の北村周辺には『寛文年間北村絵図』、『寛文十年新田中野村・大鹿村堤相論裁許絵図』等の絵図が保存されており、これには猿ケ山城跡、城の中城跡といった城跡、城跡あるいは構居跡と思われる良連寺寺家屋敷跡が示されている。猿ケ山城跡は発掘調査が実施され、遺物が伴わないものの、東西方向、南北方向の2本の空堀状の遺構が検出されており、絵図にある城北端部の堀跡と考えられている[25]。

この他、中世の遺物が出土した遺跡に、北村遺跡、緑ケ丘遺跡（第2次調査）[26]、西桑津遺跡（第2次調査）、森本鶴田遺跡[27]、春日神社遺跡がある。

また、北園遺跡に近い北村の教善寺（1496年創建）には、室町時代の作とされる阿弥陀如来立像が安置されており、これは伊丹廃寺近くの良蓮寺から戦火を逃れて移されたものという[28]。

安土・桃山時代

1574年には荒木村重が摂津守として伊丹城に入り、その前後から伊丹城は初の惣構えをもつ城として変貌を遂げることとなる。有岡城と改名されたのもこの時である。絵図によれば、主郭、内郭（侍屋敷）、外郭（町家）が配置され、3つの砦と12の寺が窺える。この有岡城跡は

昭和50年以来発掘調査が行われ、主郭での建物跡の検出、堀跡、女郎塚砦の確認等成果をあげつつあり、昭和54年には国史跡の指定を受けた[29]。

江戸時代

1579年、織田信長の軍により有岡城が落城した後も、その城下町は伊丹郷町として酒造業を発達させ、町の政治も惣宿老制とよばれる自治組織により運営されていた。町の内容とその変遷は絵図によって知ることができ、近年の発掘調査によって詳細が明らかになりつつある。

註）

(1)佐原　真・高井悌三郎　1971「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』第一巻　伊丹市
(2)浅岡俊夫　1985「森本３丁目地区遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和57年度』兵庫県教育委員会
(3)浅岡俊夫　1988「森本９丁目遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(4)浅岡俊夫　1984「口酒井遺跡（第９次調査）－穴森弥生墓地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和56年度』兵庫県教育委員会
浅岡俊夫　1987「口酒井遺跡（第12次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
(5)柳本照男ほか　1981『原田西遺跡－猪名川流域原田下水処理場拡張工事に伴う調査報告－』猪名川流域原田処理場遺跡調査団
加古千恵子　1984「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和56年度』兵庫県教育委員会
森内秀造　1986「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』兵庫県教育委員会
(6)福井英治ほか　1983『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会
(7)下條信行・南　博史　1988『口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書－』伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会
(8)伊藤雅文・山元　健ほか　1988『蛍ケ池西遺跡』豊中市教育委員会
(9)浅岡俊夫　1987「西桑津遺跡（第２次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
(10)浅岡俊夫　1988「森本居館跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(11)浅岡俊夫　1988「北村遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(12)浅岡俊夫　1988「森本遺跡群（第５次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(13)浅岡俊夫　1986「有岡城跡（第11次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』兵庫県教育委員会
浅岡俊夫　1988「有岡城跡（第18次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(14)平成元年度、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が確認調査を実施した。
(15)宮之前遺跡調査会　1970『宮之前遺跡発掘調査概報』
田上雅則　1989「宮の前遺跡発掘調査」『池田市埋蔵文化財発掘調査概報　1988年度』池田市教育委員会
(16)村川行弘・浅岡俊夫ほか　1986『伊丹市緑ケ丘遺跡』伊丹市教育委員会
(17)浅岡俊夫　1988「有岡城跡（第20次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(18)伊丹市教育委員会　1989『埋蔵文化財保護の手引き』
(19)浅岡俊夫　1987「口酒井遺跡（第13次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
泉　拓良　1988「口酒井遺跡（第15次）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
浅岡俊夫　1988「口酒井遺跡（第16次）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(20)岡田　務　1984『尼崎市猪名寺廃寺跡』尼崎市教育委員会
(21)高井悌三郎ほか　1966『摂津伊丹廃寺跡』伊丹市教育委員会
(22)岡野慶隆　1987「栄根寺廃寺（第１次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
(23)大手前女子学園有岡城跡調査委員会　1986『有岡城と伊丹城』
(24)浅岡俊夫「有岡城跡（第14次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
(25)浅岡俊夫　1986「猿ケ山城跡・伊丹廃寺跡（第14次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』兵庫県教育委員会
(26)浅岡俊夫　1988「緑ケ丘群集墳（緑ケ丘遺跡第２次）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会
(27)浅岡俊夫　1987「森本鶴田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会
(28)毛利　久　1970「伊丹の仏教彫刻」『伊丹市史』第６巻　伊丹市
(29)鈴木　充ほか　1976『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ』伊丹市教育委員会
鈴木　充ほか　1977『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市教育委員会
鈴木　充・浅岡俊夫ほか　1978『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲ』伊丹市教育委員会
鈴木　充・浅岡俊夫ほか　1979『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ』伊丹市教育委員会
浅岡俊夫　1983『有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ』伊丹市教育委員会
小長谷正治ほか　1988『兵庫県伊丹市有岡城跡発掘調査報告書Ⅵ』伊丹市教育委員会・駒沢大学考古学研究室

第３章　調査の結果

第１節　調査の概要

北園遺跡は、伊丹台地の東麓に位置し、遺跡の南端を東流する駄六川および東側を南流する猪名川によって形成された標高約13.5ｍの微高地上およびその周辺に立地している。

微高地上は、平安時代後期から室町時代にかけての掘立柱建物などが確認され、また、庭園遺構、瓦の出土から寺院として利用されていたことが判明した。これに対して、その南側の低地には、奈良時代の遺物を含む駄六川の旧河道が認められた。河道上層にある室町時代末～江戸時代初頭の遺構面では、畑と思われる畝状遺構が検出されたことから、この時期には生産の場として利用されていた。

調査区内の土層堆積状況は以下のとおりである。Ａ～Ｃ各地区とも調査区の西壁実測図を第６・７図として掲載している。

微高地上の堆積は、上から順にⅠ層・Ⅲ層・Ⅳ層となっている。

Ⅰ層は現在の耕作土であり、耕土、床土に分け、それぞれａ層、ｂ層とよぶ。この層からは平安後期以降現代までの遺物が出土している。部分的にこの上に道路等の盛土が認められた。

Ⅲ層は、Ｂ地区にのみ認められた堆積物であり、中世を主体とする遺物が含まれる。弥生時代後期の土器もこの層から出土している。

Ⅳ層は、いわゆる地山であるが、柱穴の断ち割り時に出土した２片の弥生時代前期の土器をⅣ層のものと捉えているため、この微高地の形成は弥生時代前期以降と考えなければならない。このⅣ層上面では、古墳時代から中世にかけての多くの遺構が認められた。Ⅳ層よりも下層については、Ａ－16区以南のⅣ層以下を深さ２ｍまで重機で掘り下げて断面観察を行った。その結果、Ⅳ層上面以下には土壌層は認められなかったため、旧地表面の存在は否定された。

微高地よりも南側の部分、すなわちＡ地区のＡ－19区以南およびＣ地区については、Ⅰ層とⅣ層の間にⅡ層が厚く堆積している。Ⅱ層は、南側を東流する駄六川の供給による堆積物である。いくつかの旧地表面が確認され、それぞれａ、ｂ、ｃの３層に分けて調査を行った。この地表面はすべて水田土壌と考えられ、Ⅱｂ層上面で平面的に検出しえた畝状遺構のように、島畑として利用されていた可能性が高い。Ⅱａ層からは室町時代末～江戸時代初頭の遺物が出土している。以下、確認された主要な遺構、遺物について各時代ごとに概観する。

室町時代末～江戸時代初頭の遺構と遺物

Ａ地区のＡ－19区以南およびＣ地区のⅡｂ層上面で検出された畝状の遺構がある。Ａ地区の畝状遺構２の南北方向の畦が、現在の水田畦畔の直下にあたることから、現況の地割りが少な

くとも江戸時代初頭までは遡ることが判明した。

平安時代後期から室町時代の遺構と遺物

平安時代後期から室町時代の遺構は、微高地上のⅣ層上面で検出された掘立柱建物、溝、土坑など、および微高地南縁のⅡｃ層上面で確認された池状遺構である。

掘立柱建物は９棟検出されたが、全容の知れるものはない。建物を構成する柱穴から出土した金属器、瓦、土器などは、当時期におさまると考えてよい。これら建物の南には、瓦葺き建物の廃棄に伴うと思われる土坑群を検出した。また、微高地南縁の池状遺構では、最下層より五輪塔形卒塔婆が１点出土している。土坑、池状遺構から出土した瓦には梵字瓦を含んでいる。

奈良時代の遺物

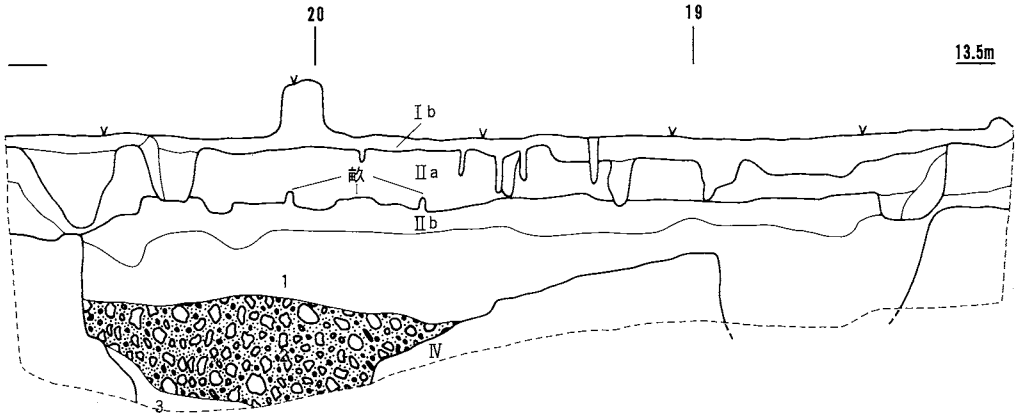
Ｃ地区南端の流路２は完掘できなかったが、埋土中より瓦片、瓦器とともに奈良時代の須恵器坏が１点出土した。流路２は駄六川の旧流路と考えられ、駄六川の上流域に同時期の遺構が存在する可能性が指摘される。

古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、Ｂ地区Ⅳ層上面で検出された自然流路（流路１）のみである。上層から６世紀後葉、下層から６世紀第２四半期の土器が出土している。

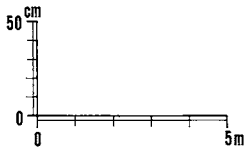
弥生時代の遺物

Ⅲ層から弥生時代後期の土器、Ⅳ層から弥生前期の土器が各２点出土した。微高地の形成時期を考える資料としても重要である。なお、この時期の遺構は確認されていない。

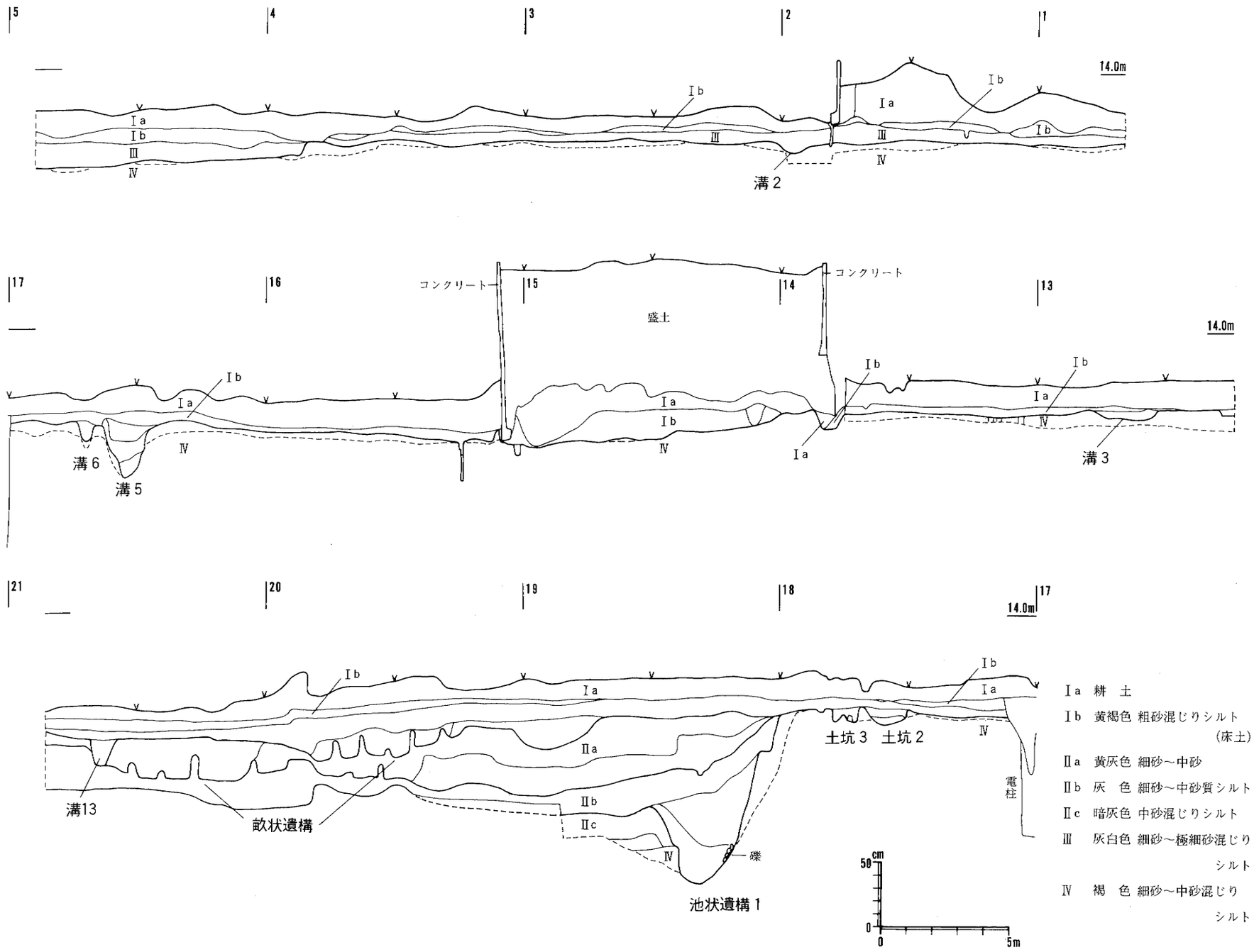


Ⅰb　黄褐色 粗砂混じりシルト
Ⅱa　暗灰色 粗砂混じりシルト
Ⅱb　青灰色 中砂混じりシルト
Ⅳ　褐　色 細砂～中砂混じりシルト

1．中砂混じりシルト
2．砂礫・砂層（ラミナ状に堆積）
3．極細砂質シルト（植物遺体を含む）



第６図　Ｃ地区西壁土層断面図



第７図　Ａ・Ｂ地区西壁土層断面図

第2節　遺　　構

1．室町時代末から江戸時代初頭の遺構

該当する時期の遺構は、A地区南側、A－19～21区とC地区から出土した畝状遺構1・2である。いずれも旧駄六川によって微高地の縁辺を侵食され生じた低地部分につくられている。

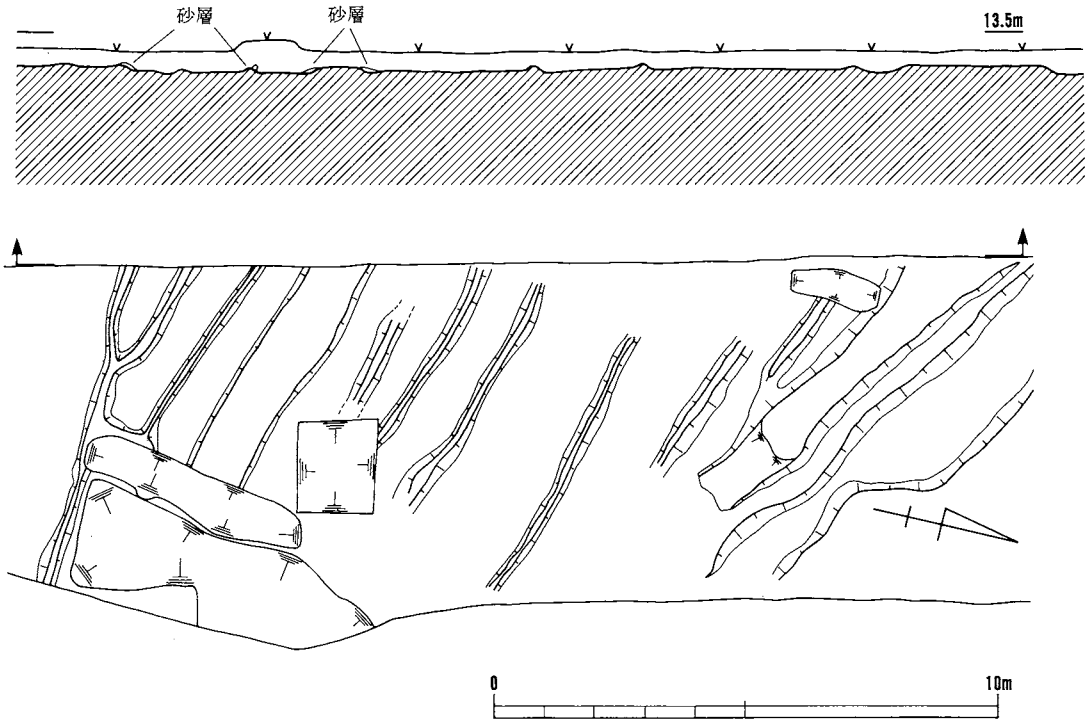
報告は省略したが、C地区では、耕土を除去した段階で江戸時代の遺構面を確認した。遺構は溝・落ち込みが主体で伊万里焼をはじめ、たくさんの近世陶磁器が出土した。しかし紙面の都合で報告を割愛した。

畝状遺構1・2

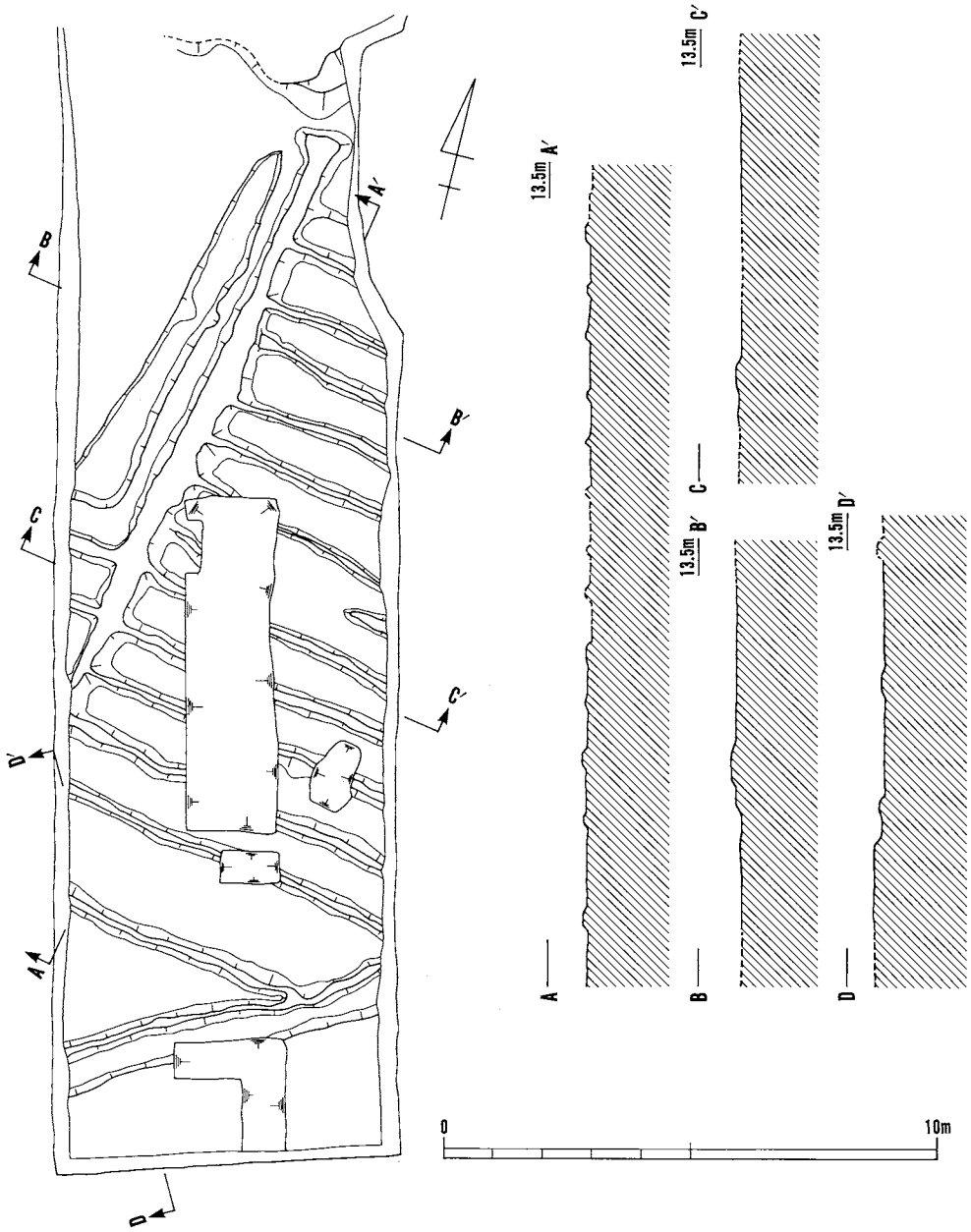
C地区のB・C－19～21区（畝状遺構1）、A地区のA－19～21区（畝状遺構2）にそれぞれ位置し、どちらもⅡb層上面で検出し、畝状遺構1・2は同一の遺構である。

A地区では上記したように畝状遺構2の上層、Ⅱa層上面でもう一面畝状遺構を検出したが、遺存状況が悪く面的に遺構の広がりを追えなかった。したがってⅡa層上面の畝状遺構は、その全容を明らかにすることができなかった。

ここでは遺存状況の良好なⅡb層上面の畝状遺構2を中心に報告する。



第8図　畝状遺構1



第９図　畝状遺構２

Ａ地区の畝状遺構２は、現在の畦畔とほぼ重なりあった形で検出した。畝状遺構は南西から北東方向に延びる幅50～80cm前後の大畦畔を中心にして、東側に幅40cm前後、高さ20cm前後の小さな畝状隆起が13条北西から南東方向に走っている。各畝状隆起間は1.1ｍ前後の間隔でほぼ平行に走っている。ただ南端の畝状隆起間は2.3ｍの間隔と幅広である。この南端の畝状隆起はＡ－21区で調査区をほぼ東西に走る小畦畔に連結している。小畦畔は上層のⅡａ層上面から掘り込まれた溝によって畦畔の南側が破壊されている。

大畦畔の西側はこの大畦畔に沿った状態で長さ４ｍ、幅60cm前後、深さ10cm前後の溝が走っている。この溝の西側には、畝状隆起の痕跡は認められない。

Ｃ地区畝状遺構１は、畝状隆起が９条検出された。各畝状遺構の遺存状況は悪いが、南から４条目の畝状隆起は１ｍ前後と幅広で中央部が若干凹んでいる。最近の調査例から判断すると幅40cmの畝状隆起を１畝と考えるには狭小である。Ｃ地区で検出された幅１ｍ前後の畝を１畝と考えると、ちょうど２条の畝状隆起を合わした数値になり、畝状遺構１で５～６条、畝状遺構２で６条程度の畝が存在したと推察される。

出土した遺物は、畝状遺構２直上より江戸時代初頭の丹波系擂鉢(49～51)がまとまった状態で出土した。さらに上層のⅡａ層中より絵唐津Ⅲ(44)、唐津系椀(46)、龍泉窯系青磁小Ⅲ(42)、瀬戸・美濃系Ⅲ(45)が出土している。

Ｃ地区では畝状遺構に直接伴う遺物は出土していないが、上層のⅡａ層中より瓦質羽釜(30)が１点出土している。このⅡａ層上面から伊万里焼椀(48)が出土している。このⅡａ層上面では17世紀後半から18世紀に比定される溝・土坑が検出されており、畝状遺構の存続年代を知る手掛かりとなる。

２．平安時代後期から室町時代の遺構

この時期の生活面はＡ－19区に存在する比高差80cm以上の段差を境にして、居住域として使用された北側の微高地と、南側の駄六川の旧河道に分けられる。

北側の微高地上のⅣ層上面では、掘立柱建物、溝、土坑、柱穴が検出され、微高地南縁のⅡｃ層上面からは池状遺構の切り込みが認められた。

掘立柱建物は９棟確認されたが、調査区の幅が約７ｍと狭いため、全容のつかめるものはない。Ａ－４区で１棟、Ａ－13～16区で６棟、Ａ－16・17区で２棟と３箇所の集中地点が認められた。建物は、これらのまとまりごとに棟軸方位を異にし、順に14度東、４度東（86度西）、10度東（80度西）を示している。庇をもつ建物は掘立柱建物２・９である。掘立柱建物９については、柱穴内から丸瓦が出土している。いずれも柱穴が細いことから、瓦葺きの建物とは考え難い。

土坑は５基確認された。これらは微高地上南端のＡ－18区に集中するものである。土坑には

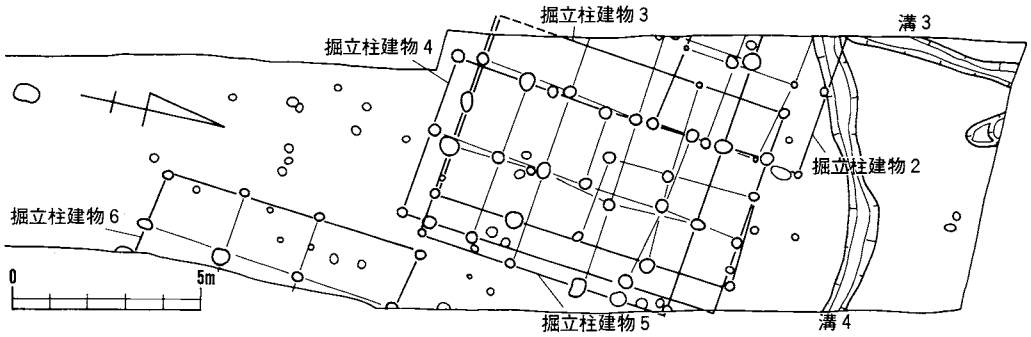
埋土中に、投棄された焼土を含むものがほとんどであり、うち４基からは土器とともに瓦の出土をみた。

これらの掘立柱建物群や土坑の立地する微高地からやや下った南縁に、周囲を川原石で護岸した池状の遺構が確認された。埋土からは多量の土器、瓦とともに木簡が１点出土している。

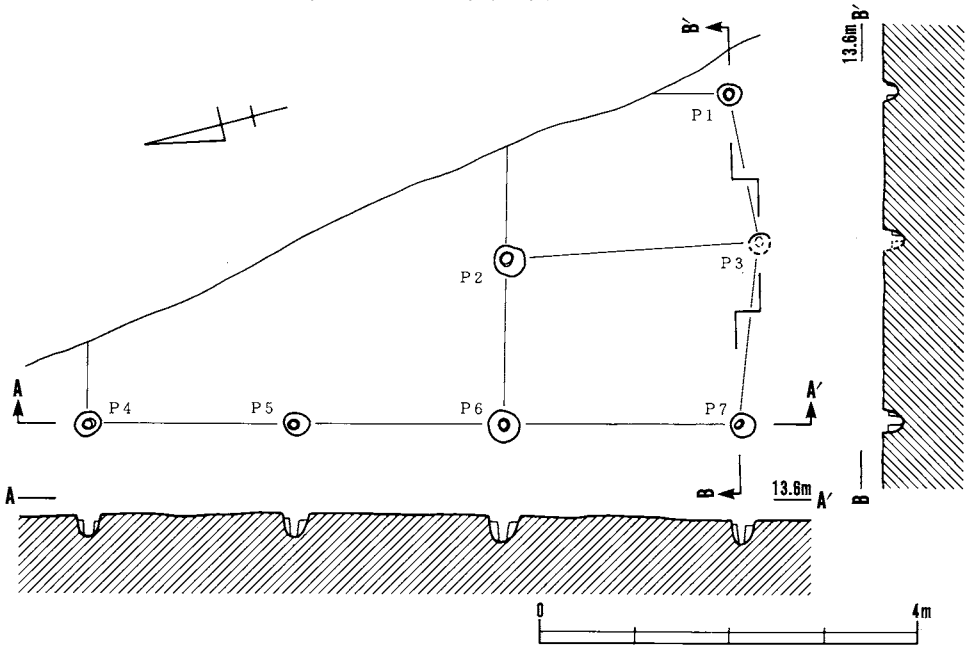
調査区の南端を東流する駄六川の旧流路が、Ｃ地区南端で現河道と平行して検出された。埋土より瓦等が出土している。

掘立柱建物１

Ａ－３・４区のⅣ層上面で検出された総柱建物である。検出面の標高は13.4ｍである。棟軸方向は南北を示し、磁北から14度東に振っている。



第10図　Ａ地区東半の掘立柱建物群



第11図　掘立柱建物１

建物は調査区外の北および東方に延びる可能性があり、梁行は２間以上（3.50ｍ以上）、桁行は３間以上（6.90ｍ以上）の規模を示す。

柱掘形の直径は25～30㎝、深さ30㎝、柱痕跡の直径は10㎝を測る。

Ｐ６から土師器の細片が出土している。

掘立柱建物２

Ａ－13・14区のⅣ層上面で検出された庇付の総柱建物である。検出面の標高は13.3ｍである。棟軸方向は東西を示し、磁北から85度西に振っている。

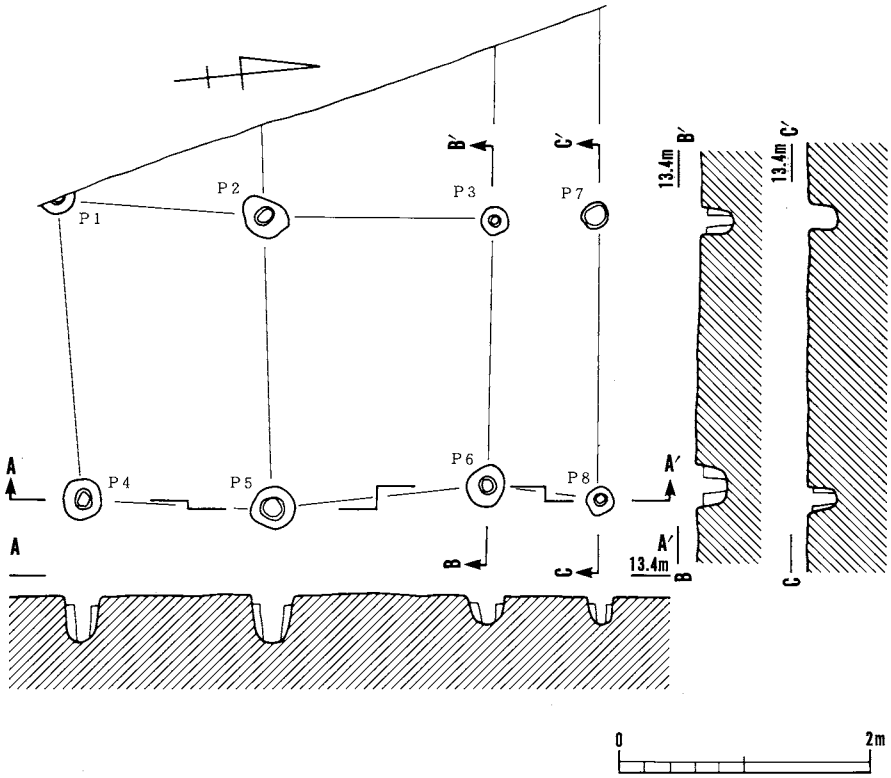
建物の西半は調査区外に延びる可能性がある。梁行は２間（3.25ｍ）、桁行は１間以上の規模を示し、身舎の北側に半間幅の庇が設けられている。

柱掘形の直径は22～36㎝、深さ25～40㎝、柱痕跡の直径は10～18㎝を測る。

Ｐ４より（５・17）の土師器皿が、Ｐ７より（23）の黒色土器椀がそれぞれ出土している。

掘立柱建物３

Ａ－14区のⅣ層上面で検出された掘立柱建物である。検出面の標高は13.3ｍである。棟軸方向は東西を示し、磁北から87度西に振っている。



第12図　掘立柱建物２

建物は調査区の西方に延び、梁行は４間（8.21ｍ）、桁行は２間以上（4.84ｍ以上）の規模である。Ｐ３とＰ７の間、Ｐ１の南柱筋には柱穴が確認できなかった。

東側の梁行柱列の柱間寸法は、中央２間がその外側に比べてやや間隔が狭くなっていることがわかる。

柱掘形の直径は25～50㎝、深さ15～35㎝、柱痕跡の直径は10～15㎝を測る。

Ｐ４・８・９から土師器皿の細片が出土している。この他Ｐ９から鉄製品（２）が出土している。

掘立柱建物４

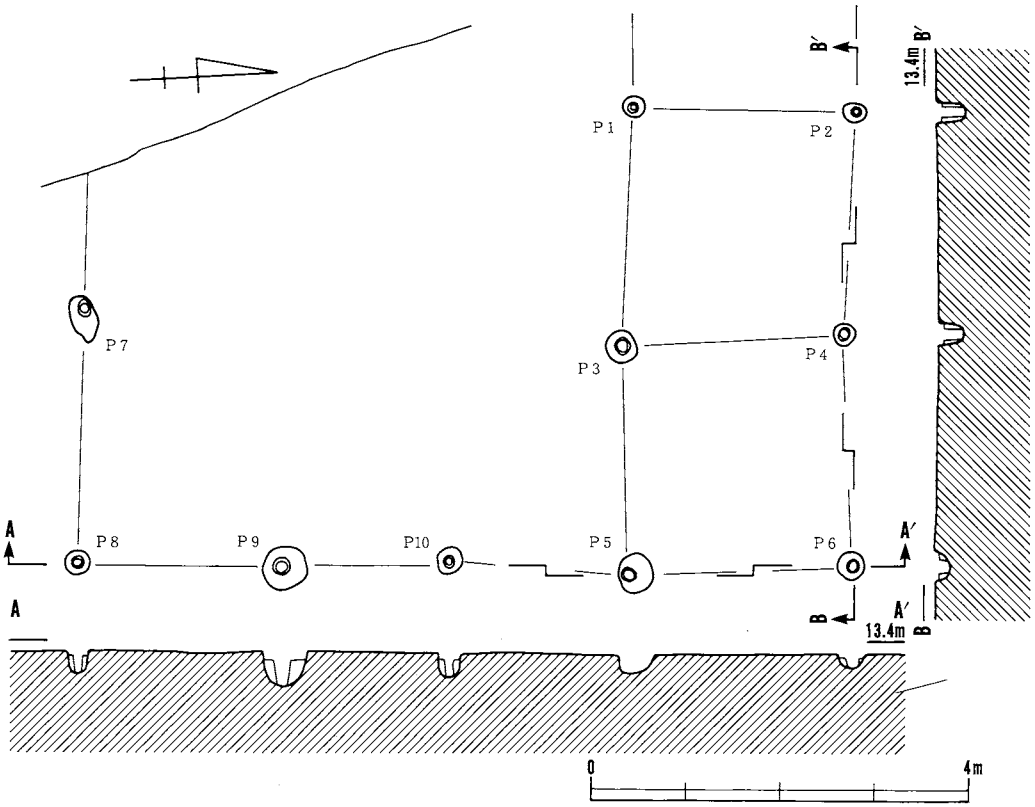
Ａ－14区のⅣ層上面で検出された掘立柱建物である。検出面の標高は13.2ｍである。棟軸方向は南北を示し、磁北から４度東に振っている。

建物は、梁行２間（4.34ｍ）、桁行４間（8.68ｍ）の規模である。

柱掘形の直径は25～35㎝、深さ12～30㎝、柱痕跡の直径は10～20㎝を測る。

Ｐ５・10には掘形内埋土に拳大の礫が含まれていた。

Ｐ４から黒色土器椀(21)、Ｐ７から土師器皿（７）が出土している。



第13図　掘立柱建物３

掘立柱建物５

Ａ－14区のⅣ層上面で検出された総柱建物である。検出面の標高は13.3ｍである。棟軸方向は東西を指し、磁北から86度西に振っている。

建物は調査区外の西方に続く可能性がある。建物の規模は梁行３間（6.84ｍ）、桁行３間以上（7.15ｍ以上）である。

柱間寸法は、梁行の中央の１間が他のそれに比べて3/4程度と短くなっている。桁行はほぼ等間隔である。柱掘形の直径は20～30㎝、深さ18～44㎝、柱痕跡の直径は15～20㎝を測る。

Ｐ２から土師器皿（９）、Ｐ７から土師器皿（４・８）、Ｐ13から土師器羽釜(20)がそれぞれ出土している。

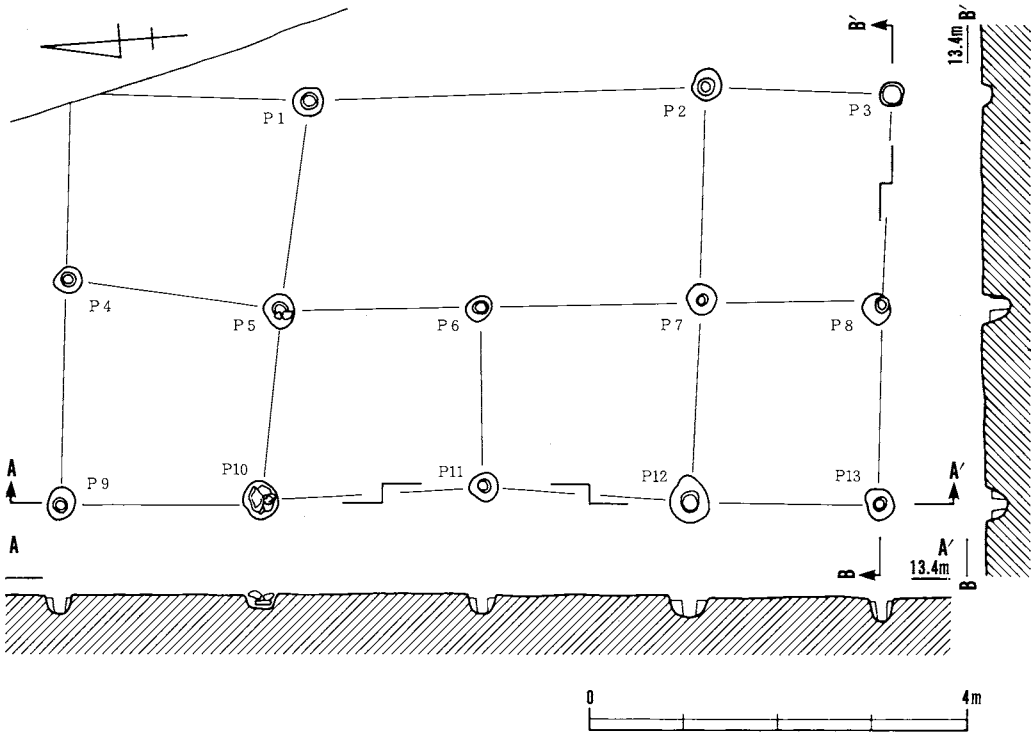
掘立柱建物６

Ａ－14・15区のⅣ層上面で検出された総柱建物である。検出面の標高は13.3ｍである。

棟軸の方向は南北を指し、磁北から４度東に振っている。

建物は調査区外の東方に続く可能性が高い。建物の規模は梁行１間以上（1.76ｍ以上）、桁行３間（7.08ｍ）である。

桁行方向の柱間寸法は等間隔ではなく、最も北側の柱列は他の柱間の4/3程度と長い。



第14図　掘立柱建物４

柱掘形は円形あるいは楕円形であり、直径20～40cm、深さ20～30cmを測る。柱痕跡は直径10cm程度である。

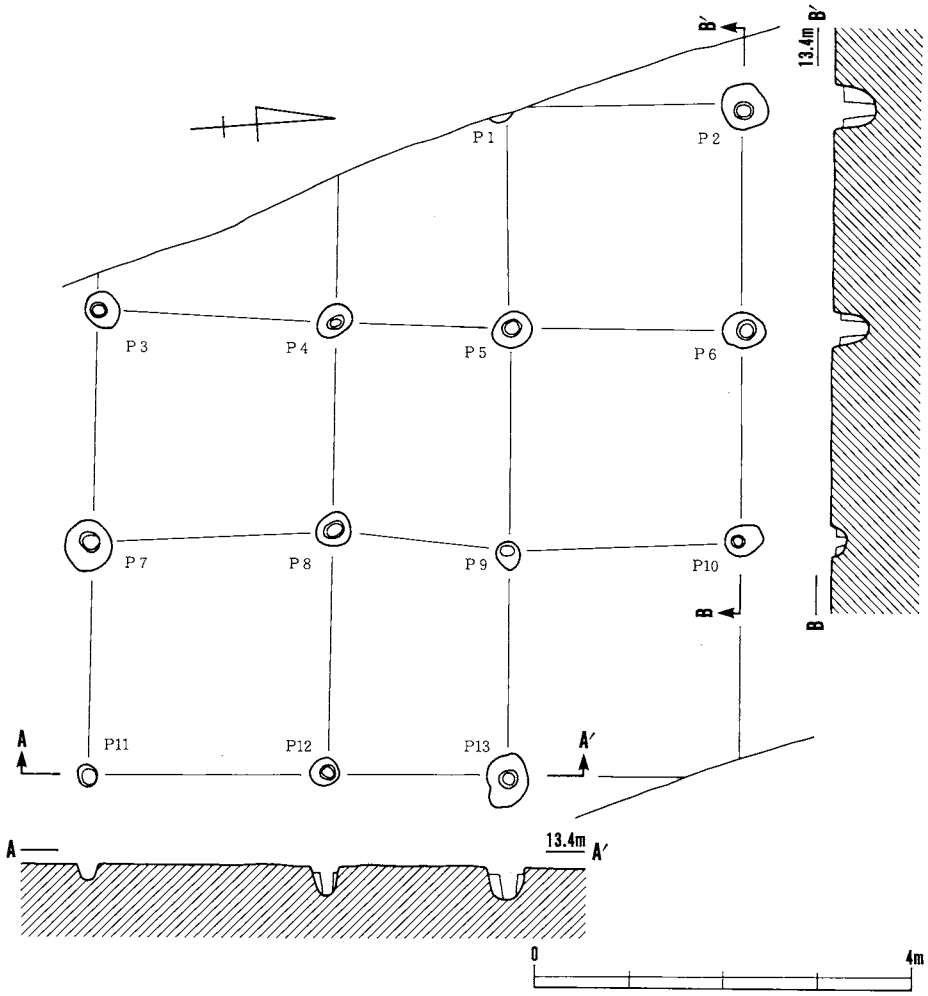
Ｐ６より土師器皿(３)が出土している。他の柱穴でも、土師器の細片を検出したが、いずれも図化できるものはなかった。

掘立柱建物７

Ａ－16区のⅣ層上面で検出された総柱建物である。検出面の標高は13.2mである。

棟軸方向は南北を指し、磁北から３度東に振っている。

建物は調査区外の東方、北方に続く可能性がある。規模は梁行１間以上（2.14m以上)、桁行３間以上（6.96m以上）である。



第15図　掘立柱建物５

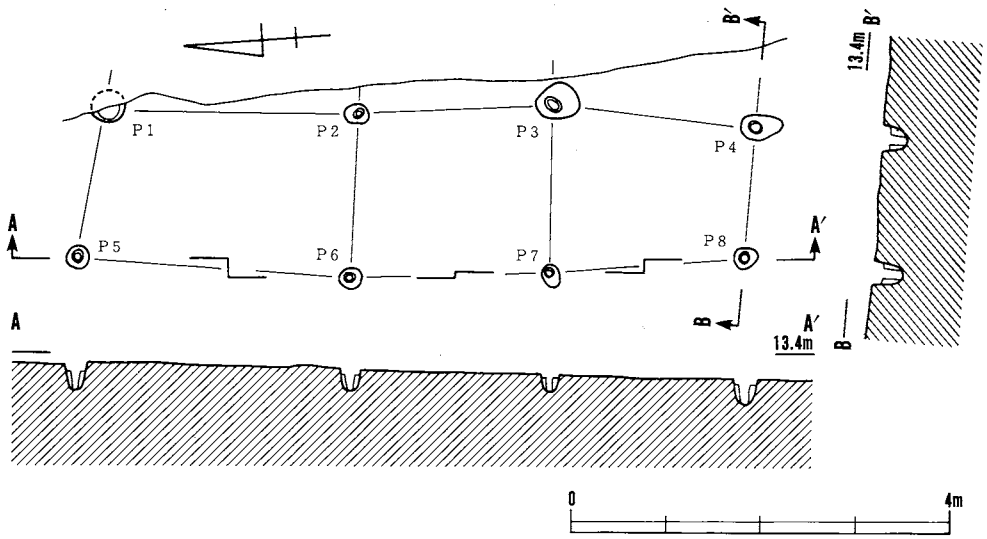
柱掘形の直径は18～25cm、深さ15～40cm、柱痕跡は直径８～15cmを測り、柱穴および柱の規模は、一定ではない。

Ｐ２より鉄鏃(３)が、Ｐ３より鉸具(６)の鉄製品が出土した。

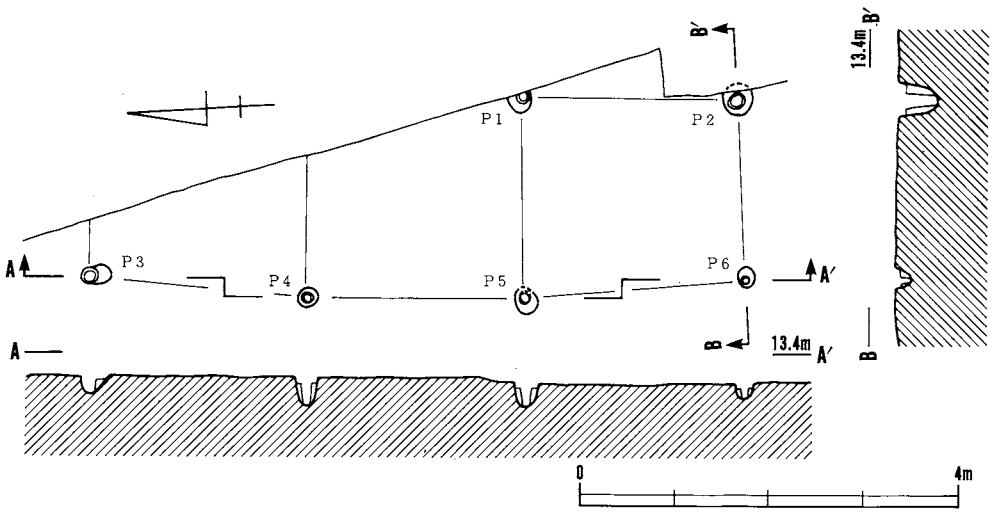
掘立柱建物８

Ａ－17区のⅣ層上面で検出された掘立柱建物である。検出面の標高は13.2ｍである。

棟軸方向は東西を指し、磁北から78度西に振っている。



第16図　掘立柱建物６



第17図　掘立柱建物７

建物は東方の調査区外に延びる可能性がある。規模は梁行４間（7.34ｍ）、桁行２間以上（4.34ｍ以上）である。梁行方向の柱間寸法は、南半の２間が広く、北半の２間は比較的狭くなおかつ不揃いである。桁行方向の柱間も等しくない。Ｐ７とＰ８の間には柱が確認されなかった。

柱掘形の直径は、南側３列が約30㎝と大きいのに対し、北側２列のそれは約20㎝と小形である。深さは30～42㎝、柱痕跡の直径は８～15㎝を測る。

Ｐ３柱穴内から炭化物が出土した。Ｐ９より土師器皿（２・10）が出土している。

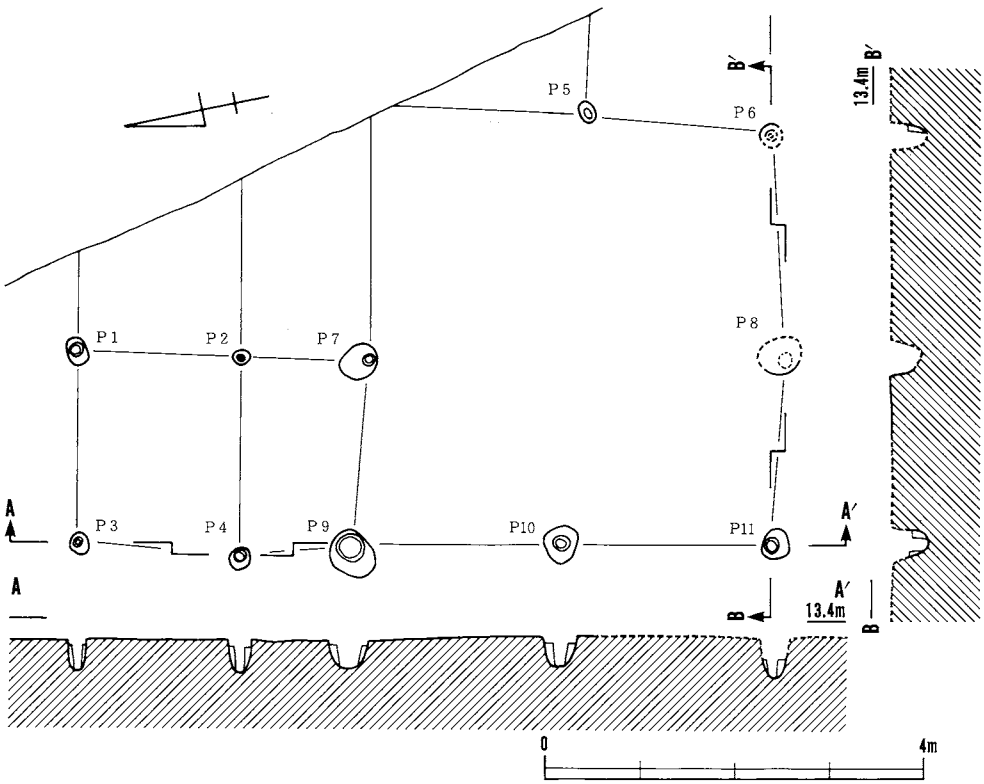
掘立柱建物９

Ａ－17・18区のⅣ層上面で検出された掘立柱建物である。検出面の標高は13.2ｍである。棟軸方向は南北を指し、磁北から10度東に振っている。

桁行２間（4.50ｍ）で、西側に庇をもつことから、梁行は２間（3.90ｍ）をこえないと思われる。庇と身舎との距離は0.52ｍである。

柱掘形の直径は25～40㎝、深さ10～30㎝、柱痕跡の直径は15㎝程度である。

Ｐ９より土師器皿(13)、Ｐ４内に丸瓦Ⅰ・Ⅱ類、平瓦Ⅱ類が投棄されていた。



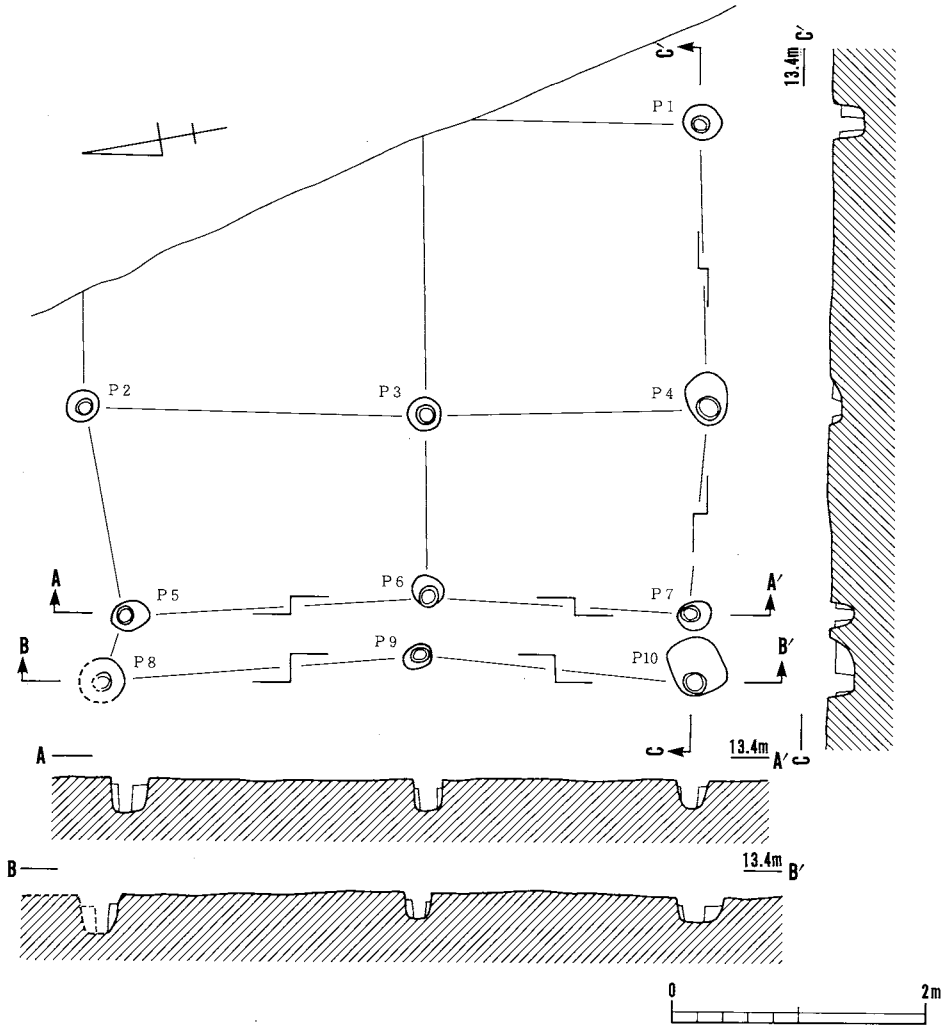
第18図　掘立柱建物８

土 坑 1

A－18区に集中する土坑群のうち、最も北に位置する。検出面はⅣ層上面であり、その標高は13.2mである。

検出面における規模は、長軸の長さ2.78m、短軸の長さ2.05mである。坑底は比較的平坦であり、坑底における規模は、長軸の長さ1.80m、短軸の長さ1.75mを測る。検出面から坑底までの深さは12cmと浅い。

埋土はシルト質極細砂であり、土坑の北隅からは、建物の廃棄を思わせる赤橙色、黄灰色の焼土が多量の土器、瓦とともに出土した。



第19図　掘立柱建物９

坑底より柱穴が２箇所で確認され、これらの柱穴を切って土坑が掘削されている。

出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器の細片をはじめ丸瓦Ⅰ・Ⅱ類、平瓦Ⅱ類が出土している。

土 坑 2

Ａ－18区Ⅳ層上面で検出された土坑である。土坑１の南に位置し、土坑の西半は調査区外に延びる。検出面の標高は13.3ｍである。

検出面から坑底までの深さは15cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。

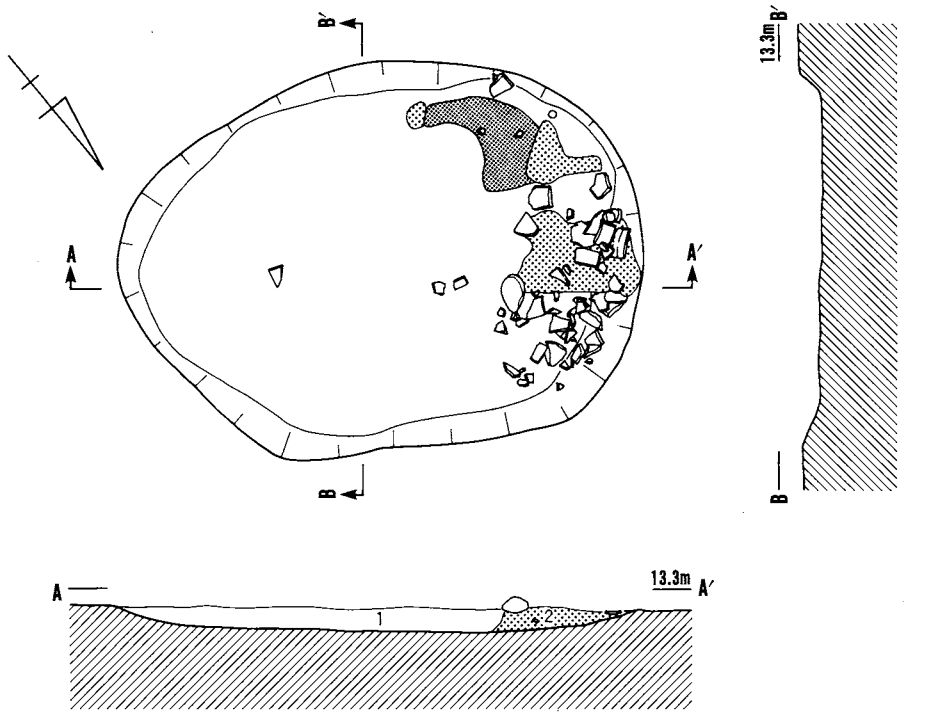
埋土下層には灰、炭の堆積がみられ、これには遺物は含まれていない。上層には瓦質の羽釜片、瓦の細片が出土している。図化可能な遺物はなかった。

土 坑 3

Ａ－18区Ⅳ層上面で検出された土坑である。土坑２と同じく、土坑の西半は調査区外に延びている。検出面の標高は13.3ｍである。

検出面から坑底までの深さは10cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。

埋土から遺物は出土していないが、炭片とともに、投棄された焼土の堆積が認められた。



1．黄灰色シルト質極細砂
2．黄灰色焼土塊・褐色粘土塊

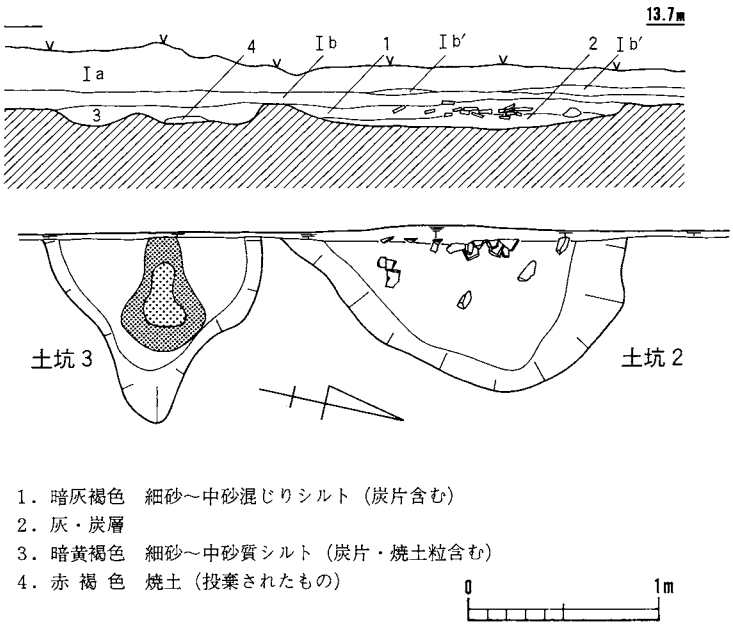
第20図　土 坑 1

土 坑 4

A－18区のⅣ層上面で検出された土坑である。掘立柱建物９の南に位置し、検出面の標高は13.2mである。

北半は浅いⅢ状の落ち込みであり、これより南側は溝状を呈する。北半の落ち込みの規模は、長軸の長さ2.78m、短軸の長さ1.92mである。検出面から坑底までの深さは８cmを測る。

南半の溝状の落ち込みは、幅45～110cmであり、平坦な底までの深さは10cmである。



第21図　土坑２・３

薄い炭層が土坑北端の230×140cmの範囲に認められ、この付近で土器、瓦の出土をみている。

坑底で柱穴が４個確認されている。

遺物は埋土中より黒色土器椀(22)、東濃系山茶椀(40)の土器と丸瓦Ⅰ・Ⅱ類、平瓦Ⅱ・Ⅲ類が出土している。

土 坑 5

A－18区のⅣ層上面で検出された土坑である。検出面の標高は13.2mである。

土坑は東西に長い楕円形を呈し、検出面における長軸の長さは1.44m、短軸の長さは65cmを測る。検出面から坑底までの深さは５cmと浅い。

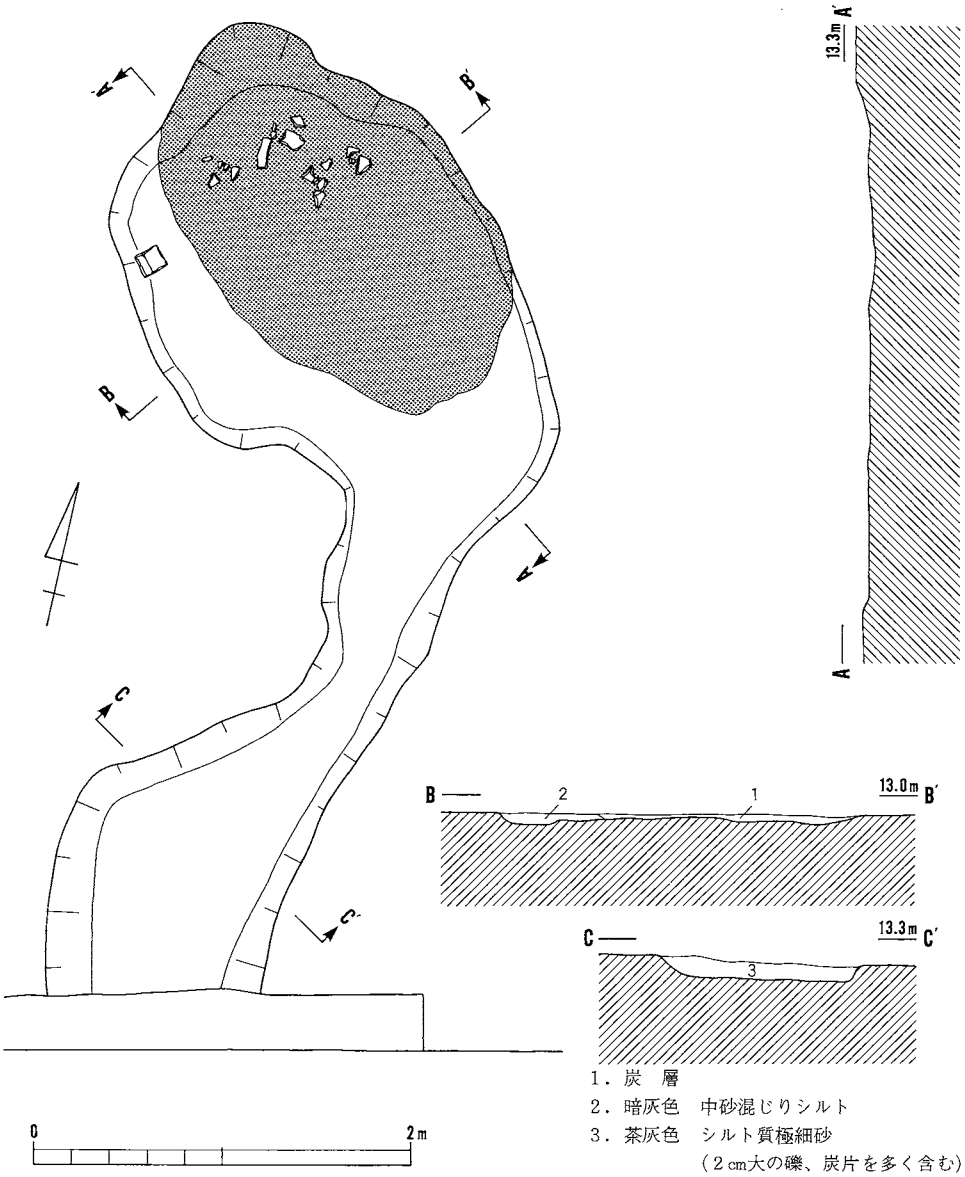
埋土中には、他の土坑同様、投棄されたと思われる焼土塊が含まれていた。

遺物は上層より土器片が出土している。

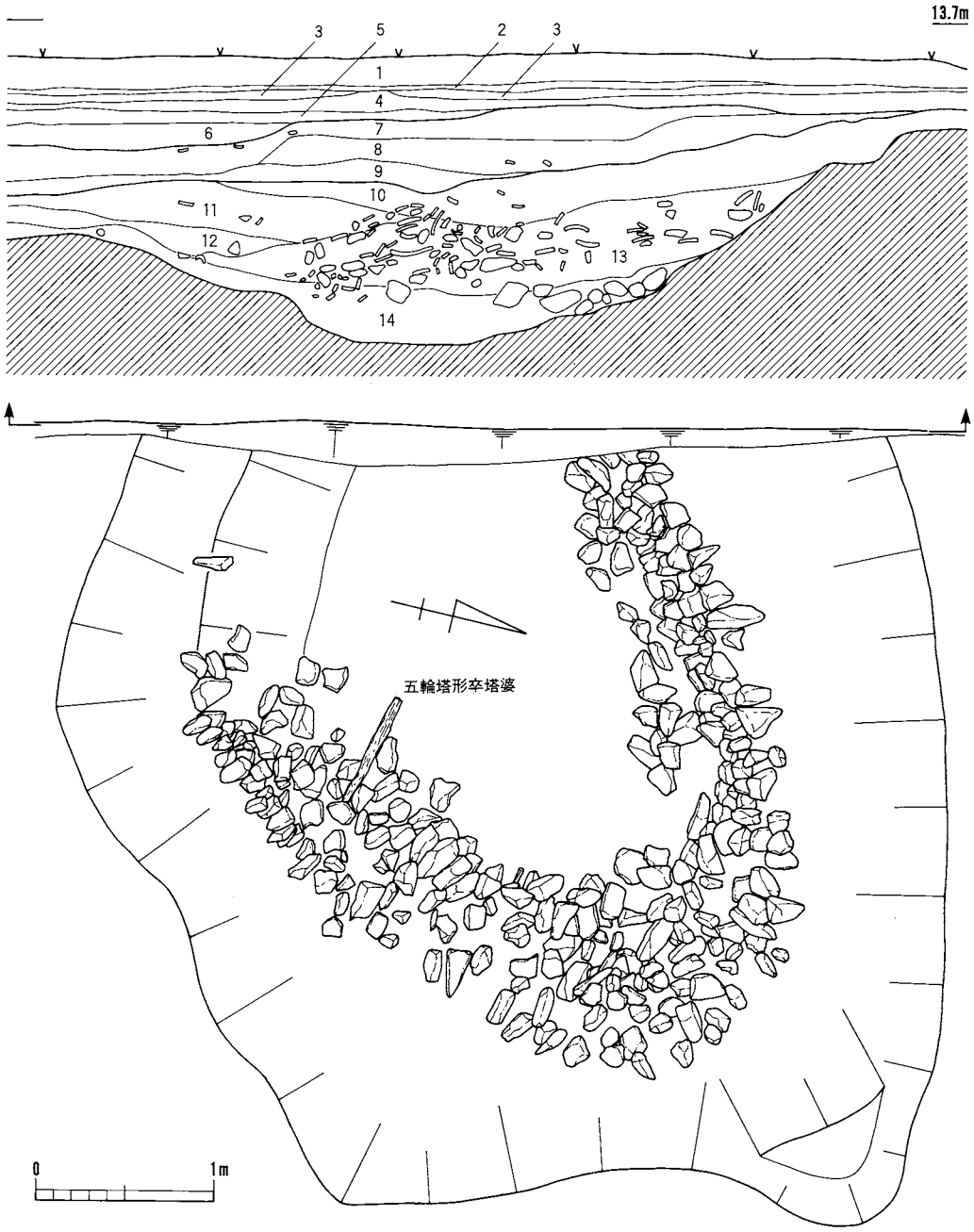
池状遺構

A地区南端、A－19区に位置する。遺構はⅡa(10層)層を除去した段階で検出した。検出層は北側がⅣ層、南側がⅡc層である。池状遺構の西側は調査区外まで延び、調査を実施した東半分は東西に長い不整楕円形を呈する。規模は短軸方向５m、長軸方向4.2m以上を測る。検出面からの深さは、北側で1.3m、南側で70cmを測る。池状遺構の底部周縁には、長さ６～

30cm大の亜角の河原石を積み上げ護岸している。護岸石を積み上げた部分は立ち上がりの角度が緩く若干テラス状になっている。池状遺構本来の埋土は14層シルト層で、その上に建物の焼失に伴う廃土（13層）を投げ入れている。13層中から各類の瓦をはじめ多量の瓦片と瓦質羽釜(30)・(33)の蓋、瀬戸・美濃系の花瓶(47)が出土した。池状遺構底面の護岸石に混じって瓦質羽釜(31)と五輪塔形卒塔婆が出土した。



第22図　土 坑 4



1．耕土　2．床土　3．灰色 細砂～中砂質シルト　4．黄灰色 シルト質極細砂　5．灰色 中砂　6．灰色 粗砂～中砂　7．灰色 粗砂(Ⅱa層)　8．灰色 粗砂～中砂　9．黄灰色 細砂質シルト　10．暗灰色 細砂(Ⅱa層)　11．灰色 細砂質シルト(Ⅱb層)　12．灰色 シルト(Ⅱb層)　13．黒灰色 シルト(炭多く含む)　14．暗黒褐色 細砂質シルト

第23図　池状遺構

溝　3

A地区北端、A－13区に位置する。溝の南側は、東西方向に走る溝4を切っている。検出面の標高は13.3mである。溝3は耕土を除去した段階、Ⅳ層上面で、調査区を南西から北東方向にはしる形で検出された。溝の幅は50～70cmと一定ではない。溝の断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは10cmと浅い。埋土は1層で褐灰色細砂シルトである。

遺物は出土しなかった。

溝　4

A－13区の掘立柱建物群の北で検出された溝である。検出面はⅣ層上面、標高は13.3mである。溝の方向は調査区中程で緩く屈曲し、東西方向をとる。南北方向の溝3に切られている。

溝の幅は37～75cmであり、長さは7.5mを確認した。検出面からの深さは4～6cmを測り、東方が若干深くなっている。

遺物は平安時代後期に比定される土師器小皿片をはじめ器種の識別が不可能な須恵器・土師器片が出土している。

溝　5

A－17区のⅣ層上面で検出された東西方向の溝である。検出面の標高は13.2mである。方向は磁北より西へ88度振っている。掘立柱建物8の柱穴を切っている。

溝の幅は1.85～2.00mであり、長さは7.4mを確認した。検出面からの深さは40～43cmと大差ないが、西方がやや深くなっている。

遺物は下層より土師器皿(12)をはじめ瓦器・須恵器の細片が多数出土している。

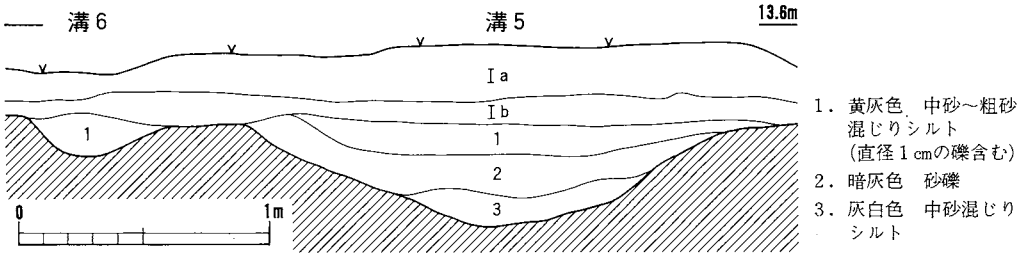
溝　6

A－17区のⅣ層上面で検出された東西方向の溝である。検出面の標高は13.2mである。方向は磁北より西へ90度振っている。溝5にほぼ平行しており、掘立柱建物8の柱穴を切る。

溝の幅は45～60cmであり、長さは7.4mを確認した。検出面からの深さは18～22cmを測り、東方がやや深くなっている。

埋土は1層で、溝5最上層と同一層であり、溝5よりも埋没の開始が新しいことが分かる。

遺物は出土しなかった。



第24図　溝5・6土層断面図

3．古墳時代の遺構

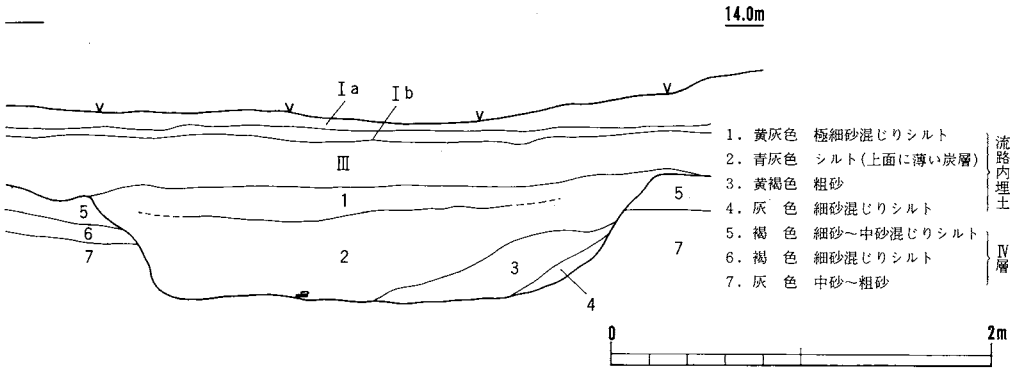
古墳時代に属する遺構はＡ－３～５区にかけて検出された自然流路（流路１）のみである。

流 路 1

Ａ－３～５区にかけて検出された流路である。検出面はⅣ層上面であり、その標高は北方で13.4m、南端で13.1mである。蛇行する部分があるため、人工の溝とするよりも自然流路と捉える方が自然であろう。方向は概ね南北方向をとっている。掘立柱建物１が流路埋没後に掘り込まれている。

流路の幅は1.5～3.0mであり、長さは27mにわたって確認された。検出面からの深さは、北方で33cm、南端で60cmを測り、南流していたことが分かる。

埋土は、下層に粗砂の堆積が認められ、上層には薄い炭層とともにシルトが堆積していた。埋土内より古墳時代の土器が出土しているが、多く出土したのは２、３層からである。



第25図　流路１土層断面図

第３節　遺　　物

この時期に該当する遺物は、コンテナー・バットに換算して77箱を数える。出土遺物の種類は弥生土器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、陶磁器、土製品、瓦、鉄製品、石製品、木製品である。なかでも瓦類は出土遺物量の９割を占め、その数は破片を含めると約3,500点を数える。瓦の種類は軒丸・軒平瓦をはじめ、丸瓦、平瓦、雁振瓦、鬼瓦等が出土している。量的には丸瓦・平瓦が全体の95％を占める。

土器は上記したように古いところでは弥生時代前期の甕、弥生時代後期の壺が出土したほか、古墳時代後期・奈良時代の坏が出土している。しかしこれらの土器は量的には少なく、出土土器の多くは平安時代後期から室町時代にかけてのものが多い。

土器の説明にあたっては室町時代末～江戸時代初頭、平安時代後期～室町時代、奈良時代・古墳時代、弥生時代と時代的に区分し個々に行う。

1．室町時代末から江戸時代初頭の遺物

この時期に該当する遺物は、国産陶磁器(44・46・48・49～51)である。種別は唐津系皿・椀(44・46)、丹波系擂鉢(49～51)である。このほか時代は下るが、今回報告しなかった江戸時代の溝より出土した伊万里焼椀(48)もあわせて説明する。

(44・46)は唐津系の皿と椀である。(44)は削り出し高台をもつ皿で、内面には暗灰色地の釉上に鉄釉で花文が描かれている。釉は内面と外面体部上半に施釉され、体部下半は露胎である。(46)は小さな削り出し高台をもち、高台側縁には面取りがなされている。内面・外面体部上半に緑がかった灰白色の釉を施しており体部下半、底部は露胎である。露胎部分の調整を観察すると体部はナデ調整によって器面を整えている。

(49～51)は丹波系の擂鉢である。(49)は口縁端部が丸味を帯び、外面口縁端部と内面口縁部下に沈線が巡る。外面体部は強いユビオサエ調整の後、横位のナデ調整を施している。内面は5本1単位の櫛描条線が放射状に施される。(50)は口縁端部が若干上方へ拡張する擂鉢である。外面体部はユビオサエ調整後、ヨコナデが丁寧に施されている。内面には８本１単位の櫛描条線が密に施されている。

(51)は口縁端部の断面形が四角い擂鉢である。外面体部には、ユビオサエ調整の凹みを残すが(49)ほど顕著ではない。内外面とも口縁部付近は丁寧なヨコナデが施され器面は滑らかである。内面には７本１単位の櫛描条線が施される。

(48)は伊万里系の一重網目文椀である。復元口径が10cmと小型の椀である。内面は無文で、外面は口縁部に回線を施した後、体部に一重の網目文を呉須描きしている。

2．平安時代後期から室町時代の遺物

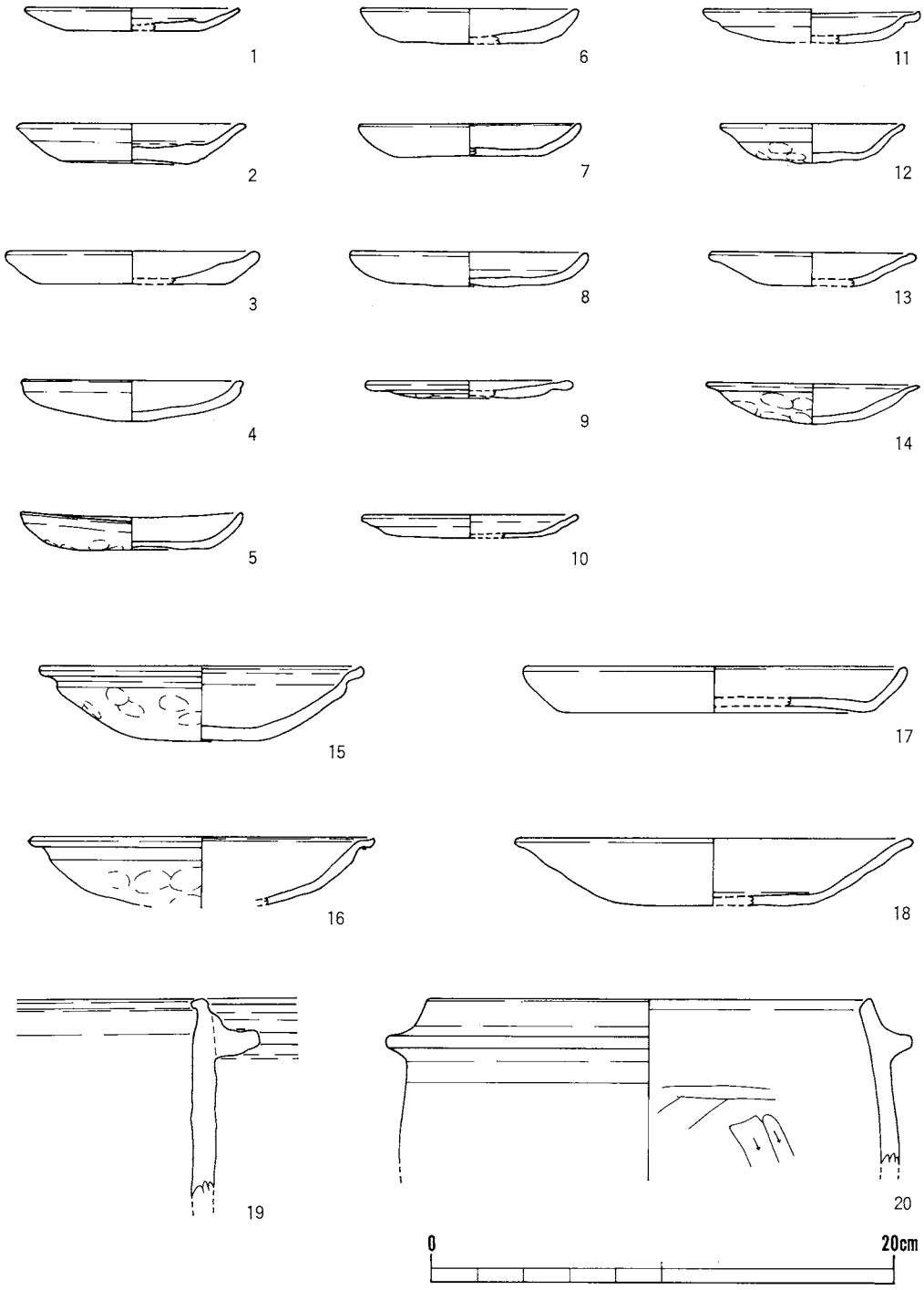
この時期に該当する遺物は土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、中国製磁器、国産陶器、土製品、瓦、鉄製品、石製品、木製品と多岐にわたっている。以下各種別毎に説明する。

土 師 器(１～20)

土師器は、皿・羽釜が出土している。量的には皿が多く、とくに小皿の出土が目立つ。法量で大・中・小皿に分類される。

出土した土師器のうち、(５・17)の皿は掘立柱建物２・Ｐ４内に一括投棄された状態で出土している。また(2・10)の小皿は掘立柱建物８・Ｐ９より出土している。

皿はその法量から口径８～10cmを測る(１～14)の一群、口径13～15cmを測る(15・16)の一群、口径17cm前後の(17・18)の3つに大別される。ここでは(１～14)の一群を小皿に、(15・16)の



第26図　土師器

一群を中皿に、(17・18)の一群を大皿に分類して報告する。

(1～3)は小皿のなかでも底部に回転糸切り手法が採用された皿である。口縁部は直線的に外方に開き、平底である。調整は内外面とも回転ナデ調整が施され、とくに内面底部周縁は強いナデ調整のため凹む傾向が見られる。(1)はその傾向が顕著である。

(5～8)は平底気味の底部をもち、口縁部が内彎して立ち上がる皿である。口縁端部は若干尖り気味である。この一群は摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、完形で遺存状態の良好な(5)を観察すると、内外面ともに口縁部にヨコナデの痕跡が認められる。(4)は底部が丸底で、口縁端部が小さく外反する小皿である。出土した小皿のなかでこの形態の皿は(4)の1例だけである。(9～11)は器高が極めて低く、口縁部の外反の度合いが小さい小皿である。調整は器面の摩滅が著しく不明である。(11)は口縁部がほぼ水平方向に外反し、口縁端部を僅かに摘み上げている「て」の字状口縁をもつ小皿である。(12)はこの一群のなかでも器高が高く、口縁部の外反度が大きい小皿である。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はユビオサエ調整、底部内面は不定方向のナデが施されている。(13)は平底で底部径が口径に比べて小さい皿である。(14)は丸底で口縁部が水平気味に外反し、口縁部内面に面をもつ小皿である。口縁端部は尖り気味である。

(15・16)は中皿である。(15・16)は口縁端部が水平に外反し、先端を摘み上げる「て」の字状口縁をもつ中皿である。器形的には小皿(11)と近似する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部外面はユビオサエ調整を施す。(17)は大きな平底で口縁部が短く立ち上がる。(18)は口径に比べて小さな底部をもつ大皿である。外面には粘土紐の接合痕跡が明瞭に残り、粗雑なつくりである。口縁部内面にヨコナデの痕跡を残す。器形的には小皿(13)と近似する。

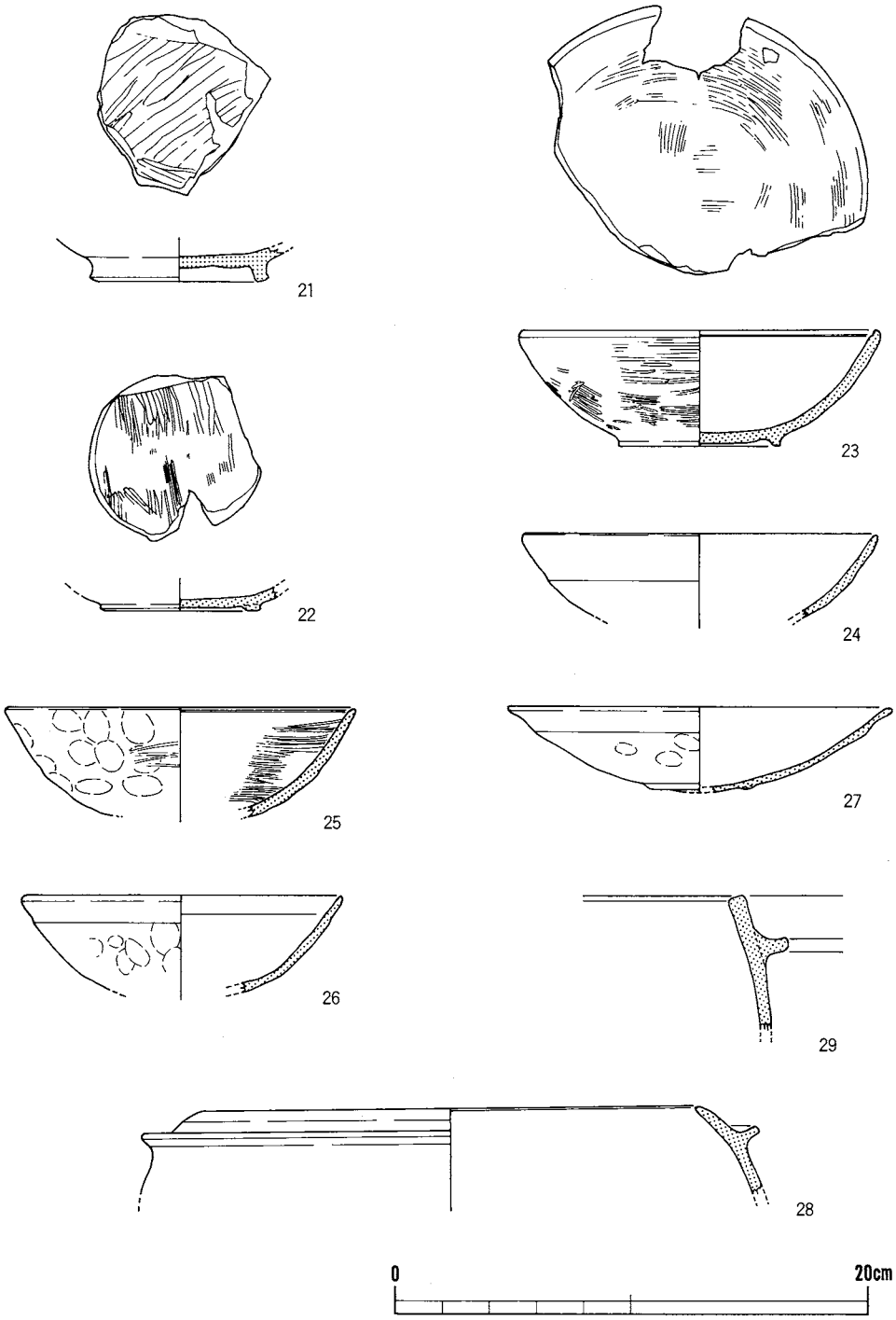
(19・20)はいずれも口縁部が短く立ち上がる羽釜である。(19)は口縁端部が内側に突出し、端部上面は平坦である。口縁部外面は凹凸をもっている。鍔は短く、先端は角張っている。外面にはススが付着し、使用された痕跡を残す。(20)は、口縁部が内側に内傾する羽釜である。(19)に比べて口縁部外面の凹凸がなく鍔も短い。鍔の先端は若干丸味をもつ。調整は口縁部内外面ともヨコナデ調整で丁寧に仕上げられている。内面にはナデ調整を施す。

黒色土器・瓦器・瓦質土器(21～33)

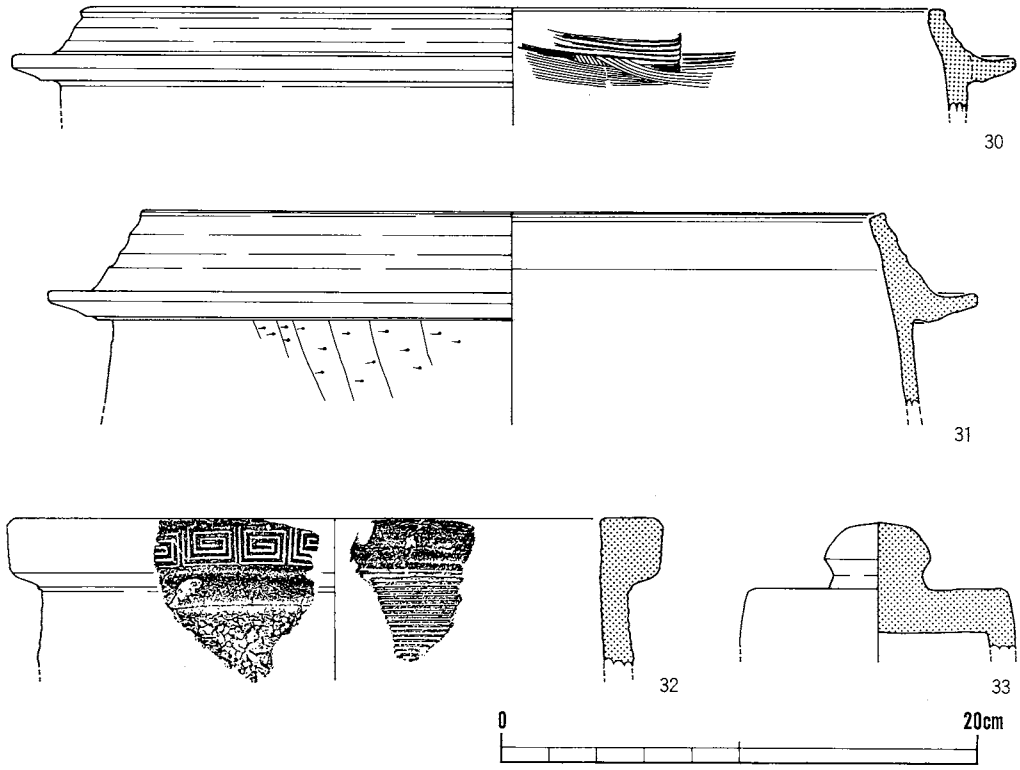
黒色土器・瓦器・瓦質土器は、椀(21～27)、羽釜(28～31)、香炉(32)、蓋(33)が出土している。図示できなかった細片を含めると、瓦器椀が多く出土している。

(21～27)は椀である。遺存状況が悪く、器形・調整ともに不明瞭な点が多い。

(21～23)の椀は、内外面ともに密なヘラミガキ調整の黒色土器である。この一群の椀のなかでも(21)は高い輪高台を貼り付けている。底部のみの破片で全容は明らかではないが、内面底部には幅広の一方向のヘラミガキ調整を施した後、体部に横位のヘラミガキ調整を施したと考えられる。堅固な高台のつくりから推察するに、出土した椀のなかでは古い要素をもつ。



第27図　黒色土器・瓦　器・瓦質土器



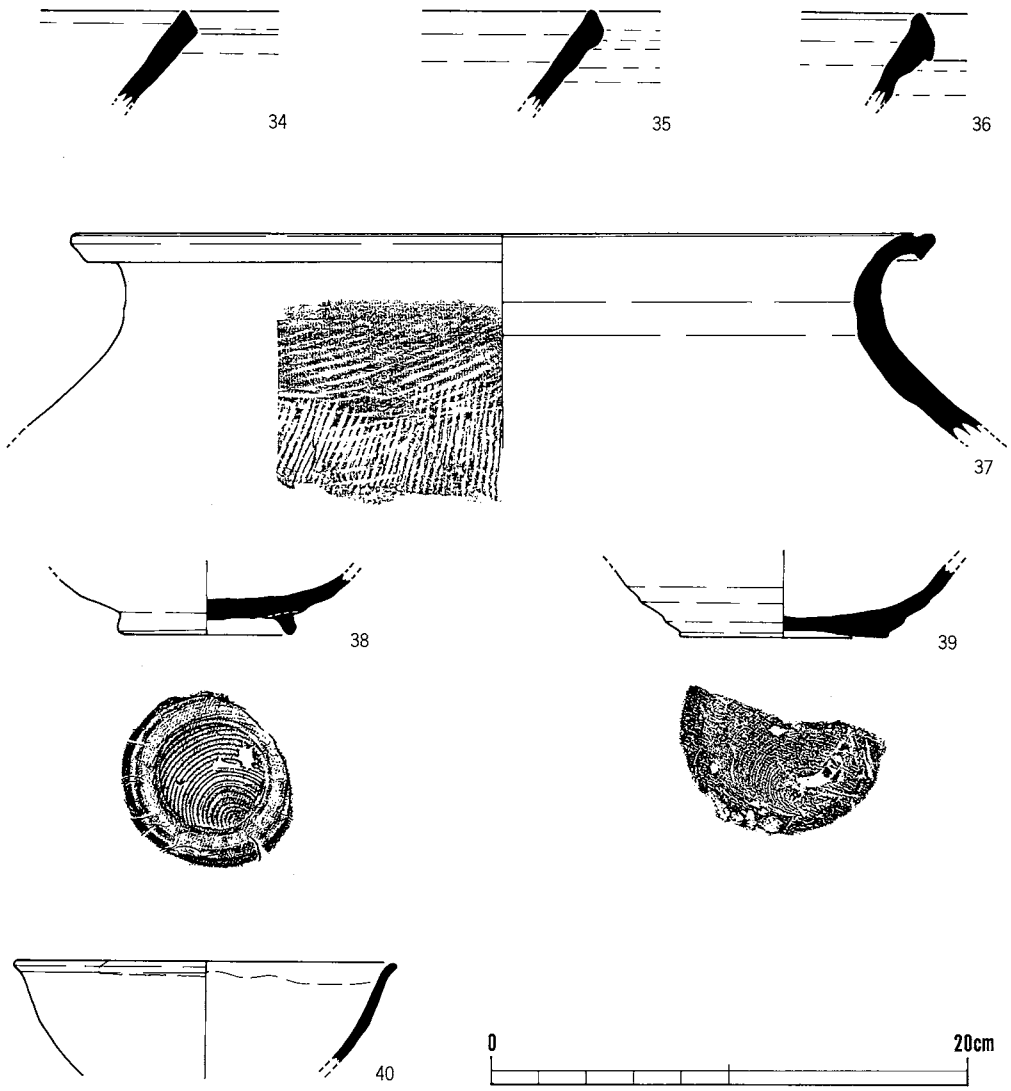
第28図　瓦質土器

(22・23)は前記した椀より退化した高台をもっている。調整は(21)と同様、内外面ともに密なヘラミガキ調整が施されている。器形の全容が明瞭な(23)の椀は、内面口縁端部に沈線が施されている。

(24～27)は外面体部にユビオサエ調整、口縁部にヨコナデ調整が施された瓦器椀である。いずれも器肌の摩滅が著しく、ヘラミガキ調整は不明瞭である。(25)の椀はこれらのなかでも遺存状況が比較的良好で、調整が識別できる。外面体部には、粗いヘラミガキ調整、内面には密なヘラミガキ調整の痕跡を残す。(27)は器形的にみると器高が低く、高台の退化が著しい。出土した椀のなかでは新しい特徴を具備する。

(26)は、瓦器の一種としてここで報告するが、内面および外面口縁端部のみ黒化している。胎土は土師器を思わせる焼成である。内外面ともヘラミガキの痕跡は認められないが、器形的には瓦器に近似する。

瓦質羽釜は(28・29)の鍔の小さい羽釜と、(30・31)のように鍔の大きい羽釜とに大別される。(28)は口縁部が丸味を帯びて内傾する羽釜である。口縁部外面は上下2段のヨコナデが施され、若干凹みをもっている。口縁端部は尖り気味で鍔の先端は丸味を帯びている。(29)は口縁部が



第29図　須恵器

内傾し、口縁端部は平坦である。外面口縁部はヨコナデ調整が施される。(30・31)はいずれも池状遺構内より出土している。(30)は外面口縁部に3条の凹線をもち、口縁端部は平坦である。外面口縁部はヨコナデ調整、体部はヘラケズリ調整が施されていると推察される。内面口縁部は横位のハケメが施される。(31)は前者の(30)より口縁部が高く、鍔の広い羽釜である。口縁端部は内傾する面をもつ。外面口縁部は上位に3条の凹線をもつ。外面口縁部はヨコナデ調整、体部は、幅広のヘラケズリ調整が施される。内面にはススおよびタール状の付着物が認められ、調整は不明である。

(32)は瓦質香炉と考えられる口縁部付近の破片である。口縁部外面に連続した雷文が印刻される。外面体部は縄目様の圧痕が施される。内面は口縁部が回転ナデ調整、体部は約1㎝間隔に8本1単位の櫛状工具で条線が施されている。なお外面には赤色顔料が塗布されている。

(33)は崩れた宝珠状のつまみをもつ瓦質の蓋である。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。外面には赤漆が塗布されている。

須恵器(34～40)

須恵器は鉢・甕・椀が出土している。いずれも遺存状況が悪く完形になるものはない。とくに鉢類は口縁部細片のみの出土で法量の算出は不可能であった。出土した須恵器のなかでも(38・40)のA－17区土坑4より出土した椀は東濃の産と考えられ注目される。

(34～36)は鉢の口縁部である。いずれも口縁部外面が黒化しており、重ね焼きの痕跡を残す。(34)は口縁部を若干摘み上げている。他の鉢とは異なり胎土は比較的精良で、内外面ともナデ調整が施されている。(35)は口縁部が丸味を帯びて肥厚し、口縁端部は尖り気味である。外面体部には粘土紐の接合痕跡を明瞭に残し、内外面ともナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含む。(36)は掘立柱建物跡6P6柱穴内より出土している。口縁部が肥大し、上方へ突出する鉢である。(35)と同様、粘土紐接合痕跡を明瞭に残し、胎土も砂質である。

(37)は甕の口縁部破片である。撫肩の体部から大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は上下方向に拡張し、口縁端部外面に面をもつ。内面口縁端部直下に沈線が巡る。体部から口縁部にかけて右上がりの粗いタタキを施した後、体部に縦位の細かなタタキを施す。内面の調整は摩滅が著しく不明である。焼成は不良で「生焼け」の状態である。胎土は砂粒を多く含む。

(38～40)は椀である。うち(39)は椀のなかで説明するが小型の鉢の可能性をもつ。底部のみの破片であるため器種が確定できなかった。(38)は輪高台をもつ椀である。外面底部に糸切りの痕跡を明瞭に残している。体部には丁寧な回転ナデ調整が施され、胎土は精良で、灰白色を呈する。(39)は底部に回転糸切り手法の痕跡を残す。外面体部には粘土紐の接合痕跡を明瞭に残し、粗雑なつくりである。(40)の椀は、内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施され、器面が滑らかである。内外面口縁部付近には自然釉が付着している。胎土は非常に精良で器壁が薄いのが特徴的である。

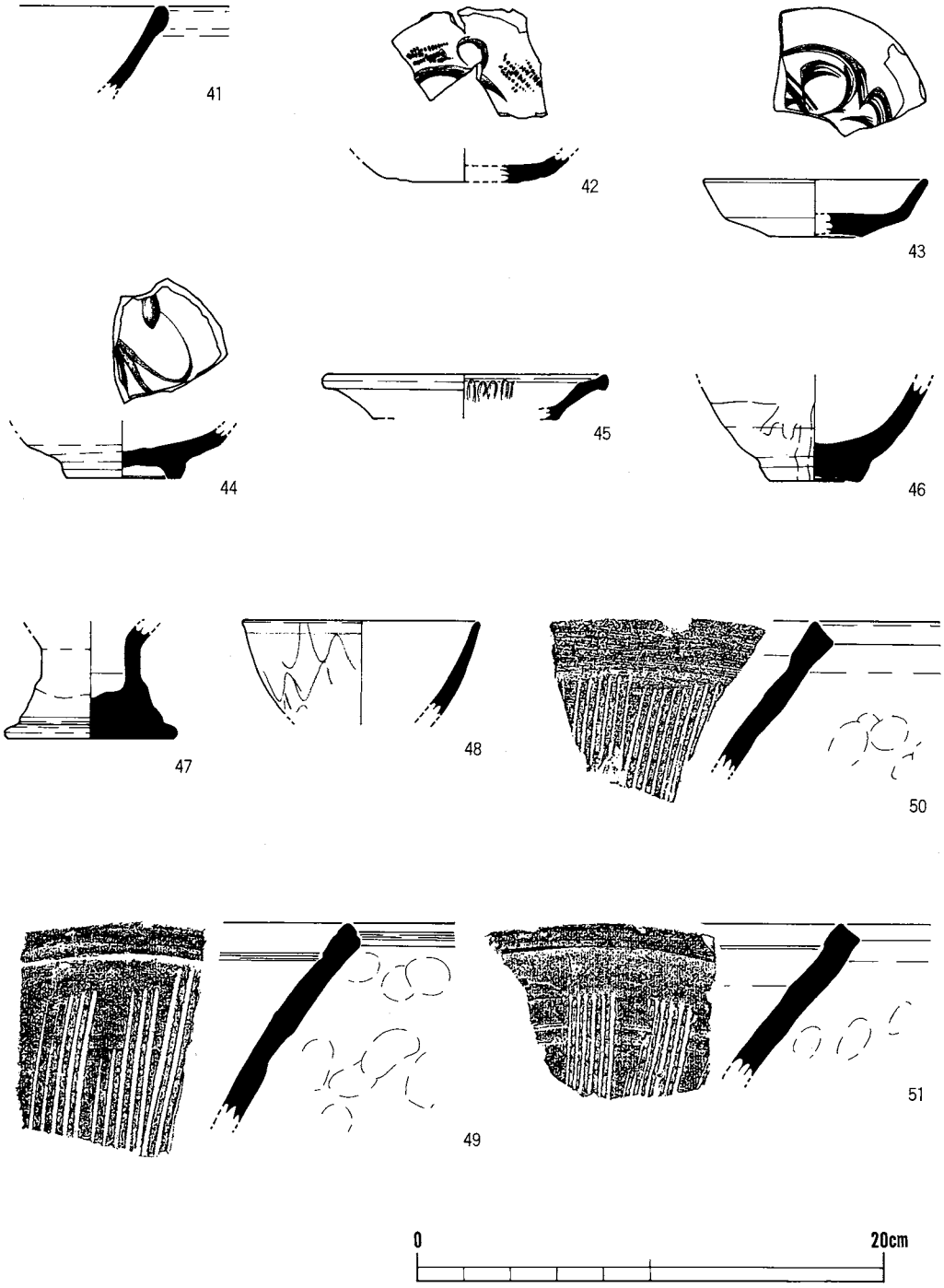
陶磁器(41～51)

陶磁器は中国製磁器をはじめ瀬戸・美濃系の国産陶器が出土している。これらの陶磁器のうち、瀬戸・美濃系皿(45)は畝状遺構の上層にあたるⅡa層より出土している。また、(47)の瀬戸・美濃系花瓶は池状遺構埋土中より出土している。

中国製磁器

中国製磁器は、白磁椀、同安窯系・龍泉窯系皿が出土している。

(41)は口縁部が玉縁化した白磁椀である。(42)は同安窯系の青磁皿である。内面に片彫りの花



第30図　陶 磁 器

文と櫛状工具によるジグザク文様が描かれている。全面施釉後、底部の釉を掻き取っている。釉は比較的厚く施されているが、透明度は高い。釉色は暗オリーブ色を呈し、粗い貫入が認められる。(43)は龍泉系青磁皿である。(42)と同様、全面施釉後底部の釉を掻き取っている。内面に櫛状工具による花文が描かれている。(42)に比べ薄く施釉され、釉色は多少くすんだオリーブ色を呈する。

国産陶器

(45・47)は瀬戸・美濃系の皿と花瓶である。皿(45)は口縁部が水平方向に外反し、端部が上方へ拡張する皿である。釉は黄色味を帯びたオリーブ色を呈し、口縁部には露胎した部分が認められる。(47)は花瓶の底部である。底部は回転糸切り手法の痕跡を明瞭に残す。釉は暗オリーブ色を呈し、細かな貫入が認められる。(45)と同様、胎土は精良で灰白色を呈する。

瓦(1～52)

瓦は破片を含めると3,563点出土した。その内訳は別表のとおりで、丸瓦、平瓦が圧倒的に多く、両者を合わせると全体の90%以上を占める。瓦はA～Cの各調査地区より出土している。確認調査の出土例を合わせると、調査地区の北端にあるB地区ではA－1～3区、A地区ではA－15～19区、C地区ではC－18・19区の各範囲に限られる。瓦が出土した遺構はC地区旧河道、A地区池状遺構、掘立柱建物9(P4)、土坑1～4から出土している。このなかでも、とくに出土量の多い遺構は池状遺構で、瓦に混じって多量の炭、焼土塊が確認されている。調査の所見では、おそらく寺院が焼失しその廃材処理のためこの池に投棄されたと推察され、良好な一括資料である。池状遺構の瓦は比較的遺存状態が良く、今回図化したものの多くはこの池状遺構出土の瓦である。

表1　出土瓦種別構成表

種　別	個数	比率(%)
軒丸瓦	37	1.0
軒平瓦	55	1.4
丸　瓦	1,472	41.4
平　瓦	1,849	52.0
雁振瓦	144	4.0
鬼　瓦	6	0.2
合　計	3,563	100.0

※平瓦は熨斗瓦を含む

瓦の説明にあたっては用途別（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、熨斗瓦、鬼瓦）に分け、さらに各々の形状、法量、製作技法等の特徴でさらに細分した。

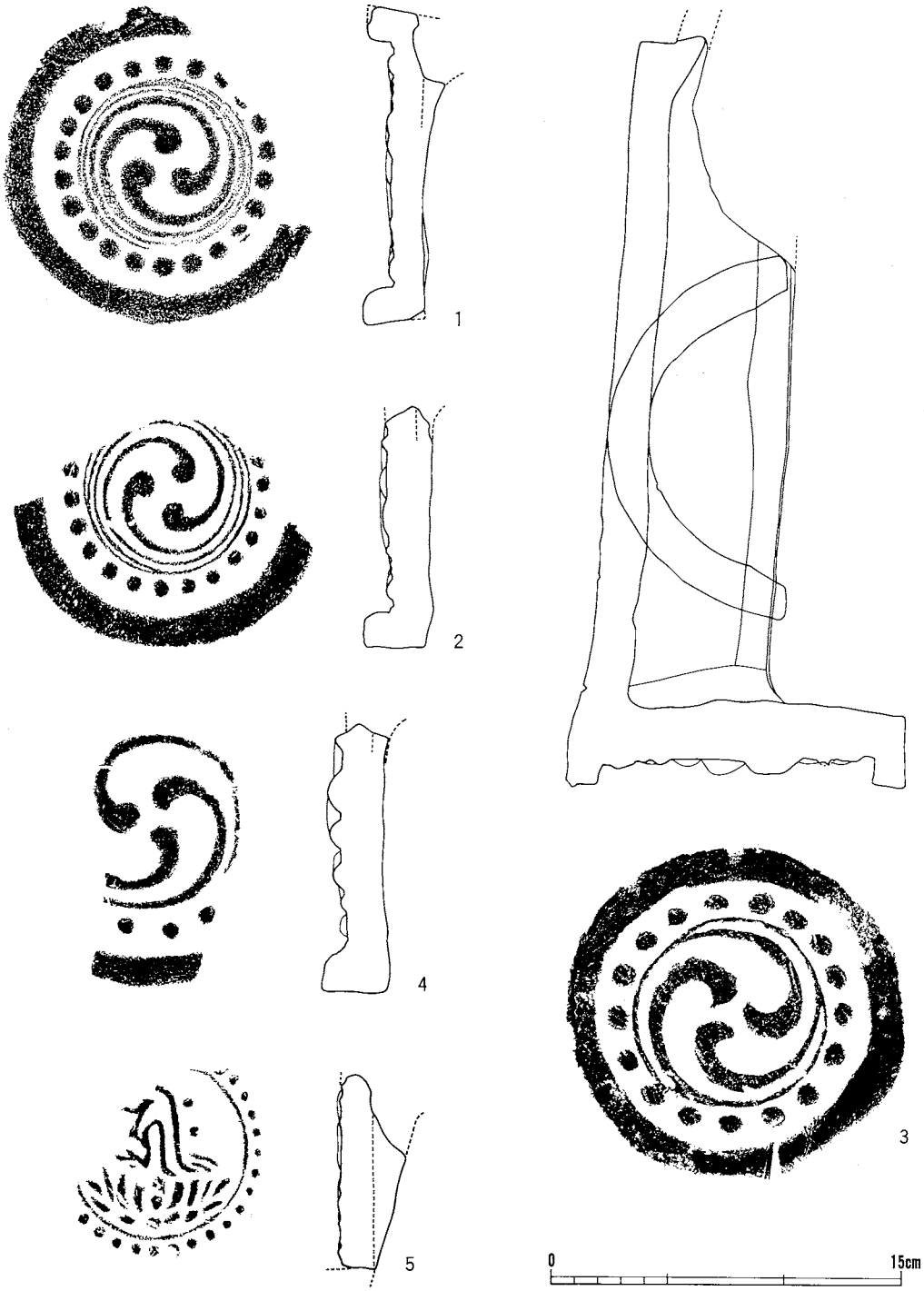
以下、各分類ごとに説明を行う。

軒丸瓦(1～4)

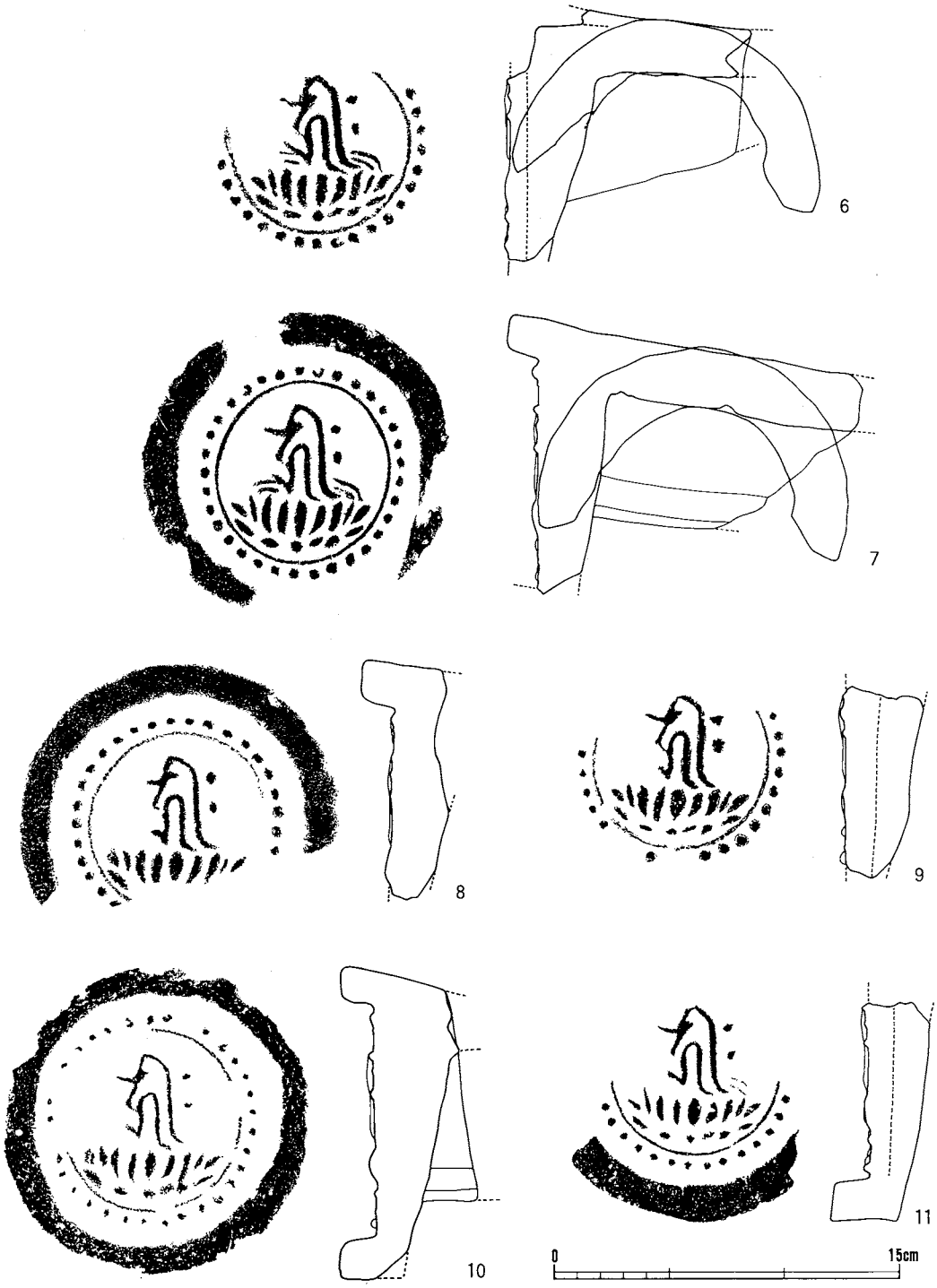
軒丸瓦は、瓦当文様で2つに大別される。三巴と梵字をもつ瓦である。前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。

Ⅰ類の三巴瓦は(4)を除きすべて左巻である。巴の頭部どうしはくっつかないが、その尾は互いにくっつき圏線を構成し、外区には珠文を配している。三巴瓦は、巴部、珠文、法量からa・b類の2つに細分できる。

Ⅰa類(1・2)　瓦当径13.5cmを測り、b類より小さく比較的丸い巴の頭と長い尾をもつ。



第31図　軒丸瓦Ⅰa・b類、Ⅱ類



第32図　軒丸瓦Ⅱ類

尾は約１周し、他の尾にくっつく。珠文は22個配されている。

胎土は粗砂を少量含み、焼成は良好である。色調は灰白色を呈し、須恵質である。

Ⅰｂ類（３・４）　瓦当径14.0cmを測る。尖った頭部をもち、尾はａ類よりも短く、約1/2周して他の尾とくっつく。珠文は17個配されている。胎土は中砂を多量に含み、軒平瓦Ⅲ類、丸瓦Ⅱ・Ⅲ類と類以し、焼成は良好である。色調は灰色を呈し、須恵質である。

Ⅱ類（５～11）　瓦当径13.5cm前後、内区に「キリーク」の梵字を陽刻する。梵字の下段には蓮華をモチーフとした台座が刻まれる。

胎土は精良であるが、胎土にクサリ礫を含むものもある。軒平瓦Ⅰｂ類と類似する。焼成は甘く、表面が黒化する。いわゆる「いぶし焼き」の技法が採用されている。

出土状況・製作技法

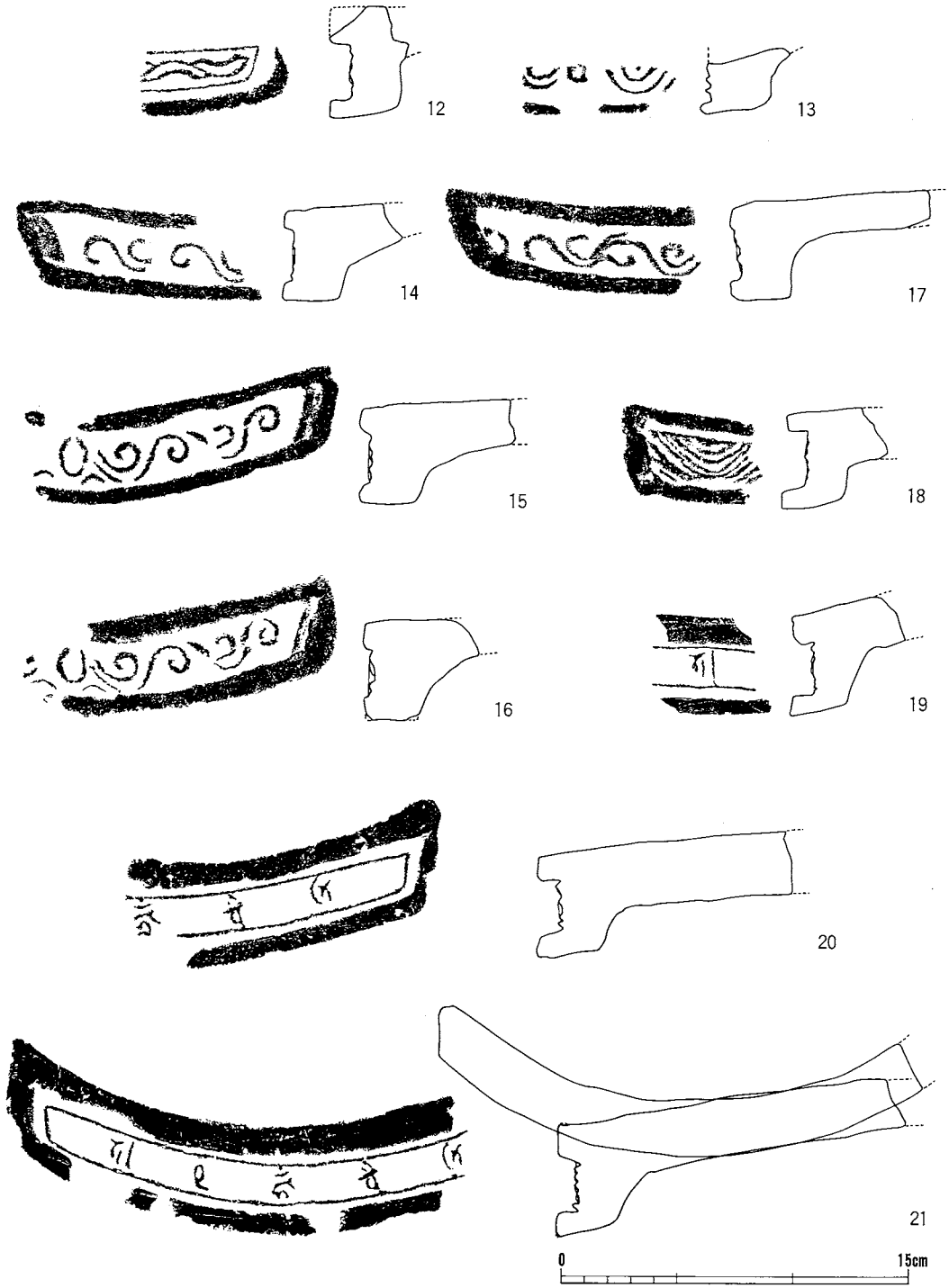
軒丸瓦は37個体出土し、出土量は極めて少ない。このうち、量的に突出して多い軒丸瓦はⅡ類の梵字瓦である。

Ⅰａ類は３点出土し、いずれも胴部を欠いており製作技法は不明瞭である。瓦当裏面の接合位置は、指ナデによって凹みをつくり丸瓦を接合させている。瓦当裏面の調整は、粗い不定方向のナデ調整を施し、調整の最後に顎の円周に沿うナデを加えている。（２）は瓦当外縁の外端に狭い面取りが施されている。

Ⅰｂ類はⅠａ類と同様３点出土した。なかでも（３）の瓦は、玉縁部分を欠損するのみで遺存状況が良好である。胴部凸面はナデ調整が施されるが、丁寧ではなく縄叩きの痕跡を残す。瓦当と胴部の接合付近は胴部に沿ってヘラケズリ調整が施され、接合部付近を整えている。胴部凹面には縦糸15本/cm、横糸12本/cmの細かい布目痕が残り、両側縁には1.2～2.1cmの幅で面取りが施される。瓦当部裏面はナデで平坦に調整しており、顎も角張っている。瓦当外縁部の外端と内端には、部分的に面取りがなされている。瓦当面にはハナレ砂の痕跡を認める。

Ⅱ類は29点出土しており、軒丸瓦のなかでは出土量の一番多い瓦である。（８）の瓦当を観察すると瓦当と胴部の接合部分は、Ⅰａ類と同様、指ナデによって凹みをつくり丸瓦を接合させている。接合部の内外面には接合粘土を加え接合を補強している。凸面側の接合粘土は図版21を見ると幅２～３cm前後の粘土帯で補強している。瓦当裏面の調整は丸瓦凹面と接合粘土との境に沿って、指ないし工具を使用して強くナデ調整を施し、接合度合いを強化した後、瓦当裏面の下半に横方向のナデを加え、顎部を整えている。

胴部の調整は、比較的遺存状況の良好な（６・７）を観察すると、胴部凸面の胴部から玉縁部に向ってヘラケズリ調整が施されている。胴部凹面には縦糸が12本/cm、横糸が10本/cmの細かい布目圧痕が残る。この布目上には浅い山形の吊り紐痕が、瓦当部付近と胴部中位に各１条づつ認められる。この吊り紐は太さ５mmと太く、山の部分は布袋内に紐を通している。胴部凹面両側縁には幅1.5cmの面取りが施されている。



第33図　軒平瓦Ⅰa・b類、Ⅱ類、Ⅲ類

軒平瓦(12～27)

軒平瓦は軒丸瓦と同様瓦当文様で３つに大別できる。唐草文を配するものをⅠ類、波状文をもつものをⅡ類、梵字をもつものをⅢ類とした。

Ⅰ類の唐草文軒平瓦は文様構成および形態的特徴から２つに細分した。

Ⅰａ類(12)　内側に一重の郭線を巡らし、唐草茎と支葉がくっつき、あたかも波状文の様相を呈する。周縁高は、0.8cmとⅠ類のなかでは高い法量をもつ。胎土は極少量の礫を含むが精良である。焼成は甘く表面は黒化している。

Ⅰｂ類(13～17)　内側に郭線をもたず、瓦当文様は、簡略化された均整唐草文である。アルファベットのＣを上向きにした中心飾をもち、左右に蕨手を配する。唐草は、左右に三転して展ぶ。周縁高は0.3cmと低く、瓦当部と周縁部にほとんど差がない。胎土は中～粗砂を多量に含み、また径１mm前後のクサリ礫を混入している。胎土は軒丸瓦Ⅱ類と近似する。焼成は甘く、表面は黒化している。いずれも摩滅しており遺存状況は極めて悪い。

(14～16)は脇区に瓦范端の段が残っている。また(13)は周縁の下端幅が0.４cmとⅠｂ類のなかでも狭く、あるいは細分可能なのかもしれない。

Ⅱ類(18)　波状文をもつ瓦である。周縁高は0.9cmとⅠａ類の軒平瓦と同様に高い。幅は上端が1.2cm、下端が0.9cmと下端が狭い。胎土は礫を極少量含むが精良である。焼成は甘く、表面は黒化している。

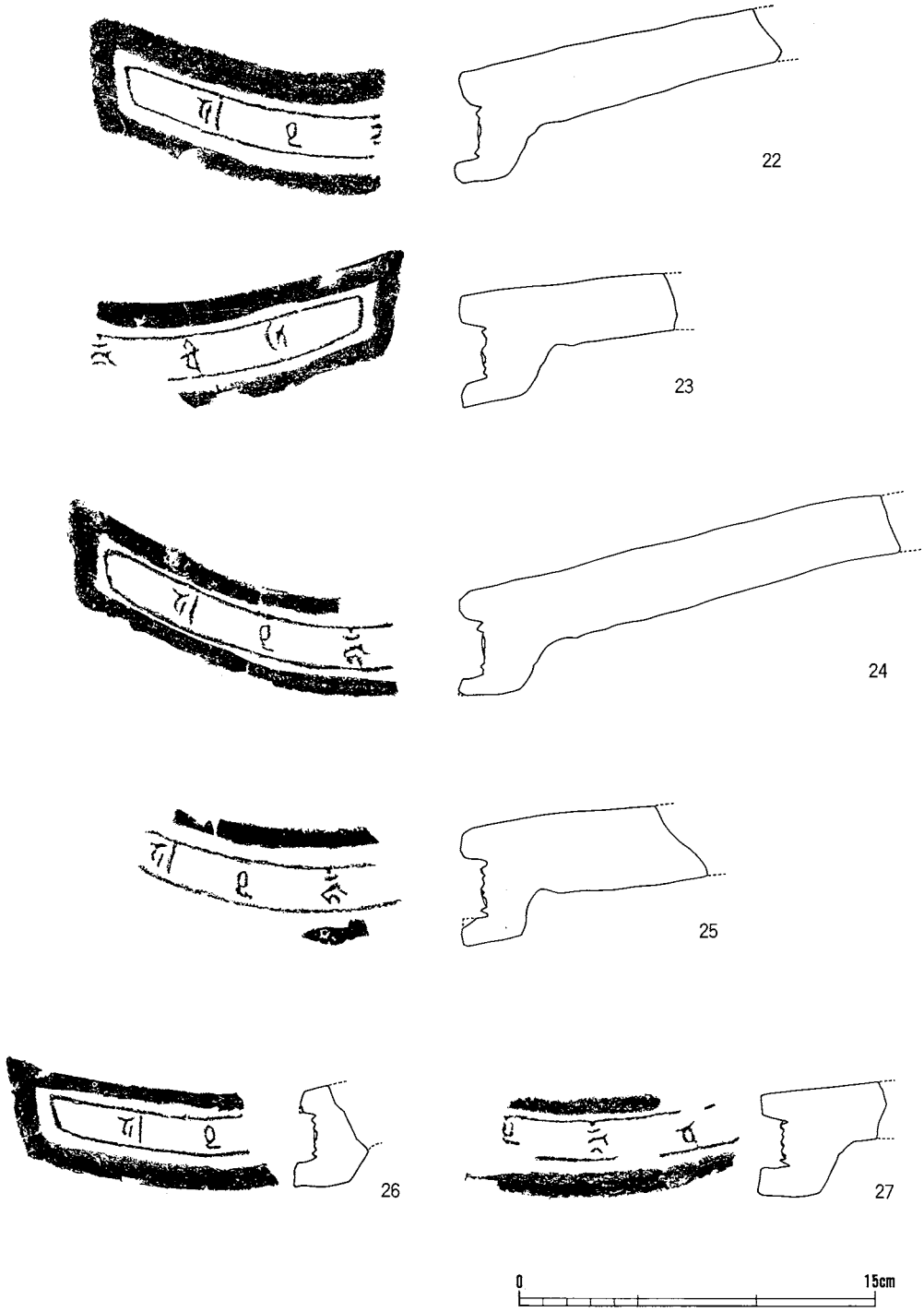
Ⅲ類(19～27)　一重の郭線を巡らしたなかに梵字を陽刻した瓦である。梵字は「カーン（不動明王)」を中央に置き、左へ内側より「ジリ（持国天)」、「ビー（広目天)」、右側は「ベイ（多聞天)」、「ビ（増長天)」の四天王を配している。梵字はかなり簡略化され、とくに「ビ・ビー」はその傾向が顕著である。また、(27)の「ベイ」のように〰が消滅しているものがある。周縁高は１cm前後とⅠａ・Ⅱ類と同様高い。周縁幅は上端が１cm、下端が0.7cm前後である。胎土は細～中砂を多量に含む。焼成は一部不良なものも存在するが、須恵質である。

出土状況・製作技法

軒平瓦は55個体出土し、全体的には軒丸瓦と同様極めて少量である。分類別にみるとⅢ類が突出して多く、47個体を数える。

Ⅰ・Ⅱ類の軒平瓦は遺存状況が極めて悪く、製作技法は不明である。ただ焼成技法ににについて言えば、いずれも表面に炭素が付着し、黒化しており「いぶし焼き」の技法が採用されている。瓦当面のハナレ砂の有無については瓦当面の摩滅が著しく確定できない。

Ⅲ類の軒平瓦は、比較的遺存状況も良好でハナレ砂の痕跡が認められる。焼成は概ね良好で須恵質である。平瓦部凹面側には縦糸12本/cm、横糸14本/cmの細かい布目が残り、両側縁部には0.5～１cmの幅で面取りが施されている。また周縁部上端には(20)のように無調整のもの、工具によってナデ調整を施すもの(21～23・26)、(24・25)のように面取りをするものがある。



第34図　軒平瓦Ⅲ類

顎部はナデ調整を施し、平瓦部凸面は幅2.5cm前後の幅広の工具によって、縦方向を主体としたナデ調整が施されている。瓦当と平瓦部の接合部は強いナデ調整を施し、凹んでいる。

丸　瓦(28～31)

丸瓦は細片を含めると1,472点出土し、総出土量の41％を占める。平瓦についで出土量が多い。しかし出土量の多さに比べ、遺存状況は悪く分類可能な個体はわずか63点であった。出土位置は、大半が池状遺構からの出土であるが土坑・Ⅱ層包含層からも若干出土している。

丸瓦は法量で３つに分類した。

Ⅰ類(28)　胴部長28cm前後、狭端部幅15.5cm前後、玉縁長５cm前後の法量をもち、丸瓦のなかでも大型の瓦である。胎土は細砂を多く含み、焼成は良好である。

Ⅱ類(29・30)　胴部長27cm前後、狭端部幅14cm前後、玉縁長は5.5cm前後である。胎土は微細な白色粒子を多量に含み、焼成は非常に良好である。

Ⅲ類(31)　胴部26cm前後、狭端部幅13cm前後、玉縁長は３cm前後のものと、５cm前後のものがある。胴部狭端部側・玉縁部に直径１cm大の釘穴をもつものがある。釘穴をもつタイプの丸瓦はこのⅢ類丸瓦に限られる。胎土は少量の礫とⅡ類で認められた白色粒子を含むがその量は少ない。焼成は甘く、軟質のものが多い。

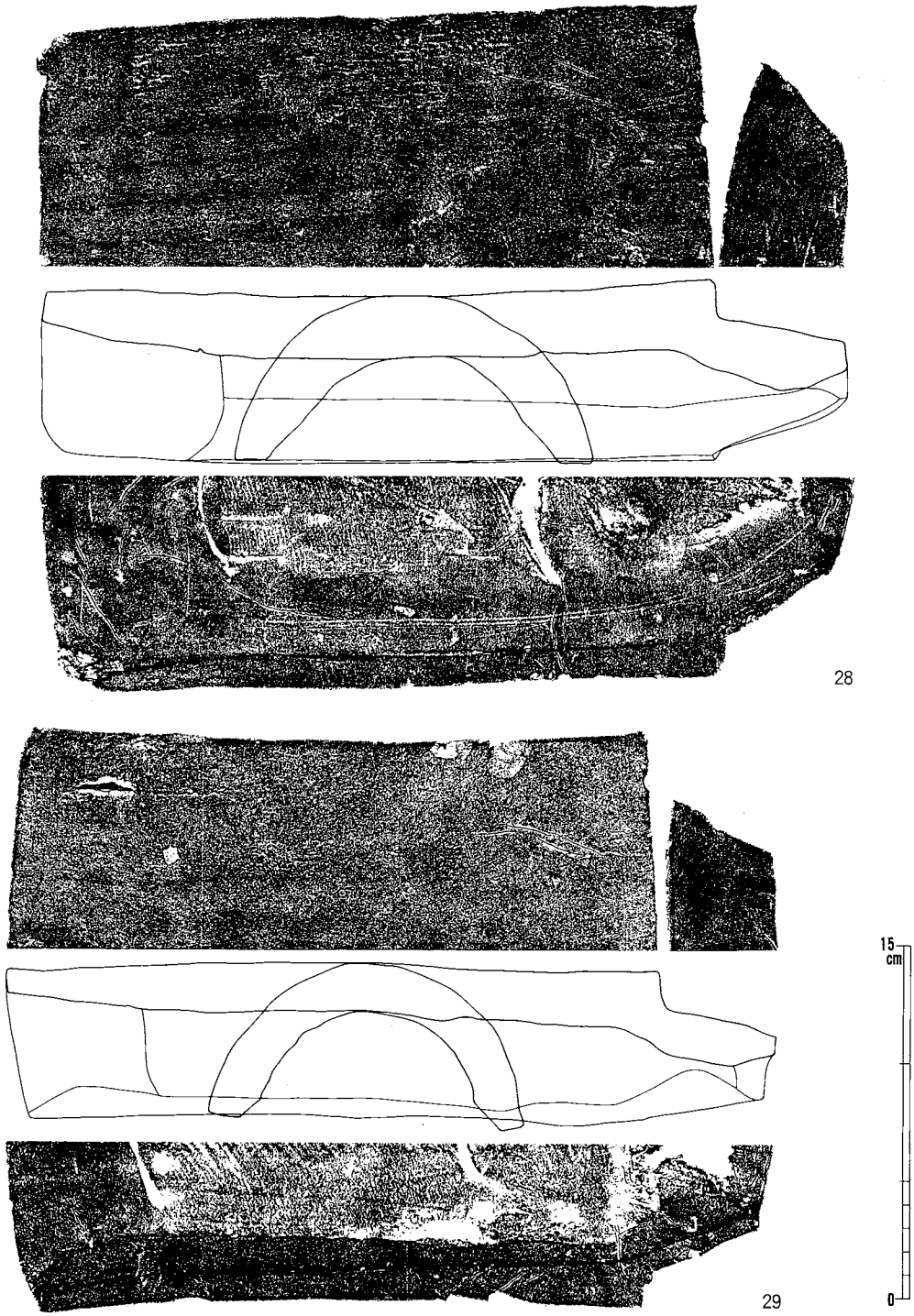
出土状況・製作技法

分類可能な63点の丸瓦のうち、Ⅱ類丸瓦が突出して出土量が多く全体の60％を占める。ついでⅠ類、Ⅲ類の順で続く。遺存状況は比較的良好で完存するものも数点出土している。

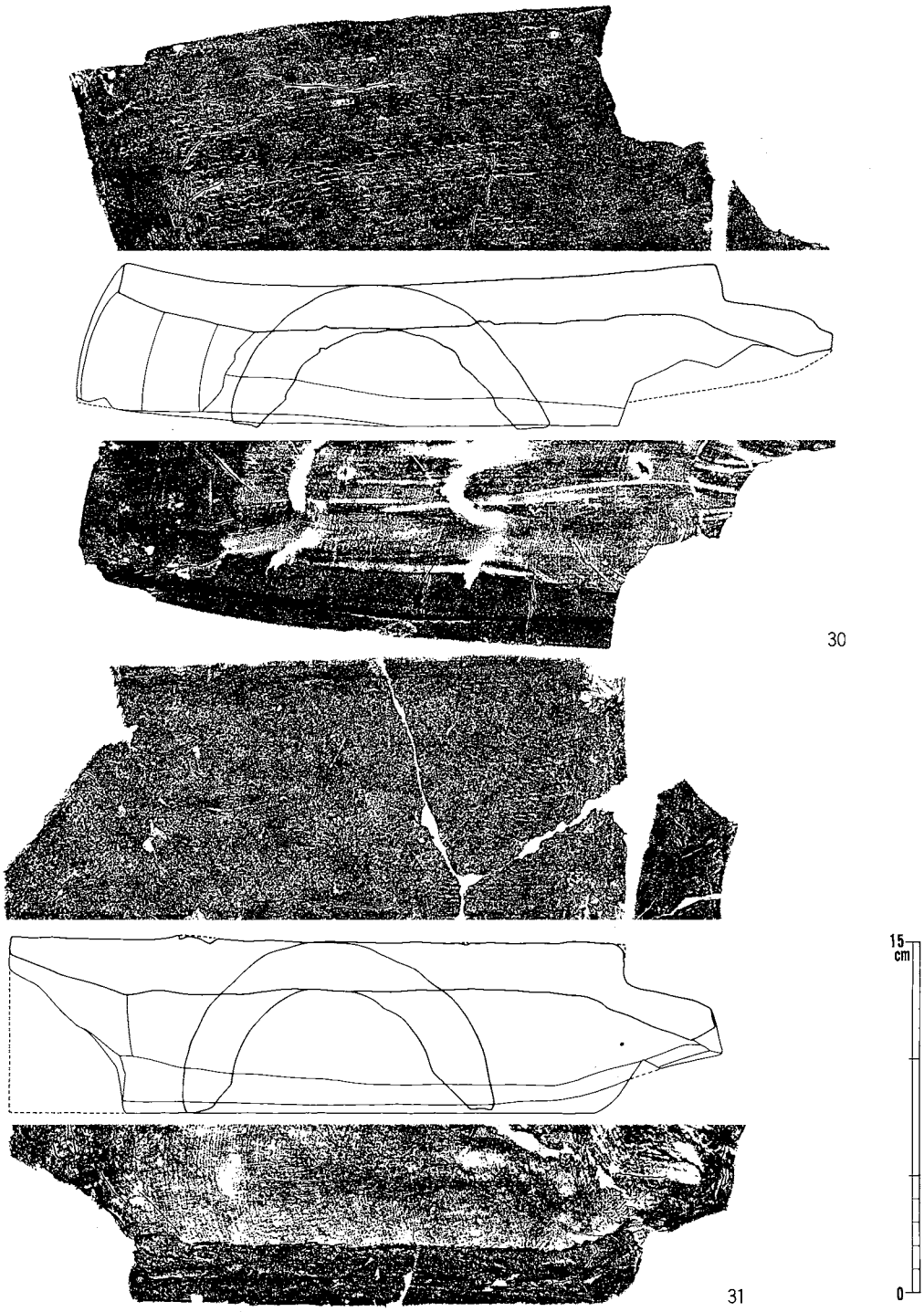
製作技法は各分類を通じて基本的に変化はない。胴部凸部の調整は、縄叩き→縦方向のヘラケズリ調整→胴部のカーブに沿って丁寧なナデ調整を施している。その後、不定方向のナデを部分的に加え、調整を終了している。Ⅰ・Ⅱ類はヘラケズリ調整による凹凸を残すが、Ⅲ類はヘラケズリ後のナデ調整が丁寧であるため、凹凸をほとんど残さない。玉縁部は各類ともナデ調整によって整えられている。玉縁部両側縁は面取りされており、Ⅲ類は胴部と玉縁部の接合部分まで面取り調整が施されている。

凹面は布目痕が認められる。Ⅰ・Ⅱ類は縦糸12本/cm・横糸10本/cm前後と布目が細かく、Ⅲ類は縦糸11本/cm・横糸８本/cm前後と前者に比べると布目が粗い。これらの布目上には狭端部付近と広端部付近に各一列づつ吊り紐の痕跡が認められる。浅い山形状に吊り紐を垂らし、頂部は布袋内に縫い込んでいる。吊り紐の太さは５mm前後と太いが、Ⅱ類の中には３mm前後の細い紐も認められる。ただⅢ類のなかには、この吊り紐痕跡が認められないものが２例ある。

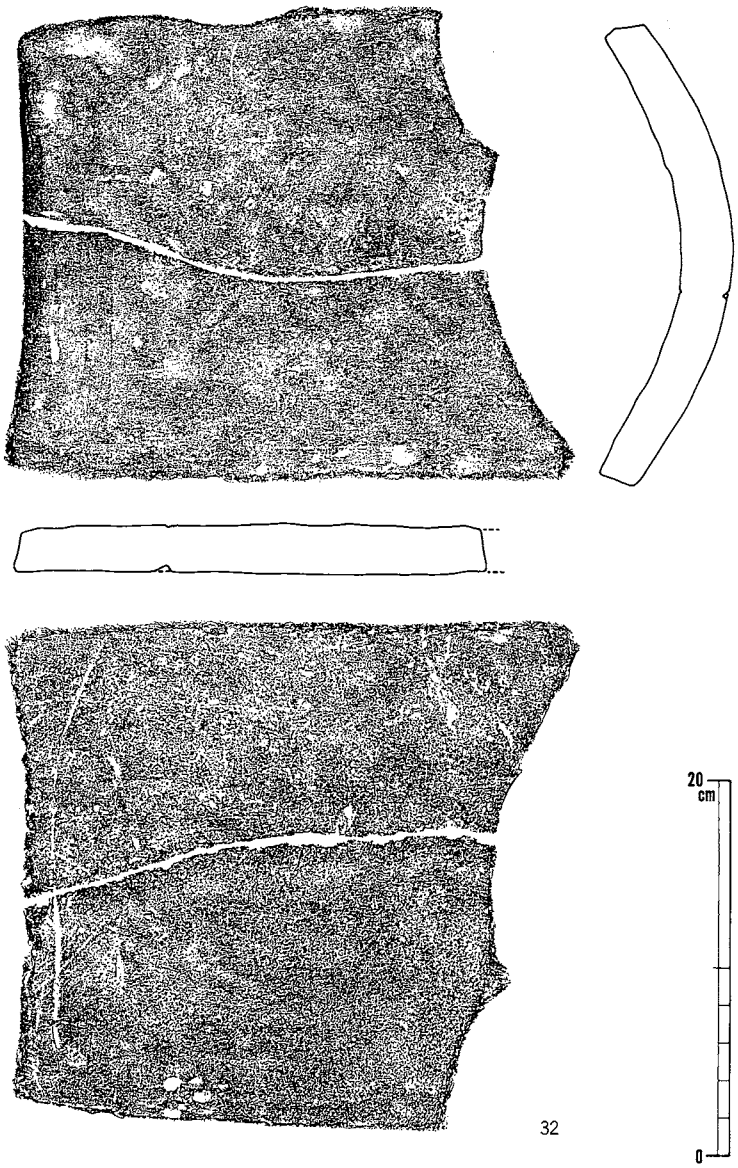
凹面胴～玉縁部側縁、玉縁部先端、広端部の各部位には幅広の面取りが施されている。胴～玉縁部側縁の面取り調整は、Ⅰ類が幅３cm前後と広く、Ⅱ・Ⅲ類は２cm前後と狭くなる傾向がある。広端部の面取り幅も同様の傾向を示し、Ⅰ類が、幅７cm前後、Ⅱ・Ⅲ類が、幅５～６cm前後とⅠ類の面取り幅が広くなる傾向が看取される。ただⅢ類の丸瓦は遺存状況が悪く、１点



第35図　丸瓦Ⅰ・Ⅱ類



第36図　丸瓦Ⅱ・Ⅲ類



第37図　平瓦Ⅰ類

のみの計測値で、平均値を算出していない。

平　瓦(32～34)

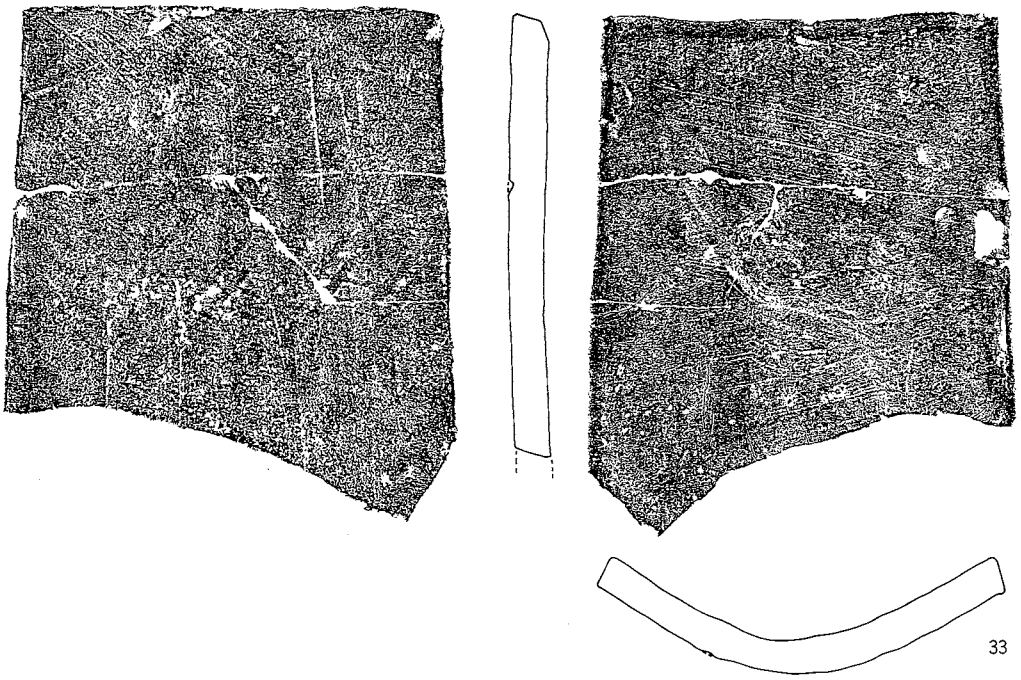
平瓦は細片を含めると1,850点余り出土し、出土した瓦のなかでは最も多く出土している。分類の識別が可能な平瓦は86点出土しているが完存するものはない。平瓦の大半が池状遺構からの出土である。

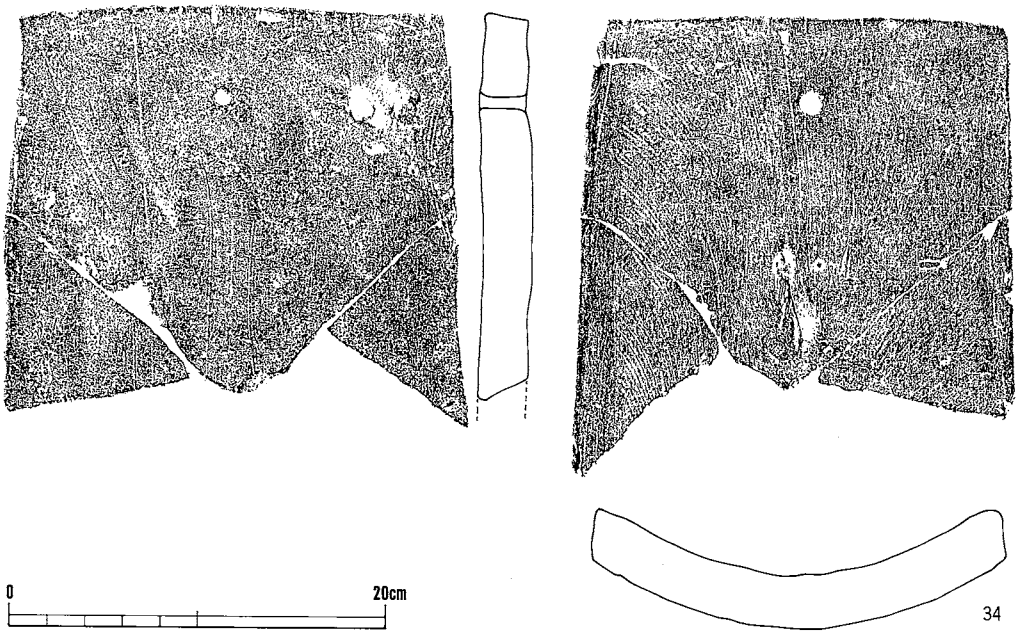
平瓦は法量・形態から3つに分類した。

Ⅰ類(32)　全長32cm前後、狭端部幅21～22cm、広端部幅は推定で24cm前後と出土した平瓦のなかでは最も大型の瓦である。凹面狭端部に面取り調整を施す。胎土は微細な白色粒子を多量に含み、焼成は良好である。

Ⅱ類(33)　遺存状況が極めて悪く、正確な法量は不明瞭である。法量を推定すると全長28cm、狭端部幅20cm前後、広端部幅21cm以上の瓦で、狭端部と広端部に法量の差があり平面形が台形を呈する。Ⅰ類と同様、凹面狭端部に面取り調整を施し、さらに片側側縁に面取り様の弱いヘラケズリ調整が施される。胎土は、Ⅰ類と同様に微細な白色粒子を含むほか、少量の礫を含む。焼成は良好である。

Ⅲ類(34)　Ⅱ類よりも台形の度合いが強い平瓦である。法量は全長24cm以上、狭端部幅21cm前後、広端部22cm以上と推察される。狭端部寄りに釘穴を穿った瓦が4点出土している。Ⅰ・





第38図　平瓦Ⅱ・Ⅲ類

Ⅱ類のように凹面狭端部には面取り調整を施さず、広端部に面取り調整を施す。また凹面両側縁部に明瞭な面取り調整を施す。胎土は、Ⅰ・Ⅱ類と同様に微細な白色粒子を含む。焼成は良好である。

出土状況・製作技法

Ⅰ～Ⅲ類に分類した瓦のなかでⅡ類の瓦が突出して多く、全体の70％を占める。次にⅢ類が多く、Ⅰ類の出土量は３点と極めて少ない。

各類の瓦はいずれも凸面側にハナレ砂の痕跡を認める。Ⅰ・Ⅲ類の平瓦はいずれもハナレ砂をヘラケズリ調整で掻き取っている。Ⅰ類は全体に粗く掻き取っているのに対し、Ⅲ類は狭端部付近のハナレ砂をそのまま残す以外は比較的丁寧に掻き取っている。Ⅱ類は未調整でハナレ砂痕跡をそのまま残している。さらにⅡ類には叩き板痕跡を残すものが多い。この叩き板には刻目文様が施されたものもあり、叩き文様をもつ平瓦はⅡ類に属するものが多い。また、Ⅱ類には意図は不明であるが凸面側に(33)のように糸切り様の痕跡を残すものがある。

凹面はⅠ・Ⅲ類のように布目痕が認められるものと、Ⅱ類のように認められないものがある。布目はⅠ類が縦糸13本/cm、横糸11本/cm、Ⅲ類が縦糸12本/cm、横糸11本/cmと細かい。布目はいずれも不定方向のナデ調整によって粗く消されている。Ⅱ類はナデ調整が施されているが部分的に砂目が残る。Ⅱ類凹面に布目の痕跡が認められないことから、この砂目は凸型成形台から瓦を剝がし易くするためのハナレ砂の痕跡と考えられる。

鳥衾瓦(35)

池状遺構より１点出土した。瓦当の一部、雁振部の約1/2欠損する。残存する長さは35cm、高さ20cm、瓦当径13.7cm、推定雁振部幅17cm前後を測り、突出部の長さは16cmで反り気味である。瓦当の文様は軒丸瓦Ⅱ類と同じ「キリーク（阿弥陀如来)」である。

外面は顎部周縁に沿って粗いナデ調整が施される。凸面側突出部から雁振部にかけては縦方向のヘラケズリ調整が施されている。凹面側雁振部は縦糸10本/cm、横糸12本/cmの細かい布目が残っている。両側縁には幅５cmの広い面取りが施されている。

胎土は微細な白色粒子・クサリ礫を含み、軒丸瓦Ⅱ類と類似する。焼成は不良で、軟質である。

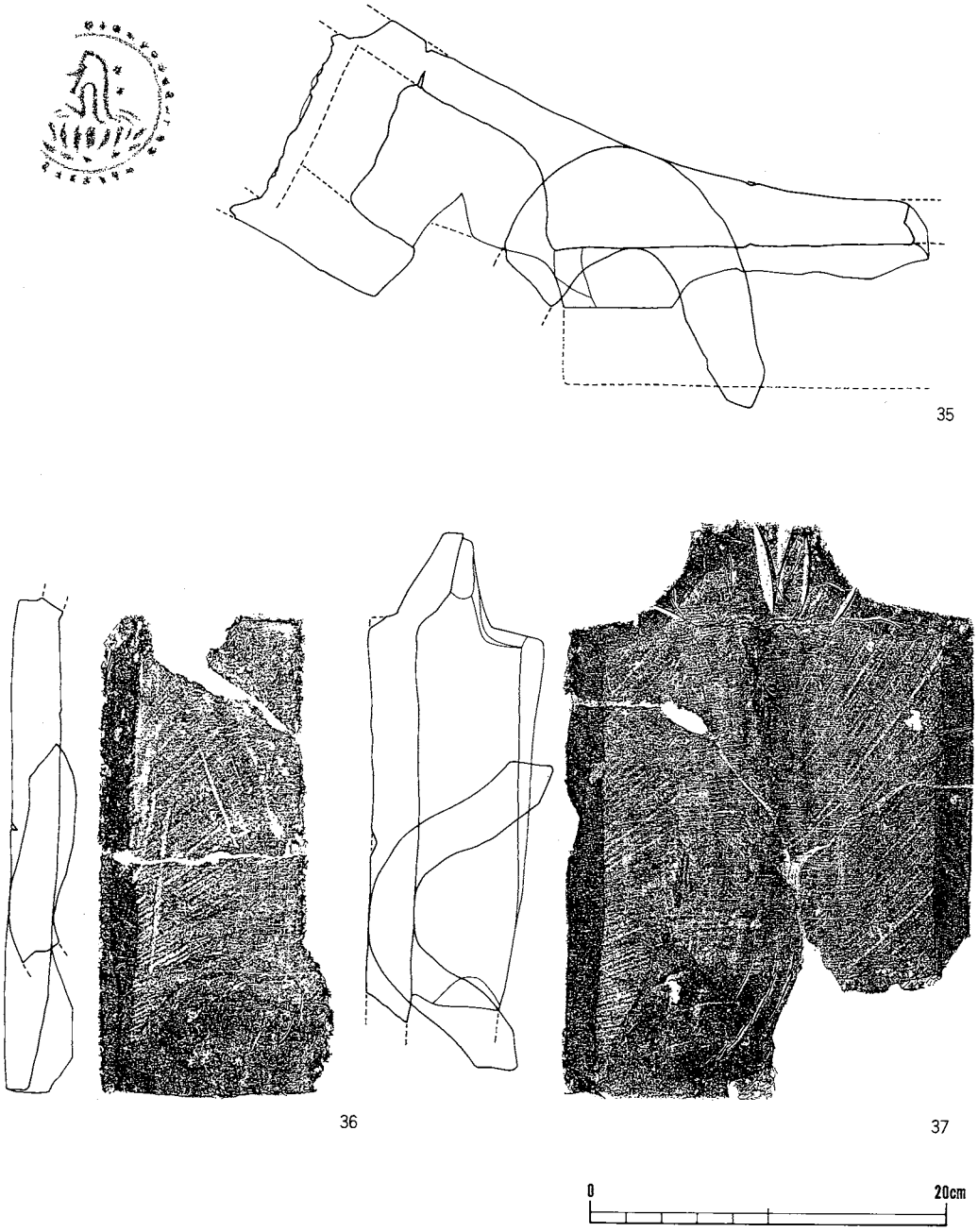
雁振瓦(36・37)

雁振瓦は細片を含めると144点出土し、丸瓦・平瓦についで多く出土している。このうち遺存状況が良好なものは５点と少ない。出土位置はすべて池状遺構である。

雁振瓦はその形態で２つに分類した。

Ⅰ類(36)　高さが４cmと偏平なもの。胎土は白色粒子・クサリ礫を含み、焼成は軟質である。

Ⅱ類(37)　高さが９cm前後とⅠ類より高いもの。胎土は白色粒子を少量含み、焼成は硬質で平瓦Ⅱ類と近似する。



第39図　鳥衾瓦・雁振瓦Ⅰ・Ⅱ類

出土状況・製作技法

Ⅰ類の凸面側胴部は胴部のカーブに沿って、丁寧なナデ調整が施されている。側面は斜めにヘラケズリされ、また凹面側側縁部は2㎝の幅で面取りされ、両者がなす角度は鋭角になっている。凹面側胴部には縦糸12本/㎝、横糸13本/㎝の細かい布目痕と糸切り痕が残っている。凹面側広端部には7㎝の幅広の面取りが施されている。Ⅱ類の調整は、基本的にⅠ類と同じで、凸面側胴部の調整、凹面側広端部・側縁部の面取り調整が施されている。玉縁部は先端から狭端部に向かって、ヘラケズリされ最終調整としている。側面はⅠ類と異なりほぼ垂直にヘラケズリされ、側面端部は2㎜幅の狭小な面取りが施されている。凹面側側縁には幅2㎝の均一な面取りが施され、側面と凹面のなす角度は鋭角である。凹面側広端部の面取り幅は7㎝とⅠ類と同じで、凹面側玉縁部には幅3㎝前後の面取りが施されている。凹面側胴部には布目と糸切り痕跡が残り、布目は縦糸11本/㎝、横糸12本/㎝と細かい。

熨斗瓦(38・39)

熨斗瓦と識別できる個体は5点と非常に少ない。

熨斗瓦は法量で2つに分類した。

Ⅰ類(38)　全長33㎝とⅡ類よりも大型のもの。幅は20㎝前後と考えられ、厚さは2㎝前後で平瓦と大差ない。胎土は微細な白色粒子を若干含み、焼成は硬質である。

Ⅱ類(39)　全長26.5㎝と小型のもの。幅はⅠ類と同じ20㎝前後で、幅は1.5㎝と薄い。胎土は微細な白色粒子と少量の礫を含み、焼成は不良で軟質である。

この他にⅡ・Ⅲ類の平瓦を中央で切断し熨斗瓦に転用した例が2例ある。

出土状況・製作技法

上記したように熨斗瓦の出土量は極めて少なく、すべて池状遺構からの出土である。遺存状況は不良で完存するものはない。とくにⅠ類の瓦の厚さは2㎝と平瓦と大差なく、細片での両者の区別は困難である。したがって第1表出土瓦種別構成表では平瓦のなかに熨斗瓦も含めている。

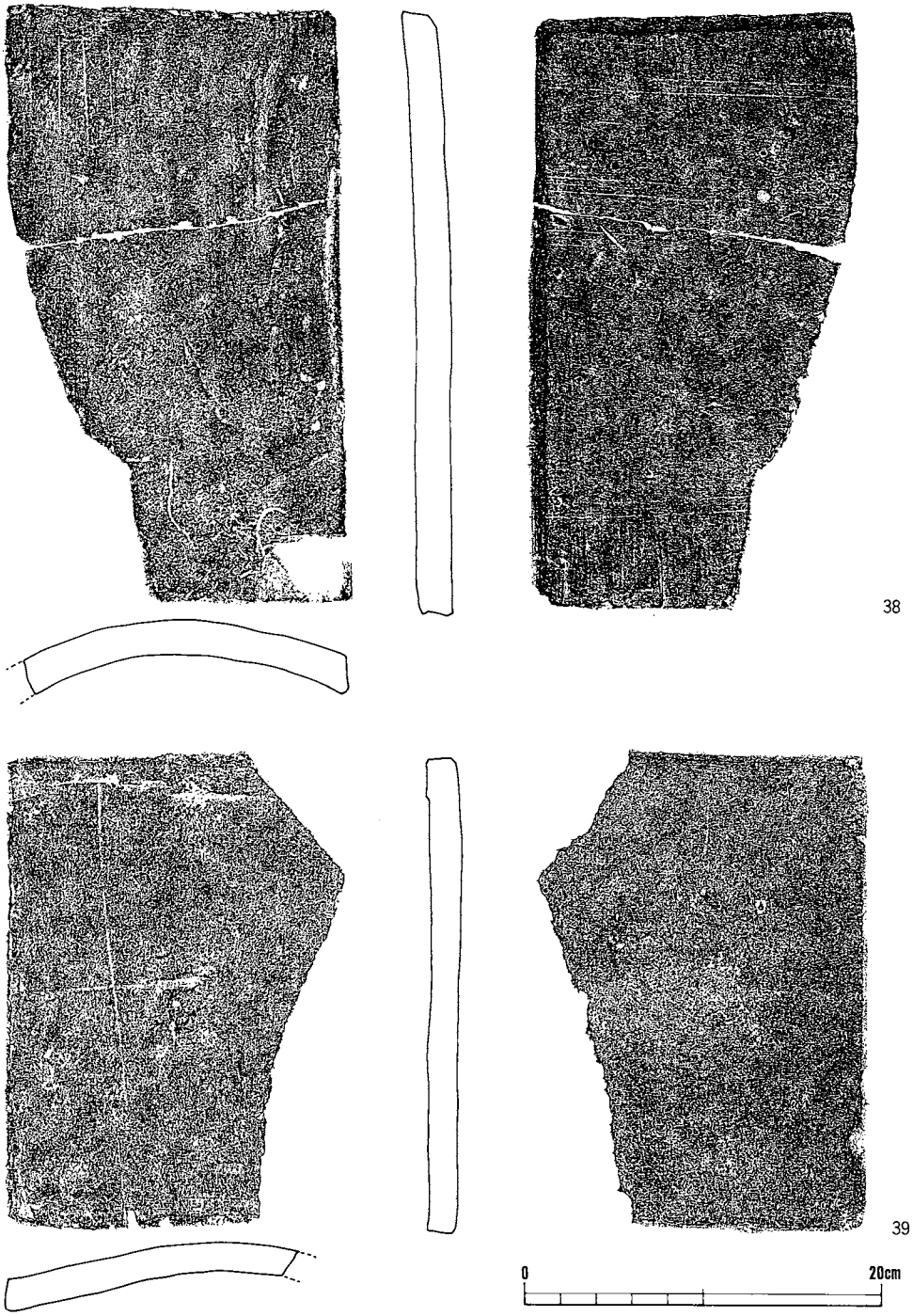
Ⅰ類の凸面側はハナレ砂の痕跡を残し、ナデ調整で仕上げている。Ⅱ類はハナレ砂は認められず、不定方向のナデ調整で丁寧に仕上げている。凹面側は両者ともにナデ調整で仕上げられ、上端と側縁部に面取りが施されている。

両者の調整技法は基本的に同じであるが、凸面側にハナレ砂を残す点で異なる。

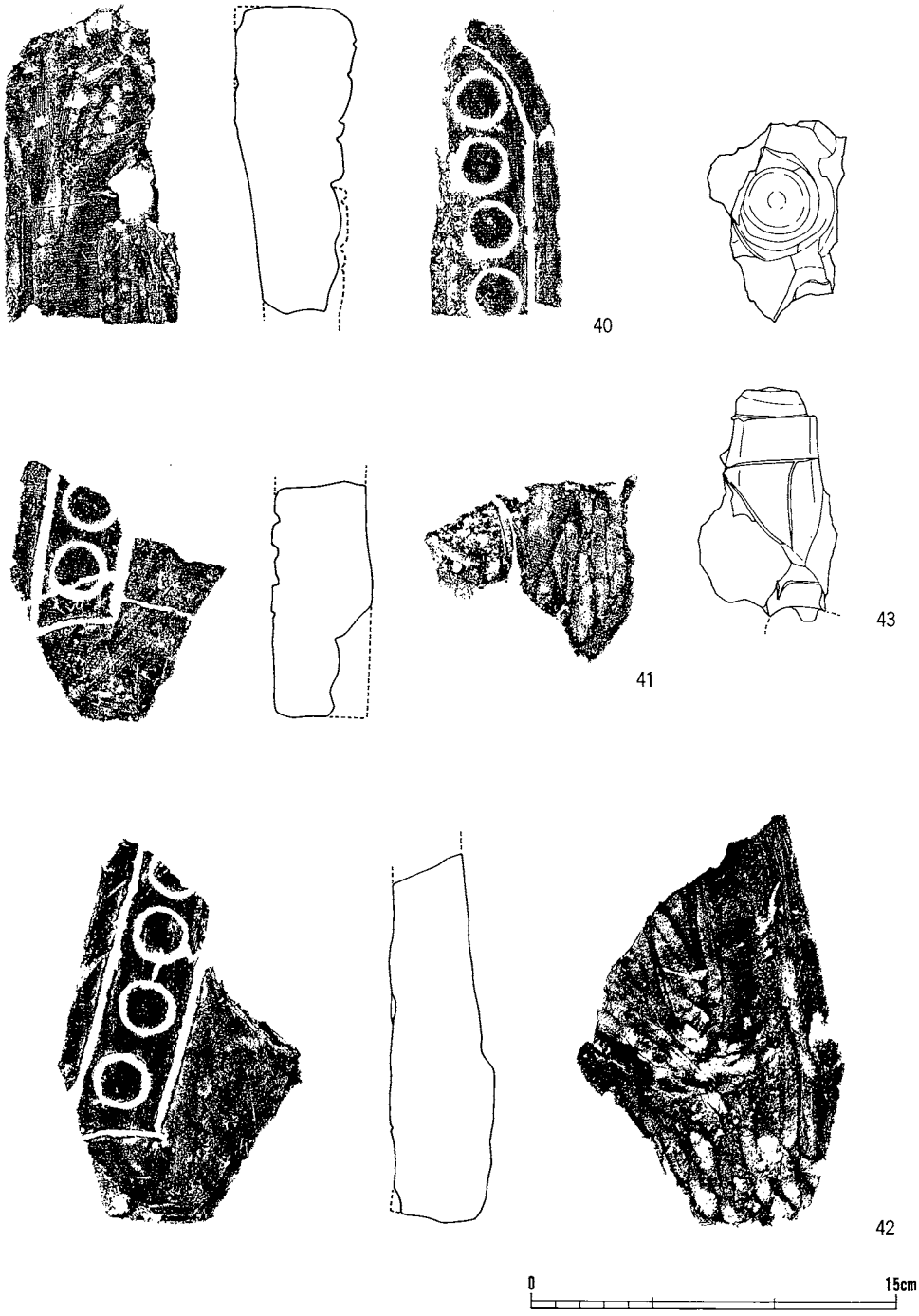
鬼　瓦(40～43)

鬼瓦は4点出土した。(40～42)の破片は周縁部の破片で、(43)は眼の部分である。このうち(41)は土坑4より出土している。残りはすべて池状遺構からの出土である。胎土・焼成・調整技法の点から(41)を除く鬼瓦は同一個体と考えられる。

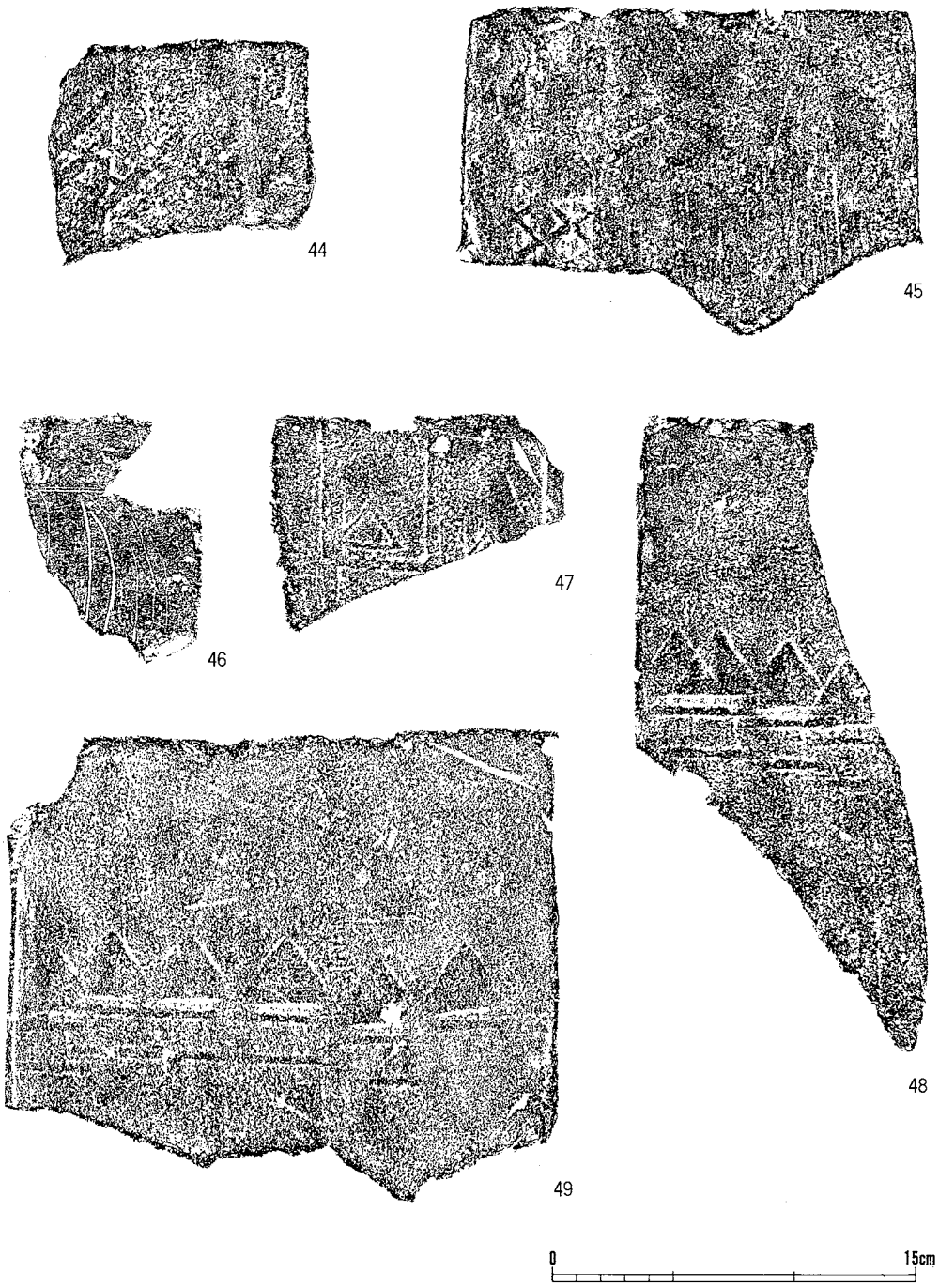
周辺部分はナデ調整を行い、直径1.7㎝前後の連珠文を陰刻している。連珠文はヘラによる



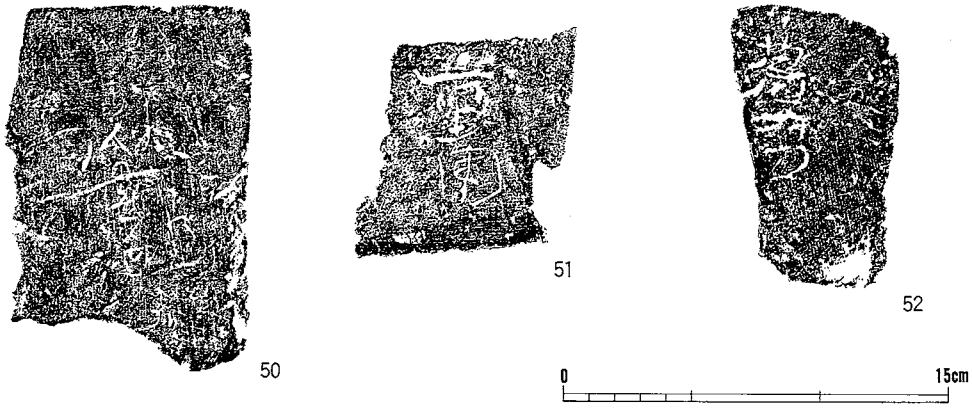
第40図　熨斗瓦Ⅰ・Ⅱ類



第41図　鬼　　瓦



第42図　文 様 瓦



第43図　文 字 瓦

凹線の枠によって画されている。胎土は微細な白色粒子を多量に含み、焼成は良好で硬質である。ただ(41)の焼成は軟質で、他とは異なる。

文様瓦(44～49)

平瓦凸面側に文様をもつ瓦は、(46)のヘラ描き文様をもつ瓦を除いて、すべて叩き目文様瓦である。叩き目文様瓦は40点出土している。

叩き目文様の種類は３つに分類される。

A類　横長の斜格子文をもつ(33・44・45)

B類　△文と下に横線が２本入るもの(47)

C類　▲文と下に横線が２本入るもの(48・49)

A類は叩き板に⧖状に文様を陰刻している。B・C類は同文であるが、三角形の外線のみ陰刻したものと三角形全体を陰刻している点で異なっている。各類の瓦の出土数はA類が３点（7.5％）、B類が19点（47.5％）、C類が13点（32.5％）、不明が５点（12.5％）とA類が極めて少ない。文様をもつ平瓦は平瓦Ⅱ・Ⅲ類に限られ、B・C類はⅡ・Ⅲ類の平瓦両方に施文される。ただA類は、３点の資料すべてⅡ類の平瓦である。

文字瓦(50～52)

(50)は丸瓦凸面側胴部に３行19文字が陰刻されている。表面が摩滅しているため判読が困難である。

「□□□□□の

□□　　□□□

り人のみひかな□」

と判読される。

(51)は平瓦Ⅱ類の狭端部付近の破片である。凹面側に「重國」の文字が陰刻されている。

(52)は平瓦Ⅱ類の破片である。文字は凹面側に2文字以上陰刻されている。判読はできなかった。

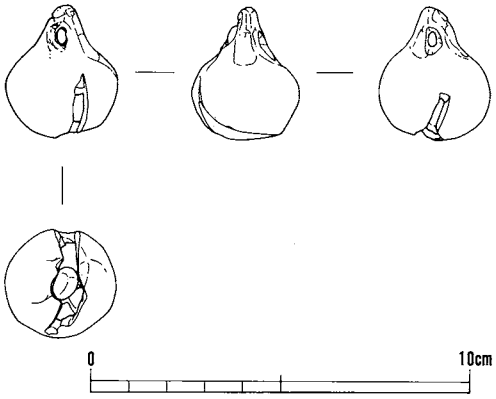
表2　瓦分類別出土位置

種別	遺構	包含層					遺構						総計
	分類	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱc	Ⅲ	池状遺構	掘立柱建物9	土坑1	土坑2	土坑3	土坑4	( )は百分率
軒丸瓦	Ⅰa						3						3 (1.2)
	Ⅰb						3						3 (1.2)
	Ⅱ			2	2		25						29 (11.5)
軒平瓦	Ⅰa						1						1 (0.4)
	Ⅰb						4						4 (1.6)
	Ⅱ			1			2						3 (1.2)
	Ⅲ			1			45						46 (18.2)
丸瓦	Ⅰ				5		7	1	1			1	15 (5.9)
	Ⅱ			6	1		31	1	1			1	41 (16.2)
	Ⅲ			1	2		6						9 (3.6)
平瓦	Ⅰ						3						3 (1.2)
	Ⅱ				3		54	1	1			1	60 (23.7)
	Ⅲ				2		20					1	23 (9.0)
鳥衾瓦							1						1 (0.4)
雁振瓦	Ⅰ						1						1 (0.4)
	Ⅱ						4						4 (1.6)
熨斗瓦	Ⅰ						2						2 (0.7)
	Ⅱ						1						1 (0.4)
鬼瓦							3					1	4 (1.6)
総計													253 (100)

※総計（ ）内は百分率
※遺構出土の個体数に未記入のものは細片のため分類不可。

土製品

出土した土製品は鈴である。頭部に吊り下げ用の孔を穿っている。身部は中空でいびつな球形を呈し、身部下端には切り込みが施されている。内側には５㎜前後の玉状の粘土塊が認められる。頭部・身部の仕上げはユビナデ調整が丁寧に施されている。大きさは全長3.5㎝、身幅は2.9㎝を測る。Ｃ地区Ⅰｂ層より出土している。



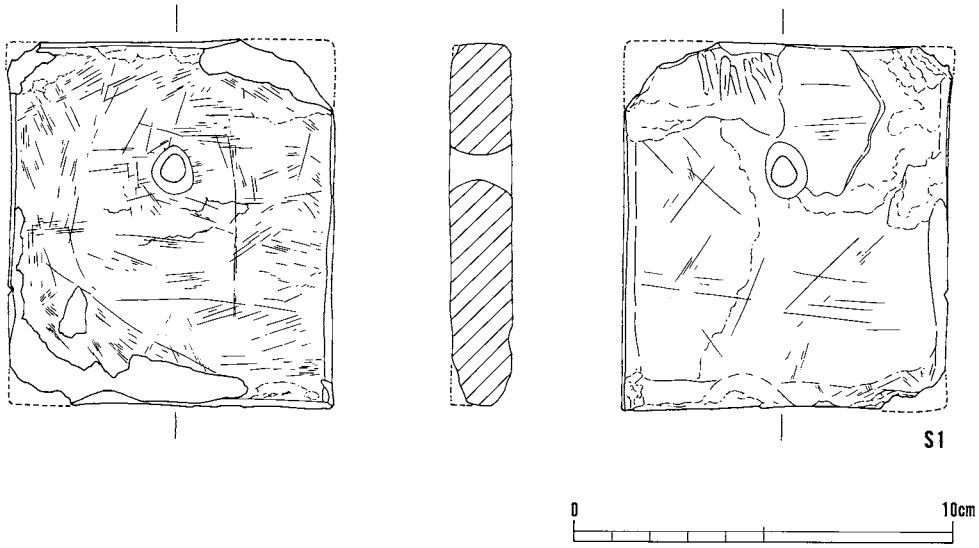
第44図　土　鈴

石製品

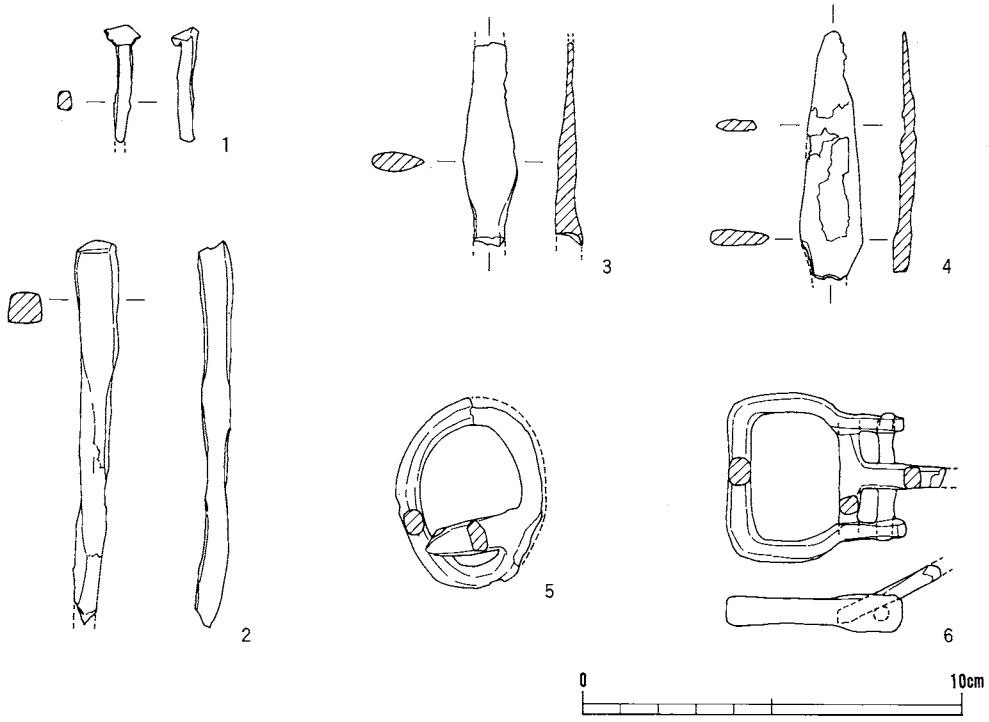
石製品は温石の可能性をもつ滑石製の石が出土している。出土位置は池状遺構埋土上層である。形状は上方に孔を１箇所穿った長方形の板状を呈する。全長9.7㎝、幅8.6㎝、厚さ1.2㎝の大きさをもち、重さは305gを測る。側面に一部欠損した箇所があるがほぼ完存している。表面および側面は磨き調整によって丁寧に仕上げられている。裏面は磨きの痕跡が認められるが、表面ほど丁寧な仕上がりではない。裏面の隅にはノミ状工具によって削られた痕跡が認められる。穿孔部は両方向より径６㎜前後の規模で穿たれている。

鉄製品（１～６）

鉄製品は６点出土している。その内訳は釘、不明鉄製品、鏃、鉸具である。いずれも錆化が



第45図　温　石



第46図　鉄製品

著しく、遺存状況は悪い。出土位置は(1)の鉄釘が池状遺構埋土下層、(3)の鏃と(6)の鉸具が掘立柱建物7(P2・3)より出土している。(2)の不明鉄製品は掘立柱建物3(P9)より出土している。また(4)の鏃はA－13区内検出の柱穴内より出土している。この柱穴は建物として識別できなかったものである。(5)はA－19区表採資料である。

(1)は身部先端を欠損する釘である。頭部は頭巻で身部も曲がっているところから使用済の釘である。残存長3.1cm、身部幅は3mmを測り、身部の断面形は方形を呈する。重さは4.8gである。

(2)は不明鉄製品である。身部の下半は錆化が進み痩せている。残存長は10.1cm、身部幅は8mmを測る。身部の断面形は方形を呈する。重さは17.3gである。頭部には打痕が残り、身部下半が曲がっているところから、大型の釘あるいは鏨等の機能が考えられる。

(3・4)は箆被廣鋒平造三角形式の鏃である。(3)は身部先端、箆被部を欠損している。身部の上半は錆化が進み痩せている。形状は身部が二等辺三角形を呈し、弱い関部をもっている。身部の断面形は両丸と推察される。残存長5.3cm、最大身幅1.4cm、重さ4.8gを測る。(4)は箆被部を欠損する。身部は全体的に錆化が進み、とくに先端は錆化が著しい。形状は(3)と近似し、身部の断面形は両丸ないしは切刃と考えられる。残存長は6.5cm、最大身幅が1.6cm、重さ

は5.2gを測る。

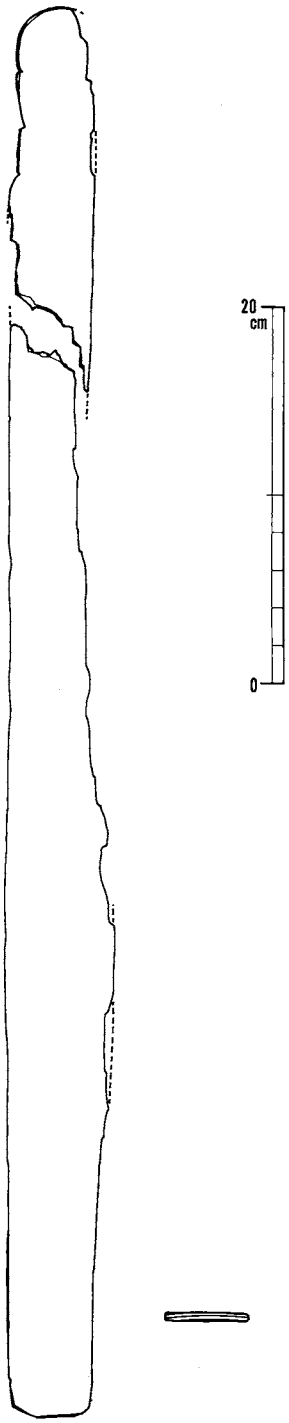
（5）は外枠が楕円形で基部と外枠部の区別のない鈕具である。基部付近は錆が著しく、現況を留めていない。刺金は先端が尖った三角形を呈し、基部下位に先端を斜め下方に向け、固定している。外枠の断面形は円形、刺金は両端が切り込まれた台形状を呈する。外枠長は5.1cm、幅は最大で3.9cmを測る。外枠の厚さは7mm、刺金は5mmを測る。重さは14.9gである。

（6）は外枠が方形で基部に軸棒をもつ鈕具である。刺金の先端を欠損するだけで遺存状況の良好なものである。基部には2箇所の軸棒をもち、内側の軸棒には刺金が固定されている。枠長は4.7cm、幅は3cmを測る。外枠の断面形は隅丸長方形を呈する。

木製品

池状遺構の護岸石中より、折れ曲がった状態で出土した。上端より、空・風・火・水・地輪の各部位が刻まれ、五輪塔を表現している。空輪は先端を丸く削り、尖ってはいない。地輪は丸みを帯びてそのまま塔身に続き、塔身は中位で幅広となる。下端より15cm上より両側面を削り、幅を減じ、下端は両隅を丸く削り整えている。全長は74cm前後と推察され、幅は最大で5.8cm、下端で4.2cmを測る。厚さは5mm前後である。塔身の表には墨書が施されている。しかし墨は全て消えてしまっており、墨書部分が僅かに隆起し、墨書の痕跡を留めている。墨書の全容は、残りが悪いため判読が困難である。墨書は上端より24cmのところからはじまり、五輪塔部分には墨書の痕跡は確認できない。塔身中位までは一行分の文字の痕跡が識別でき「□□衆生□□道□□」の文字が判読できる。塔身中位から下端にかけて2行分の文字の痕跡が確認できる。右列、下端から12cm上には「寛正□□」の年号（寛正年間1460年～1464年）が判読できる。

墨書の文字の判読が困難なため、実測図は文字部分を省略している。



第47図　五輪塔形卒塔婆

表3　出土土器観察表

番号	出土位置	種別 器種	法量 口径	器高	底径	焼成	色調 外面	内面	胎土	備考
1	A-13区 Ib層	土師器 Ⅲ	(9.2)	1.0	—	良	7.5YR7/8 10R6/8	7.5YR7/8 10R6/8	粗砂多量	口縁部1/3、底部7/8残。 器形が大きく歪む。
2	A-16区 掘立柱建物 跡8　P9	土師器 Ⅲ	9.6	1.8	6.0	良	7.5YR8/3 5YR8/4	7.5YR8/3 5YR8/4	粗砂～礫多量	完形品
3	A-14区 掘立柱建物 跡6　P6	土師器 Ⅲ	(10.5)	1.4	(8.4)	良	7.5Y8/2 2.5YR6/6	7.5Y8/2 2.5YR6/6	粗砂～礫多量	1/5残。
4	A-13区 掘立柱建物 跡5　P7	土師器 Ⅲ	(9.1)	1.8	—	良	2.5Y8/3	5YR8/3	粗砂少量	3/4残。
5	A-13区 掘立柱建物 跡2　P4	土師器 Ⅲ	9.5	1.7	—	良	7.5YR8/3	7.5YR8/3	粗砂少量	若干欠損 器形が大きく歪む。
6	A-1 Ⅲ層	土師器 Ⅲ	9.2	1.6	—	良	7.5YR7/2	10YR8/4	粗砂極少量	1/5残。
7	A-12•13区 掘立柱建物 跡4　P7	土師器 Ⅲ	(9.6)	1.3	—	不良	10YR8/3	10YR8/3	粗砂極少量	1/2残。
8	A-13区 掘立柱建物 跡5　P7	土師器 Ⅲ	(10.0)	1.5	—	良	10YR8/1	10YR8/1	粗砂少量	1/3残。
9	A-12区 掘立柱建物 跡5　P2	土師器 Ⅲ	(9.0)	0.8	—	良	7.5YR8/4	7.5YR8/4	粗砂極少量	1/4残。
10	A-16区 掘立柱建物 跡8 P9	土師器 Ⅲ	(9.2)	1.0	—	良	5YR8/4	5YR8/4	粗砂少量	1/2残。
11	A-16区 Ib層	土師器 Ⅲ	9.4	1.5	—	普	10YR8/4	10YR8/4	粗砂少量	1/3残。
12	A-16区 溝5 下層	土師器 Ⅲ	(7.8)	1.7	—	良	7.5YR8/3	7.5YR8/3	中砂多量	1/2残。
13	A-17 掘立柱建物 跡9　P9	土師器 Ⅲ	(8.5)	1.5	(3.2)	良	2.5YR8/2 7.5Y4/1	7.5YR8/2 7.5Y4/1	粗砂少量	1/4残。
14	坪5 Ⅲ層	土師器 Ⅲ	(9.2)	1.8	—	良	7.5Y7/1	7.5Y6/1	中砂少量	1/2残。
15	A-13区 P(1)	土師器 Ⅲ	(13.8)	3.2	(5.3)	良	10R7/1 10R6/6	10R7/1 10R6/6	粗砂～礫多量	1/4欠損。

番号	出土位置	種別 器種	法量 口径	器高	底径	焼成	色調 外面	内面	胎土	備考
16	坪5 Ⅱa層	土師器 皿	(15.0)	(2.9)	—	普	2.5Y8/2	2.5Y8/2	精良	1/6残。
17	A-13区 掘立柱建物 跡2　P4	土師器 皿	(16.3)	2.0	(13.8)	良	2.5Y8/2	2.5Y8/3	粗砂少量	1/2残。
18	A-16区 P(2)掘形	土師器 皿	(16.8)	2.9	(8.4)	良	7.5YR8/2	5YR8/3	粗砂多量	体部1/8、底部1/5残。
19	A-16区 P(3)	土師器 羽釜	—	8.7～	—	不良	10YR7/2	10YR8/2	粗砂(石英)多量	口縁部破片。
20	A-13区 掘立柱建物 跡5　P13 掘形	土師器 羽釜	(19.0)	7.1～	—	不良	5YR7/6	10YR7.5/2	粗砂～礫多量	口縁部破片。
21	A-12区 掘立柱建物 跡4　P4	黒色土器 椀	—	1.3～	(7.6)	不良	N6/	N7/	中～粗砂少量	底部破片。
22	A-17区 土坑4 上層	黒色土器 椀	—	1.0～	6.6	普	N3/	N3/	精良	底部破片。
23	A-12区 掘立柱建物 跡2　P7 掘形	黒色土器 椀	(14.9)	4.9	(6.8)	良	N4/	N4/	粗砂～礫少量	口縁部1/3、底部残。
24	坪16 Ⅲ層	瓦器 椀	(14.6)	3.5～	—	普	N3/	N3/	中～粗砂少量	1/4残。
25	坪5 Ⅲ層	瓦器 椀	(14.6)	4.6～	—	普	N3/	N3/	中砂少量	口縁部破片。
26	A-16区 P(2) 掘形	瓦器 椀	(13.4)	4.1～	—	不良	2.5Y8/3	N2/	精良	口縁部破片。
27	坪17 Ⅲ層	瓦器 椀	(16.0)	3.6	(4.4)	普	2.5Y8/1	2.5Y8/1	粗砂～礫多量	1/5残。
28	C-18区 Ⅱa層	瓦質 羽釜	—	5.7～	—	普	N5/	N5/	粗砂多量	口縁部破片。
29	坪19 Ⅲ層	瓦質 羽釜	(20.8)	3.5～	—	普	N4/	N4/	粗砂～礫多量	1/8残。
30	A-18区 池状遺構 上層～Ⅱa層	瓦質 羽釜	(36.0)	4.3～	—	不良	N3/	10YR7/2	粗砂少量	口縁部1/6残。
31	A-18区 池状遺構 最下層	瓦質 羽釜	(31.2)	8.3～	—	普	2.5Y5/1 2.5Y7/2	2.5Y3/1	粗～礫多量	1/4残。
32	A-18区 Ⅱa層	瓦質 香炉	(27.4)	6.4～	—	良	N2/ 7.5R3/6	N2/ 7.5R3/6	粗砂～礫多量	口縁部破片。 朱塗布（内外面）

番号	出土位置	種別 器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
33	A-18区 池状遺構 上層	瓦質 蓋	—	5.7～	—	良	N3/ 7.5Y7/1	N3/ 7.5Y7/1 7.5R4/8	粗砂～礫多量	蓋口縁端部を欠く。 外面に赤漆塗布。
34	A-1～5区 Ⅲ層	須恵器 鉢	—	4.0～	—	普	N6/	N6/	中砂極少量	口縁部破片。
35	A-1～5区 Ⅲ層	須恵器 鉢	—	4.0～	—	不良	N6/	N6/	粗～中砂少量	口縁部破片。
36	坪5 P 1 柱穴内	須恵器 鉢	—	3.8～	—	普	N8/	N8/	中砂多量	口縁部破片。
37	A-18区 Ⅱa層	須恵器 甕	(36.0)	8.5～	—	不良	N4/	7.5YR7/2	中砂少量	口縁部破片。
38	坪1 Ⅱa層	須恵器 山茶碗	—	2.6～	7.5	やや良	2.5Y8/1	2.5Y8/1	粗砂～礫極少量	底部のみ残。
39	A-12区 P(4)	須恵器 椀？	—	3.1～	(8.7)	不良	5Y8/1	5Y8/1	中砂多量	底部1/2残。
40	A-17区 土坑4 上層	須恵器 山茶碗	(15.8)	4.3～	—	良	10Y8/1	10Y8/1	精良	口縁～体部1/6残。
41	坪14 Ⅲ層	白磁 椀	—	3.6～	—	良	5Y8/1	5Y8/1	黒色微粒子少量	口縁部1/8残。
42	A-19区 Ⅱa層	青磁 皿	—	1.1～	(4.4)	良	釉色 10Y5/2	釉色 10Y5/2	精良	底部破片。
43	A-1区 Ⅲ層	青磁 皿	(9.4)	2.4	(4.0)	良	釉色 5GY6/1	釉色 5GY6/1	黒色微粒子少量	1/3残。
44	A-19区 Ⅱa層	唐津系 皿	—	2.1～	(4.9)	良	5YR6.5/6 釉色 5Y7.5/1	5YR6.5/6 釉色 5Y7.5/1	中砂極少量	底部破片。
45	A-19区 Ⅱa層	瀬戸・美濃系 皿	(12.9)	1.9～	—	普	釉色 10Y6/2	釉色 10Y6/2	中砂極少量	口縁部破片。
46	A-19区 Ⅱa層	唐津系 椀	—	4.0～	(4.0)	良	5YR6/4 釉色 5GY7/1	釉色 5GY7/1	粗砂極少量	1/2残。
47	A-18区 池状遺構	瀬戸・美濃系 花瓶	—	4.9～	7.4	良	N8/ 釉色 5G6.5/1	N8/ 釉色 5G6.5/1	中砂極少量	底部残。
48	C-21区 Ⅱa層上面	伊万里系 椀	(10.1)	3.8～	—	良	釉色 7.5GY8/1	釉色 7.5GY8/1	精良	口縁部1/4残。
49	A-20区 畝状遺構直上	丹波系 擂鉢	—	6.4～	—	やや良	7.5YR7/3	2.5YR4/4	中～粗砂多量	口縁部破片。

番号	出土位置	種別 器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
50	A-20 畝状遺構直上	丹波系 擂鉢	—	6.6～	—	良	10YR6/4	10YR6/4	粗砂～礫少量	口縁部1/10残。
51	A-20 畝状遺構直上	丹波系 擂鉢	—	8.5～	—	良	7.5YR4/6	5YR5/3	粗砂多量	口縁部1/10残。

表4 出土瓦計測表

軒丸瓦 (cm)

番号・分類番号	出土位置	瓦当部 直径	瓦当部 内区 径	瓦当部 外区 幅	瓦当部 外区 珠文 数	瓦当部 外区 珠文 径	瓦当部 外縁 幅	瓦当部 外縁 高さ	体部 全長	体部 胴部 長さ	体部 胴部 幅	体部 胴部 狭端幅	体部 胴部 高さ	体部 玉縁部 幅	体部 玉縁部 長さ
1 Ⅰa類	A-18区 池状遺構	10.3	7.7	1.3	22	1.5	1.5	1.2	—	—	—	—	—	—	—
2 Ⅰa類	A-18区 Ⅱa層	(10.3)	7.3	1.3	14～	1.0	1.5	1.0	—	—	—	—	—	—	—
3 Ⅰb類	A-18区 池状遺構	14.5	8.5	1.5	17	1.1	1.4	0.9	32.3～	28	15.8	(15.5)	7.7	—	—
4 Ⅰb類	A-18区 池状遺構 下層	—	—	1.2	3～	0.9	1.4	1.0	—	—	—	—	—	—	—
5 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	—	7.8	—	17～	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	—	8.0	—	20～	0.5	—	—	10.7～	6.7～	13.3	—	7.5～	—	—
7 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	(13.5)	7.8	1.0	33	0.6	1.5	1.3	15.4～	10.9～	13.1	—	8.6～	—	—
8 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 上層	(13.8)	7.9	1.1	24～	0.5	1.5	1.4	—	—	—	—	—	—	—
9 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	—	(7.7)	1.1	20～	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—

番号・分類番号	出土位置	直径	内区	外区			外縁		体部						
			径	幅	珠文		幅	高さ	全長	胴部				玉縁部	
					数	径				長さ	幅	狭端幅	高さ	幅	長さ
10 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	13.6	8.0	1.0	33	0.5	1.4	1.4	—	—	—	—	—	—	—
11 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 上層	—	—	1.0	14～	0.5	1.6	1.4	—	—	—	—	—	—	—

軒平瓦（cm）

番号・分類番号	出土位置	瓦当											その他	
		上弦	下弦	内区		外区		脇区		外縁			瓦当厚	全長
		幅	幅	縦幅	横幅	縦幅	横幅	右幅	左幅	高さ	上幅	下幅		
12 Ⅰa類	A-18区 Ⅱa層	—	6.5～	1.6	5.0～	2.1	5.5～	0.8	—	0.8	—	0.8	2.1	7.2～
13 Ⅰb類	A-18区 池状遺構	—	7.5～	—	7.0～	—	—	—	—	0.5	—	0.6	2.5	4.2～
14 Ⅰb類	A-18区 池状遺構	8.1～	9.8～	2.2	7.3～	—	—	—	—	0.3	0.7	0.7	2.2	6.2～
15 Ⅰb類	A-18区 池状遺構 下層	13.3～	12.8～	2.2	11.9～	—	—	—	—	0.4	0.9	0.7	2.3	8.3～
16 Ⅰb類	A-18区 Ⅱa層	11.2～	14.0～	2.0	11.9～	—	—	—	—	0.3	1.1	1.0	2.5	5.6～
17 Ⅰb類	A-18区 池状遺構 上層	11.0～	9.2～	2.1	9.2～	—	—	—	—	0.2	1.0	0.8	2.1	8.7～
18 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 上層	5.7～	4.6～	2.2	4.7～	—	—	—	—	0.9	0.8	0.8	1.8	4.7～
19 Ⅲ類	A-18区 池状遺構	4.1～	5.0～	1.6	4.6～	2.0	—	—	—	0.6～1.0	1.2	0.7	1.5	5.6～
20 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	13.7～	11.0～	1.2	12.2～	2.0	12.7～	0.5	—	0.6～1.1	1.3	1.0	2.0	11.2～
21 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	19.0～	18.7～	1.7	18.1～	2.1	18.5～	0.4	—	1.0	1.4	1.0	1.8	15.1～
22 Ⅲ類	C-20区 Ⅱc下層	12.5～	12.0～	1.7	18.1～	2.1	18.5～	—	0.4	0.9	1.2	0.9	1.7	15.2～
23 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	13.0～	8.6～	1.7	12.0～	2.1	12.5～	0.5	—	1.0	1.1	0.9	2.1	13.0～

番号・分類番号	出土位置	瓦当											その他	
		上弦	下弦	内区		外区		脇区		外縁			瓦当厚	全長
		幅	幅	縦幅	横幅	縦幅	横幅	右幅	左幅	高さ	上幅	下幅		
24 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	14.0～	14.3～	1.7	12.6～	2.3	13.0～	—	0.4	1.0	1.0	1.1	2.0	18.8～
25 Ⅲ類	C区 Ⅱc層	9.4～	11.4～	1.8	11.3～	2.3	—	—	—	1.0	1.0	1.1	1.7	16.8～
26 Ⅲ類	C区 Ⅱc層	10.0～	10.8～	1.5	8.5～	1.9	8.9～	—	0.4	0.6～0.9	1.0	1.1	2.0	8.6～
27 Ⅲ類	A-18区 Ⅱa層	7.5～	11.5～	1.6	10.4～	2.0	—	—	—	0.9～1.1	0.9	1.1	1.9	5.5～

丸　瓦（cm）

番号・分類番号	出土位置	全長	胴部				玉縁部	
			長さ	狭端部幅	広端部幅	高さ	長さ	幅
28 Ⅰ類	A-18区 池状遺構 下層	34.2	28.7	15.6	14.8	7.1	5.5	12.0
29 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	32.7	27.8	13.6	13.3	6.7	4.9	7.6～
30 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	32.2	27.5	11.5～	12.1～	6.0	4.7	8.9～
31 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	30.4	26.2	13.3	13.5	7.3	4.2	9.9

平　瓦（cm）

番号・分類番号	出土位置	全長	狭端部幅	広端部幅	厚さ
32 Ⅰ類	A-18区 池状遺構 下層	36.6～	22.4～	—	2.4～2.7
33 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	27.4～	20.4	—	1.7～2.0
34 Ⅲ類	A-18区 池状遺構 下層	24.7～	21.5	—	2.2～2.7

雁振瓦（cm）

番号・分類番号	出土位置	全長	胴部				玉縁部	
			長さ	狭端部幅	広端部幅	高さ	長さ	幅
36 Ⅰ類	A-18区 池状遺構 下層	27.7～	27.7	10.5～	13.2～	4.0	—	—
37 Ⅱ類	A-18区 池状遺構 下層	32.4	27.9	18.1～	7.3～	9.2	4.5	—

熨斗瓦（cm）

番号・分類番号	出土位置	全長	狭端部幅	広端部幅	厚さ
38 Ⅰ類	A-18区 池状遺構 下層	34.4	18.0～	11.5～	1.8～2.0
39 Ⅱ類	C区 Ⅱc層	25.7	13.1～	14.0～	1.6～1.8

※法量の（ ）は、復元値をあらわし、～は残存値をあらわす。
色調は、(財)日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」によった。

3．奈良時代の遺物

今回の調査で出土した奈良時代の遺物は、C地区南端の流路2埋土中の須恵器杯身(52)1点のみである。

平坦な底部から強い屈曲をもたずに立ち上がる須恵器杯身であり、ほぼ完形である。残存状況が良好でないが、体部には内外面にヨコナデ、底部にはヘラ切りの痕跡が認められる。口径は11.4cm、器高3.5cm、底径8.7cmを測り、径高指数は30.7である。

第48図　流路2出土遺物

4．古墳時代の遺物

A－3～5区にかけて検出された流路1の埋土内より古墳時代の土器が出土している。

流 路 1

須恵器の蓋、坏、壺および土師器の壺が出土している。

(53)は坏蓋である。天井部と体部を分ける稜線は短く突出し、口縁端部は内傾し浅い凹みをもつ。天井部の2/3には右回転ロクロによるヘラケズリが施され、内面には仕上げナデがみられる。口径は13.2cm、器高は4.8cmを測る。

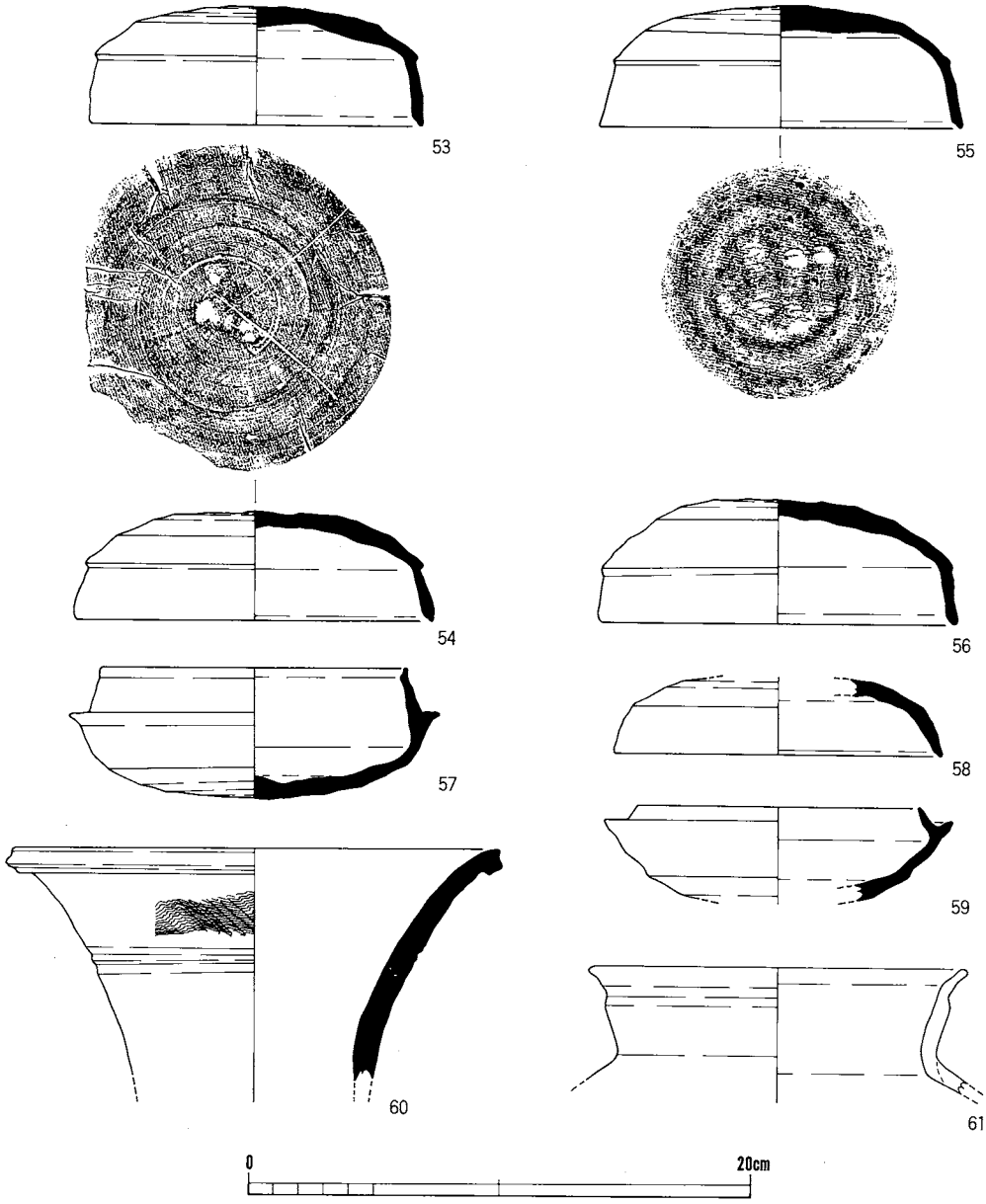
(55)は坏蓋である。天井部と体部を分ける稜線は短く突出する。口縁端部は内傾し、浅い凹みをもつ。天井部の2/3の範囲には左回転ロクロを利用したヘラケズリが施され、内面中央には指による1回の強い押圧が認められる。この押圧は平滑化を目的としたものと思われ、右手人差指から薬指までの第1関節から第2関節の間の指の背を利用している。口径は14.4cm、器高は4.9cmを測る。

(54)は坏蓋である。天井部と体部を分ける稜線は短く突出する。肥厚する口縁端部は内傾し、浅く凹む。天井部の2/3には左回転ロクロによるヘラケズリが施され、内面には仕上げナデを行う。天井部外面には十字形のヘラ記号が認められる。口径14.2cm、器高4.4cmを測る。

(56)は坏蓋である。天井部と体部を分ける稜線は段をなし、口縁端部は内傾している。天井部の1/2には右回転ロクロによるヘラケズリが施され、内面には仕上げナデがみられる。口径は14.2cm、器高は5.0cmを測る。

(57)は坏身である。たちあがりはゆるく内傾し、端面は浅い凹面を形成する。受部は水平に近くのびる。底部の2/3には右回転ロクロを利用したヘラケズリが施される。底部内面には仕上げナデがみられる。口径は12.2cm、器高は5.3cmである。

(58)は埋土上層から出土した坏蓋である。天井部と体部を分ける稜線を失い、口縁端部は丸くおさめる。天井部には右回転ロクロによるヘラケズリが施される。口径は13.1cmであり、他



第49図　流路１出土遺物

の坏蓋に比べて小さい点が指摘できる。

(59)は埋土の上層より出土した坏身である。たちあがりは短く内傾し、端面は丸くおさめる。底部の1/2には左回転ロクロを利用したヘラケズリが施される。口径は11.3cmと小さい。

(60)は広口の壺である。外反する長い口頸部をもち、２条の凹線を巡らす。この上段に細か

い櫛描き波状文を施文している。口径は19.3cmである。

(61)は土師器の壺である。やや外傾する頸部に外傾する口縁部をもつ。この境には凹線状のくぼみが巡る。口径は15.2cm、頸部径は12.8cmを測る。

須恵器は、胎土に砂粒を多く含むため器壁は平滑さを欠き、つくりも粗雑な感を受ける。内外面は灰白色と明るい色調を呈する。当時の中心的な生産地である陶邑古窯址群ではなく、地方窯からの製品の供給を考えるべきかもしれない。時期は、陶邑古窯址のＭＴ－15型式(53～57)、ＴＫ－43型式(58・59)の２つに分けられる。

５．弥生時代の遺物

今回の調査では弥生時代前期の甕が２点、弥生後期から終末にかけての壺２点、小型偏平片刃石斧１点が出土してる。いずれも遺構に伴うものではない。

(62)は前期の甕の口縁部の破片である。Ａ－13区の柱穴断ち割り時に出土したものであるが、柱穴内の出土と捉えるよりは地山であるⅣ層内に含まれていた可能性が大きい。

緩く外反する短い口縁部をもつ破片である。倒鐘形の体部を呈するものであろう。体部と口縁部の境には２条の沈線が巡る。口縁端部には鉄分等の付着があるため明確ではないが、刻み目が施されていたと思われる。内面の最終調整はユビナデである。

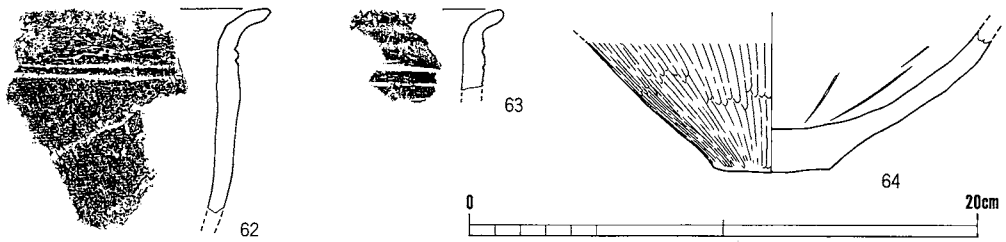
(63)は前期の甕の口縁部の破片である。Ａ－17区の柱穴断ち割り時に出土したものであるが、(62)同様、地山であるⅣ層内に含まれていたものと考えたい。

外傾する短い口縁部の端部には３カ所以上の刻み目が確認できる。体部上半には現在３条の沈線が認められる。全体をなでて仕上げている。

(64)は確認調査時にＡ－12区のⅢ層より出土した。底部はやや突出ぎみの平底を呈する。体部外面には縦方向のヘラミガキが施され、体部内面にはクモの巣状のハケメが認められる。底径は4.6cmである。後期から終末にかけての時期が与えられよう。

これ以外に弥生後期の土器が、確認調査時にＡ－３区Ⅲ層から１点出土している。

Ⅳ層内に含まれる(62・63)の示す時期およびⅢ層に含まれていた(64)の時期から、微高地の形成時期が弥生前期以降、弥生後期以前であることが判明した。

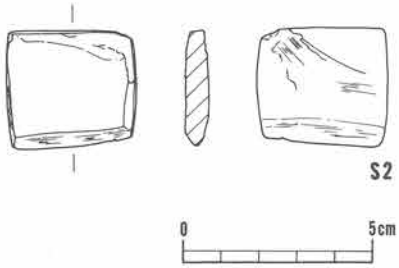


第50図　弥生時代の遺物

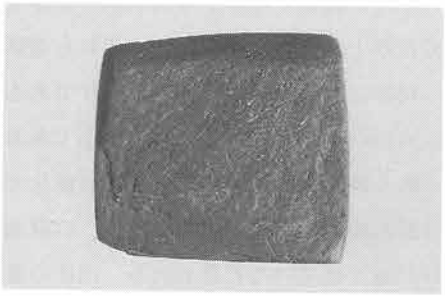
石製品（Ｓ２）

小型の偏平片刃石斧と考えられる。Ｃ地区Ⅱｃ層中より出土している。長さ3.1㎝、幅3.4㎝、厚さは0.6㎝を測る。形状は多少歪な方形を呈する。刃部片側を丁寧に磨いて作りだしている。

石材は泥質片岩である。



第51図　石製品（扁平片刃石斧）



第52図　扁平片刃石斧（写真）

第4章　まとめにかえて

北園遺跡は、古墳時代後期、平安時代後期から室町時代、室町時代末から江戸時代初頭の遺跡であることが判明した。ただ、弥生時代前期・弥生時代後期の甕や壺、奈良時代の土器が出土しており、今回調査した範囲以外に、これらの時期に相当する遺構が存在する可能性が残っている。

今回の調査で検出した遺構は、時期的には平安時代後期から室町時代中頃に比定されるものが大部分である。出土した多量の瓦類および卒塔婆の存在から判断して、当遺跡の性格が寺院址であることは疑いのないところであり、北園遺跡の名称は適切な命名ではない。したがって旧地名の「北村」を付して北村廃寺と遺跡名を変更したい。以下の説明にあたっては北村廃寺と呼称する。

遺構の変遷について

北村廃寺の遺構は流路、掘立柱建物、土坑、溝、畝状遺構で構成されている。これらの遺構はその帰属時期からⅠ～Ⅲ期に大別される。

Ⅰ　期

古墳時代後期から末に比定される流路1が該当する。

流路内からは、陶邑ＭＴ－15、ＴＫ－43型式の蓋杯等が出土しているが、流路の平面形が歪であることから、人為的な溝と言うより自然的成因によって生じた自然流路と理解している。

Ⅱ　期

Ａ地区およびＢ地区で検出された掘立柱建物（1～9）、土坑（1～5）、溝（1～6）、池が該当する。時期は、平安時代後期から室町時代中頃まで継続的に存続していたと推察される。このⅡ期の遺構は、掘立柱建物の棟軸方位、および形態から3群に分かれる。ただ、調査区が狭く、かつ細長いため掘立柱建物の全容が明らかなものが少ない。そこで棟軸の決定にあたっては柱間の長い方を桁行とした。以下の細別はこの前提のもとにおこなった。

1群：棟軸方位を南北方向にもつ総柱と考えられる建物（掘立柱建物1・4・6・7）および溝（溝1・2・4）が該当する。掘立柱建物は棟軸方位がＮ3～4°Ｅにおさまるものが多いが、例外的にＢ地区で検出された掘立柱建物1はN14°Ｅを示す。南北方向に棟軸をもつ建物の一群のなかでもさらに細分すべきであろうか。建物の規模は全容が確認できた掘立柱建物4を見ると、梁行2間、桁行4間の規模である。しかし掘立柱建物6のように桁行3間のものも存在する。

掘立柱建物1の北西部には掘立柱建物1の棟軸とほぼ平行に走る溝1・2がある。この溝1・

2は幅60cmの間隔でほぼ平行にならんで、現在の地境とほぼ重なる形でつくられている。この溝の性格は、道路の両脇に作られた側溝と考えるのが妥当である。南北に棟軸をもつ掘立柱建物の一群は棟軸をこの道路とほぼ平行にしている。言い換えれば、この道路に制約された形で建物が構築された可能性をもつ。溝3は、2群の掘立柱建物2に切られていることからこの群に属すると理解した。

2群：棟軸方位を東西方向にもつ総柱と考えられる建物（掘立柱建物2・3・5・8）が該当する。棟軸方位はN78°～87°Eと幅がある。これらの建物址は調査区外に伸びており、全容の明らかな建物はないが、比較的全容の明らかな掘立柱建物5を見ると梁行3間、桁行は3間以上で、各群のなかでも大型の建物址が多い。また、同一の場所に建て替えをする建物址（掘立柱建物2・3・5）が多いこともこの群の特徴である。

3群：南北方向に棟軸方位をもつ掘立柱建物9と土坑1～5、溝5・6、池が該当する。掘立柱建物9の棟軸方位はN10°Eを示し、その規模は2×2間の小型の掘立柱建物である。建物の西側に庇をもつ構造である。掘立柱建物9の柱穴内からは瓦が出土している。池内からは焼土塊及び炭に混じって多量の瓦が出土しており、瓦葺建物の焼失に伴いその廃材を池内に投棄した状況が推察される。同様に、池の西側にある土坑群も、すべて焼土塊および炭を多量に含んでおり、廃棄土坑の性格をもつ。溝5・6は、埋土に焼土・炭を含んでいないことを考慮すると、焼失以前に溝は埋まっていたと理解でき、3群の遺構より古い可能性が考えられる。しかし2群の掘立柱建物8を切っていることから、この群におさまる。以上述べたように、3群の遺構は焼失前の遺構（掘立柱建物9、溝5・6、池）と焼失後の遺構（土坑1～5）の両方にまたがっている。

Ⅲ　期以降

B地区南端とC地区で検出した畑（畝状遺構1・2）が該当する。調査の結果、上層にも畑があったことがわかっている。上層の畑からは、江戸時代の陶磁器が出土していることから、江戸時代のある時期（江戸時代中頃までか）まで、畑として利用されている。調査前には当地は水田が営まれており、現在のように当地が水田化したのは、おそらく江戸時代の中頃以降と考えている。

Ⅱ期の北村廃寺の時期について

中世（平安時代後期をふくめる）の土器は、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、中国製磁器、国産陶磁器、土製品が出土している。しかし遺構からの出土は限られ、時期決定資料に欠ける。そこで包含層を含めた土器を概観する。Ⅱ期でも古相を示す資料は「て」の字口縁をもつ9・11・15・16の土師器Ⅲおよび19の摂津C型の羽釜である。この一群の土器はおおよそ10世紀から11世紀代に位置付けられる。土師器以外には21の黒色土器椀、38・40の須恵器椀も11世紀におさまる。12世紀の土器は、17の土師器Ⅲ、23の黒色土器椀、25の瓦器椀、34の捏鉢が該当

する。13世紀の資料としては、29の摂津型の羽釜および35の捏鉢をはじめ、遺存状況が不良なため推測の域をでないが24・26の瓦器椀がある。14世紀の土器は36の捏鉢、27の和泉型瓦器椀がある。15世紀代の土器は、18の土師器皿、および「寛正」の紀年銘資料に伴って出土した31の羽釜がある。続く16世紀は空白になり、14の土師器皿、44・46の肥前陶器皿椀、45の瀬戸・美濃系小皿、49～51の丹波焼擂鉢等16世紀末から17世紀初頭の陶磁器が出土する。

以上，北村廃寺の中世土器を概観した。出土した土器からⅡ期の開始は10世紀末から11世紀頃に想定できる。Ⅱ期の終了については確定できる資料がない。以下若干の私見を述べる。調査の結果、池状遺構および土坑群より焼土・炭が出土しており、北村廃寺は火災により廃絶していることが判明している。その火災の時期は、池状遺構最下層より出土した寛正年間（1460～64）の銘がある五輪塔形卒塔婆の示す時期から、畝状遺構直上より出土した49 ～51の17世紀初頭に比定される丹波焼擂鉢の示す年代の間であることは間違いない。北村廃寺から出土した土器は、積極的に16世紀代に比定できるものが無いことを考慮すると、北村廃寺の廃絶時期は、15世紀中葉から後葉の時期に絞られる。

Ⅱ期の遺構群はおおよそ11世紀から15世紀後葉の間で営まれたと理解している。前記した3 群の遺構群は、現段階では掘立柱建物址の構造等から判断して１群→２群→３群の順で変遷したと考えている。この是非については、周辺の調査を待たねばならない。

北村廃寺出土の梵字瓦について

梵字瓦は、瓦頭面に「キリーク」すなわち阿彌陀如来を付した軒丸瓦（軒丸瓦Ⅱ類）と中央に不動明王とその周囲に四天王を配した軒平瓦（軒平瓦Ⅲ類）がある。

「キリーク」の梵字をもつ軒丸瓦は奈良市元興寺、大阪府池田市禅城寺、豊中市山ノ上遺跡、兵庫県川西市栄根寺、西宮市神呪寺等から出土している(1)。このうち山ノ上遺跡(2)・禅城寺(3)の瓦は同文で外区に蓮華座、内区に「キリーク」をもち、外区縁には連珠文を配置する構造で、本遺跡軒丸瓦Ⅱ類とは多少異なっている。しかし神呪寺のそれは拓影図(3)を見る限り、軒丸瓦Ⅱ類と類似している。

この梵字軒丸瓦に対応する軒平瓦は、本遺跡からは出土していないが、山ノ上遺跡、禅城寺からは、軒平瓦も見つかっている。両寺の軒平瓦は、軒丸瓦と同様、同文でいずれも唐草文の両端に左に「サ（観音菩薩)」、右に「サク（勢至菩薩)」の梵字が描かれたものである。おそらく軒丸瓦Ⅱ類と対応する瓦も、これらと同様梵字をもつと考えられる。

「キリーク」の梵字をもつ軒丸瓦は、元興寺出土の瓦(4)のように、珠文帯・蓮華座をもたないタイプ。山ノ上遺跡・禅城寺の瓦のように外区縁に珠文帯、外区に一重の蓮華座、内区に「キリーク」を配置するタイプ。北村廃寺・神呪寺の内区に二重の蓮華座と「キリーク」をもつタイプの３タイプがある。

軒平瓦Ⅲ類は、中央に「カーン（不動明王）」、その両脇に四天王（持国天、広目天、多聞天、増長天）を配した梵字瓦である。不動明王は、大日如来を本尊とした密教独特の尊像である五大明王（不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉）の一つである。軒平瓦Ⅲ類のように中央に不動明王をもつ、すなわち不動明王を中尊とした例は、仁王経曼荼羅[5]がある。仁王経曼荼羅は不動明王を中尊として四方に四大明王を配置し、四大明王の守護神として四天王がそれぞれ付属している。不動明王および四大明王と四天王の配置は以下のとおりである[6]。

中	不動明王	帝釈天
東	降三世明王	持国天
南	軍荼利明王	増長天
西	大威徳明王	広目天
北	金剛夜叉明王	多聞天

また、12世紀末に醍醐寺で考案されたと言われている仁王経曼荼羅図像[7]では、四大明王の脇に四天王を付属させており、四大明王と四天王の関係は緊密である。軒平瓦Ⅲ類にみられる不動明王と四天王は、四天王が四大明王に取って代わることを示すものか、あるいはたんに四大明王を省き、簡略化したものかは判らないが、いずれにしてもこの瓦が、東密の仁王経曼荼羅の法則の上に成立していることは間違いない。

軒平瓦Ⅲ類に対応する軒丸瓦は、出土していない。軒平瓦Ⅲ類に対応する軒丸瓦は、やはり梵字瓦の可能性が高い。不動明王を中心にもつ軒平瓦Ⅲ類は大日如来を本尊とする密教寺院の瓦である。大日如来を刻んだ軒丸瓦は、大阪市四天王寺[8]、京都市法勝寺[9]をはじめ県内では、淡路・三原町覚住寺[10]の瓦のなかに認められる。四天王寺の軒丸瓦は、瓦当中央に「ア」、「バン」を刻んだ両者がある。法勝寺のそれは「アーク」が刻まれている。また覚住寺の梵字瓦は、四天王寺と同様瓦当面に「ア」を刻んでいる。「ア」・「アーク」は胎蔵界大日如来の種字で、「バン」は金剛界大日如来の種字である。おそらく、軒平瓦Ⅲ類に対応する軒丸瓦は、大日如来の梵字を瓦当面にもつこのような瓦が対応すると考えられる。

軒丸瓦Ⅰb類は、出土した瓦のなかでも古相の瓦で、時期的には平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられ、現段階では北村廃寺のなかで古い瓦の一群である。軒平瓦Ⅲ類は鎌倉時代中期から後期の間におさまると考えられる[5]。また軒丸瓦Ⅱ類は出土量が最も多く、北村廃寺の最終のものと推察される。

前記したように北村廃寺は少なくとも15世紀後葉には火災により廃絶したと理解しており、現段階では、北村廃寺の存続期間は平安時代末ないしは鎌倉時代初頭から室町時代中頃と推察される。また、出土した梵字瓦から、北村廃寺は東密系の寺院として成立し、その後浄土信仰が加わったと考えられる。

以上、北村廃寺について私見を述べた。しかし、今回の調査で検出した建物群は、その構造から判断して瓦葺建物とは考えられない。おそらく寺院の関連施設の建物と推察される。したがって、これまで述べてきた所見は、あくまでも予察の域をでない。今後、周辺の調査によって、これらの点が明らかとなるであろう。

本書をまとめるにあたって、多くの方々に御助言・指導を得た。とくに北村廃寺出土の瓦について、藤沢一夫・高井悌三郎両氏には、有益な御教示を得た。文末ではあるが、感謝の意を表しまとめにかえたい。

註)

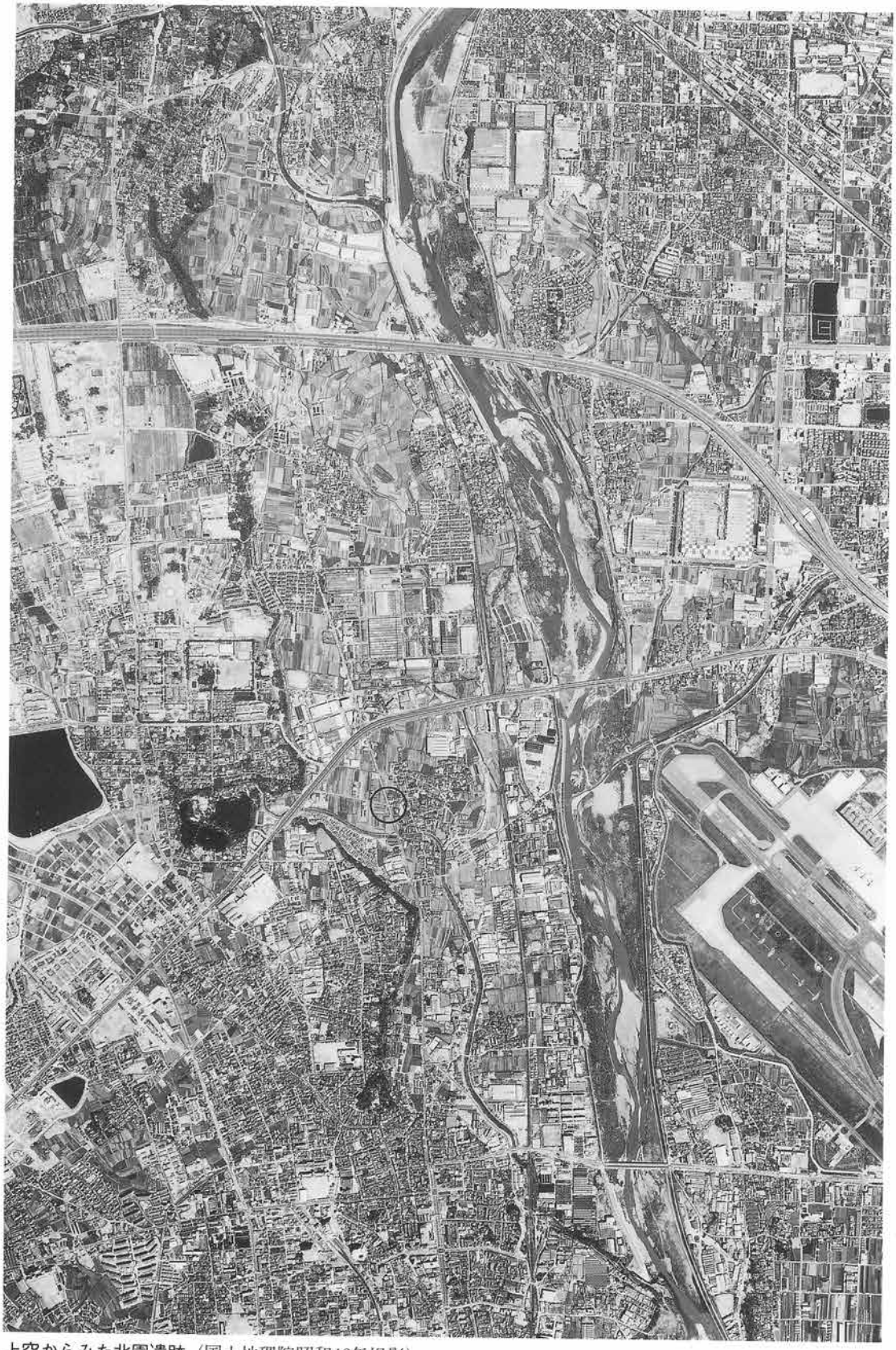
1．藤沢一夫・高井悌三郎両氏の御教示による。
2．橋本正幸　「山ノ上遺跡」　『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』　豊中教育委員会　1982
3．有岡正次氏より、同氏所有の拓影図を見せていただいた。
4．藤沢典彦　『中・近世瓦の研究－元興寺編－』　元興寺文化財研究所　1982
5．藤沢一夫氏御教示による。
6．種智院大学密教学会内　密教大辞典再版委員会編　「密教大辞典」 1984
7．中野玄三　「不動明王」『日本の美術３　№238』　1986
8．出口常順・藤沢一夫・中村浩『四天王寺古瓦聚成』　1986
9．佐伯啓造　『総合古瓦研究　第２分冊』 1939
10.『風土に生きる兵庫の古瓦－淡路－　資料集』　兵庫県立歴史博物館　1986

参考文献

伊野近富　「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集　第１集』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987
横田洋三　「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡調査報告　第11集　平安京左京四条三坊十三町』（財）古代学協会　1984
鈴木重治・松藤和人　『同社キャンパス内出土の遺構と遺物』　同社大学校地学術調査委員会　1978
橋本久和　『上牧遺跡発掘調査報告　高槻市文化財調査報告　第13冊』　高槻市教育委員会　1980
尾上　実　「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』　藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会　1983
尾上　実　「大阪南部の中世土器　－和泉型瓦器椀－」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985
菅原正明　「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告　第19集』　国立歴史民俗博物館　1989
森田　稔　「東播系中世須恵器の成立と展開」『研究紀要　第３号』神戸市立博物館1986
山中　進　「神出窯における系譜、構造、編年」『神出 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』妙見山山

麓遺跡調査会　1986
丹治康明　「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985
井上喜久男　「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985
楢崎彰一他　『尾呂　―愛知県瀬戸市　定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』
瀬戸市教育委員会　1990

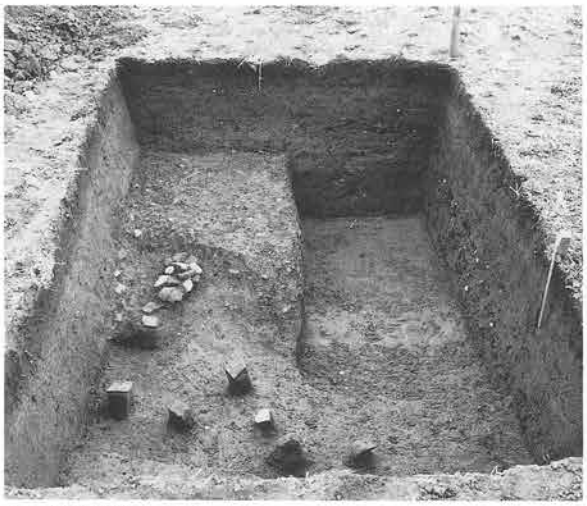
図　　版



上空からみた北園遺跡（国土地理院昭和46年撮影）

図版二　遺構

1．調査区東方の猪名川を望む（空中写真）



2．確認調査　坪1

3．確認調査　坪18

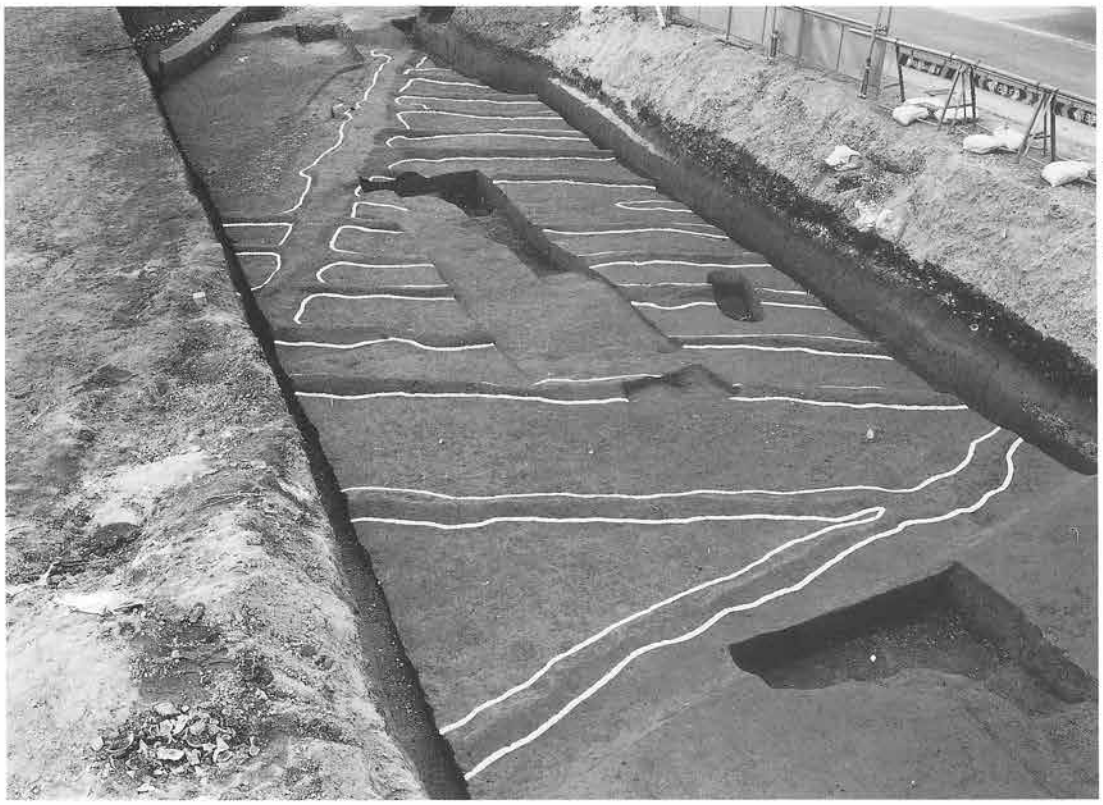
A・C地区の全景（空中写真）

1．畝状遺構１（南から）

2．畝状遺構１（北から）

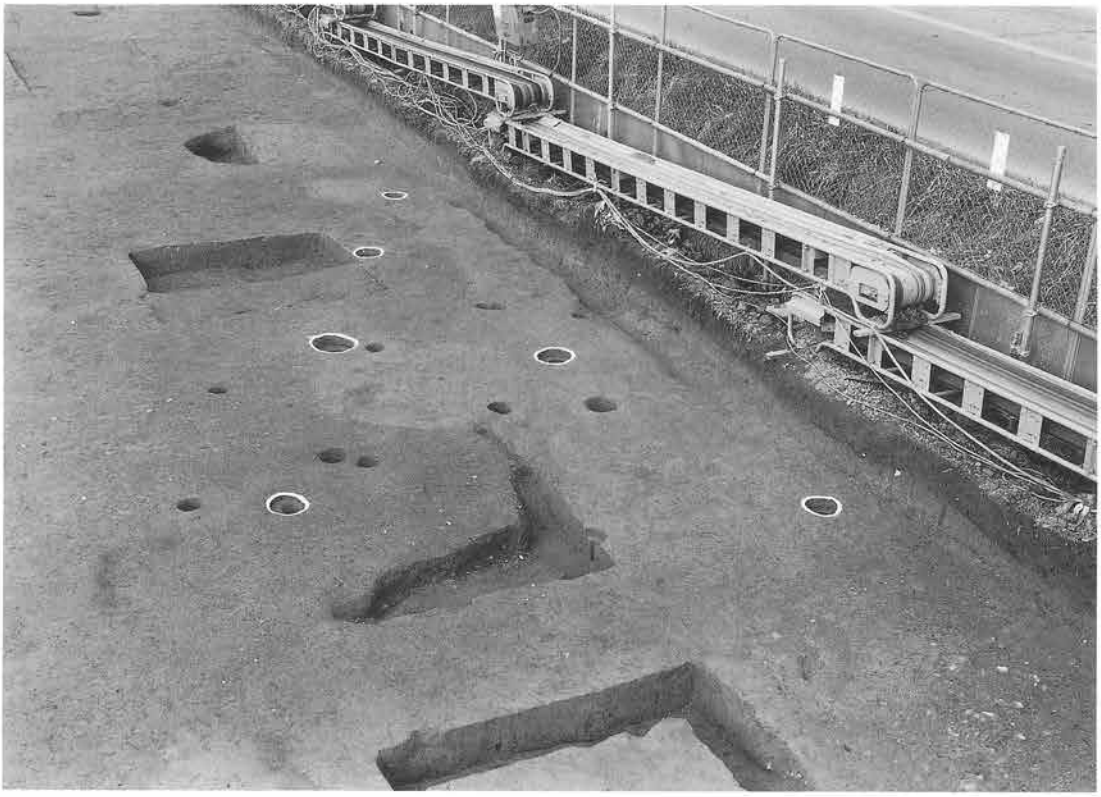
3．畝状遺構１断面(1)（東から）

4．畝状遺構１断面(2)（東から）

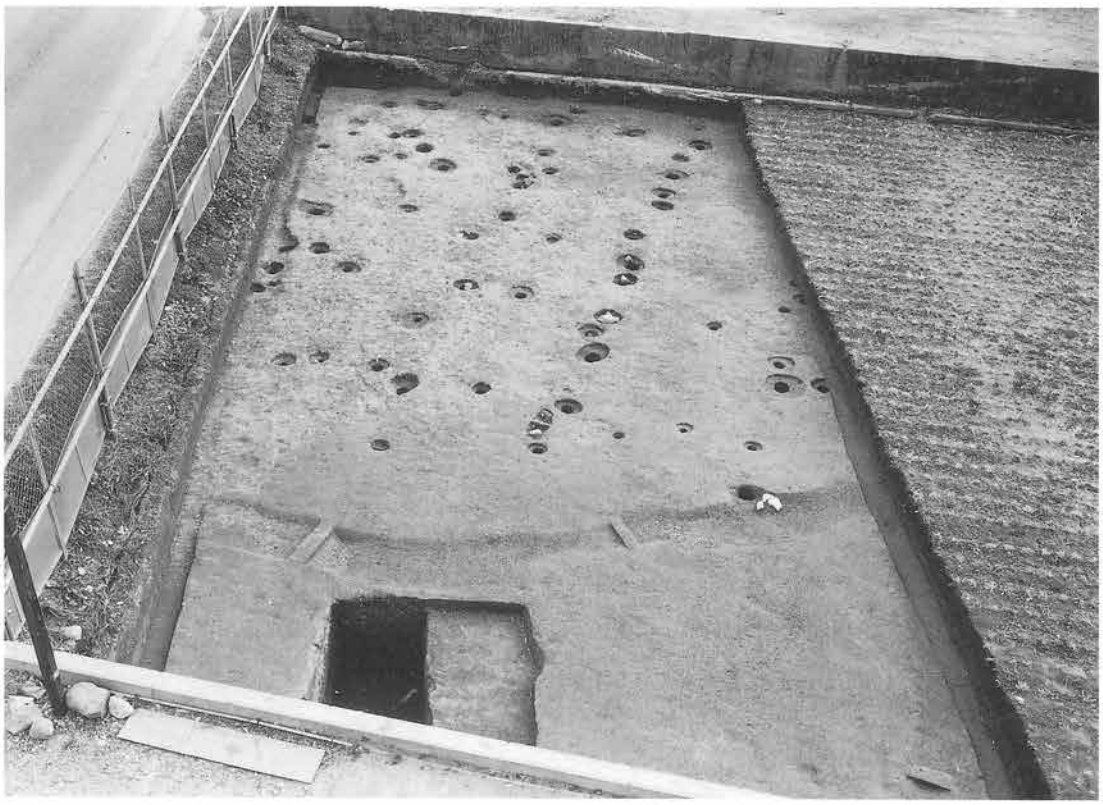


1．畝状遺構２（南から）

2．畝状遺構２（北から）

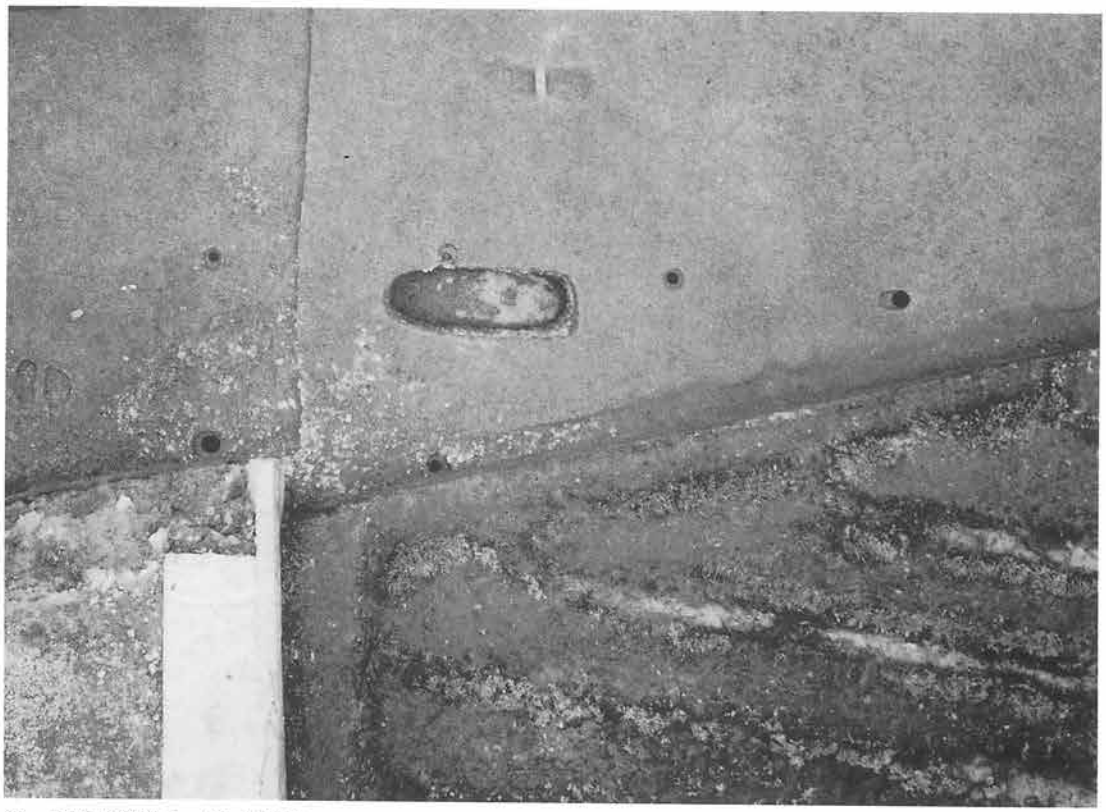


1．掘立柱建物1（南から）



2．掘立柱建物2～5（北から）

1．掘立柱建物２～５（西から）



2．掘立柱建物７（空中写真）

図版八　遺構

1．掘立柱建物８（西から）

2．掘立柱建物９（西から）

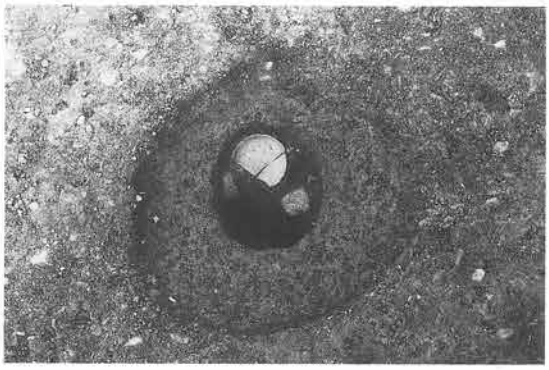
1．掘立柱建物1（P 5）断面

2．掘立柱建物1（P 1）断面

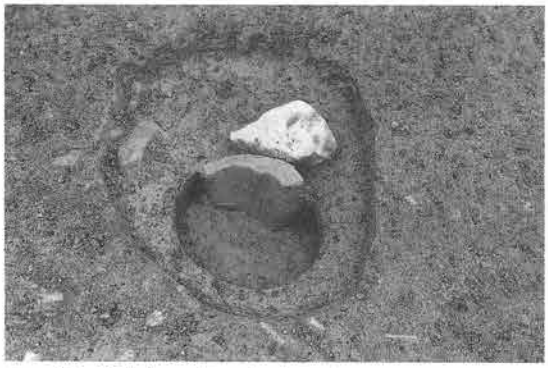
3．掘立柱建物4（P10）礫出土状況

4．掘立柱建物4（P10）根石

5．掘立柱建物2（P 7）土器出土状況



6．掘立柱建物5（P 7）土器出土状況



7．掘立柱建物9（P 4）丸瓦出土状況

8．掘立柱建物9（P 4）断面

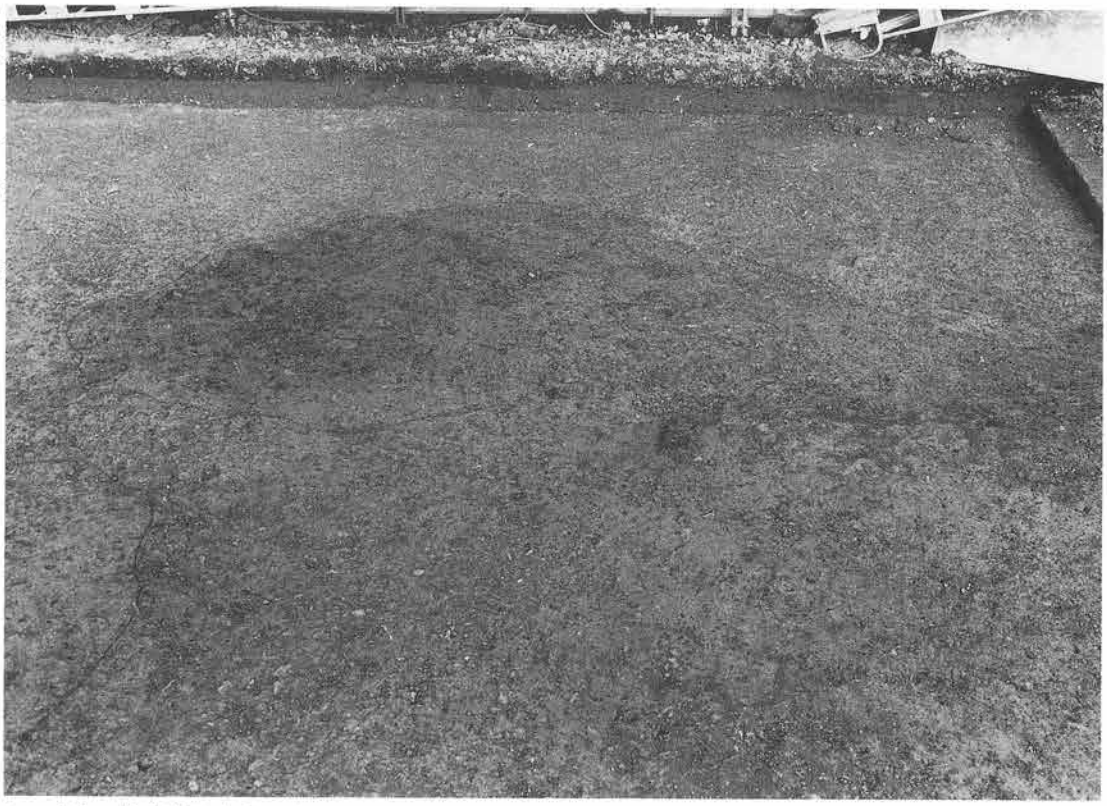
図版十　遺構

1．土坑1～5（南から）

2．土坑1（南から）

1．土坑２（東から）

2．土坑３（東から）

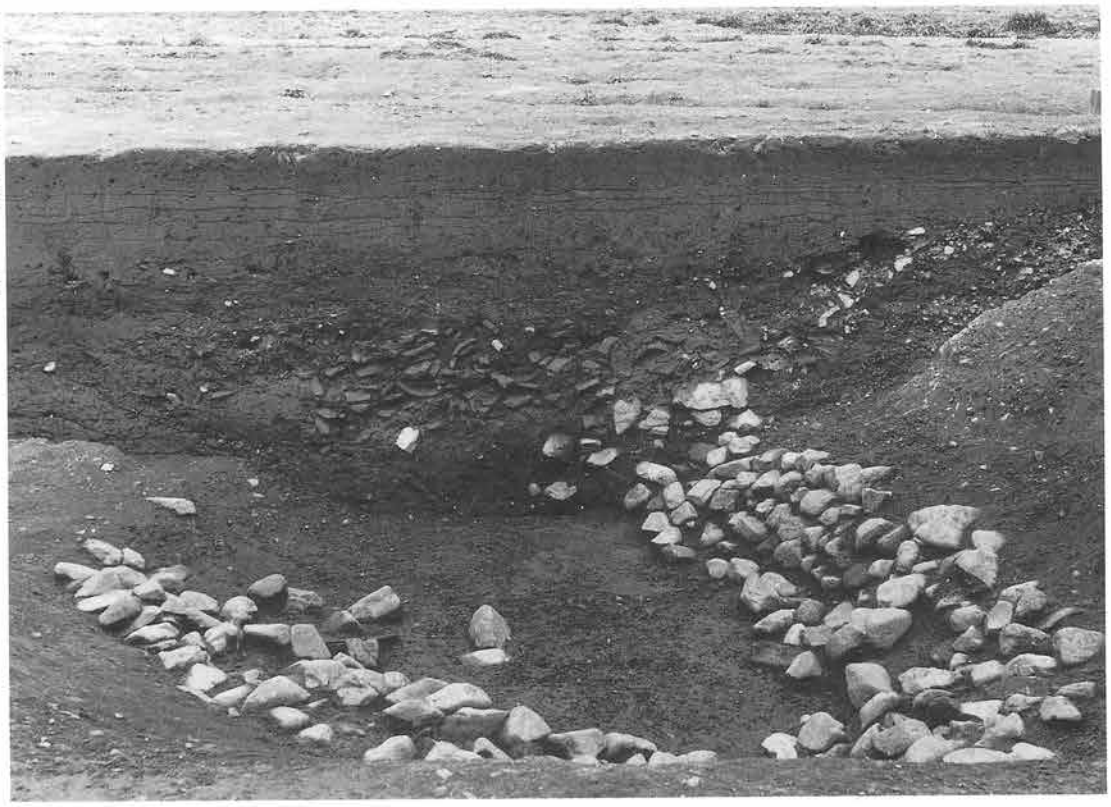


1．土坑４検出状況（西から）

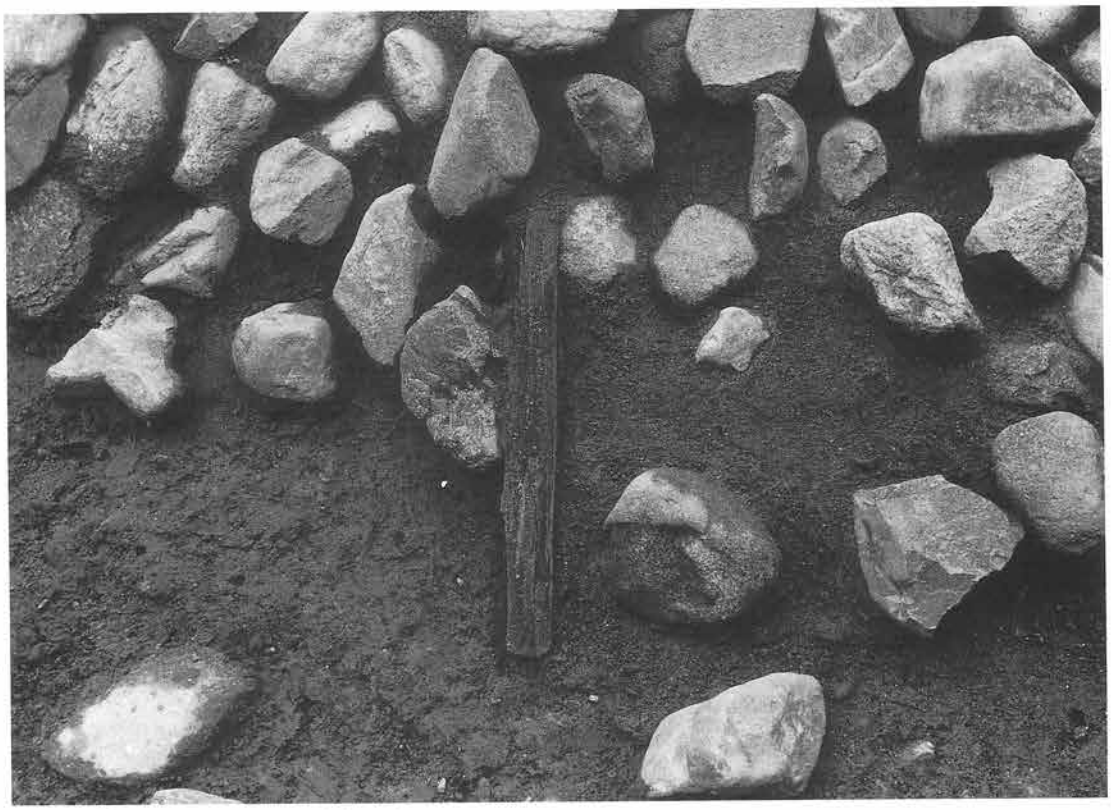
2．土坑４・土坑５（南から）

1．池状遺構（南から）

2．池状遺構（西から）



1．池状遺構断面（東から）



2．池状遺構卒塔婆出土状況（西から）

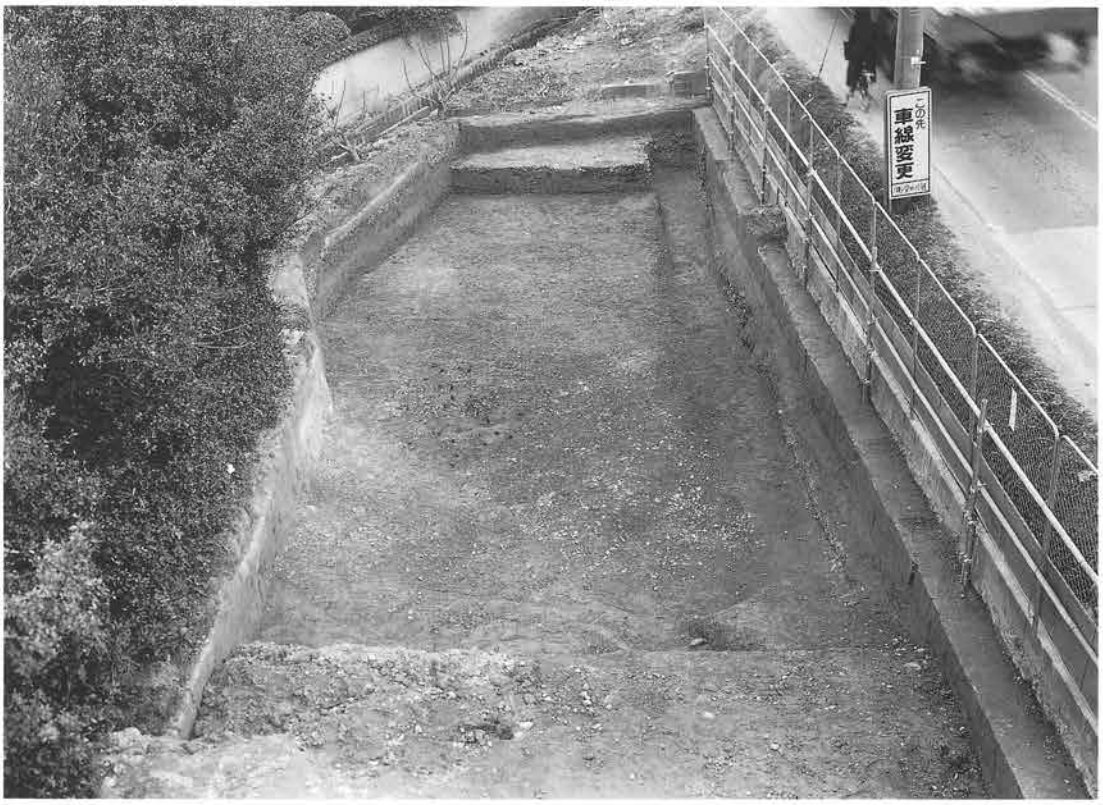
1．溝4（西から）

2．溝5・溝6断面（東から）

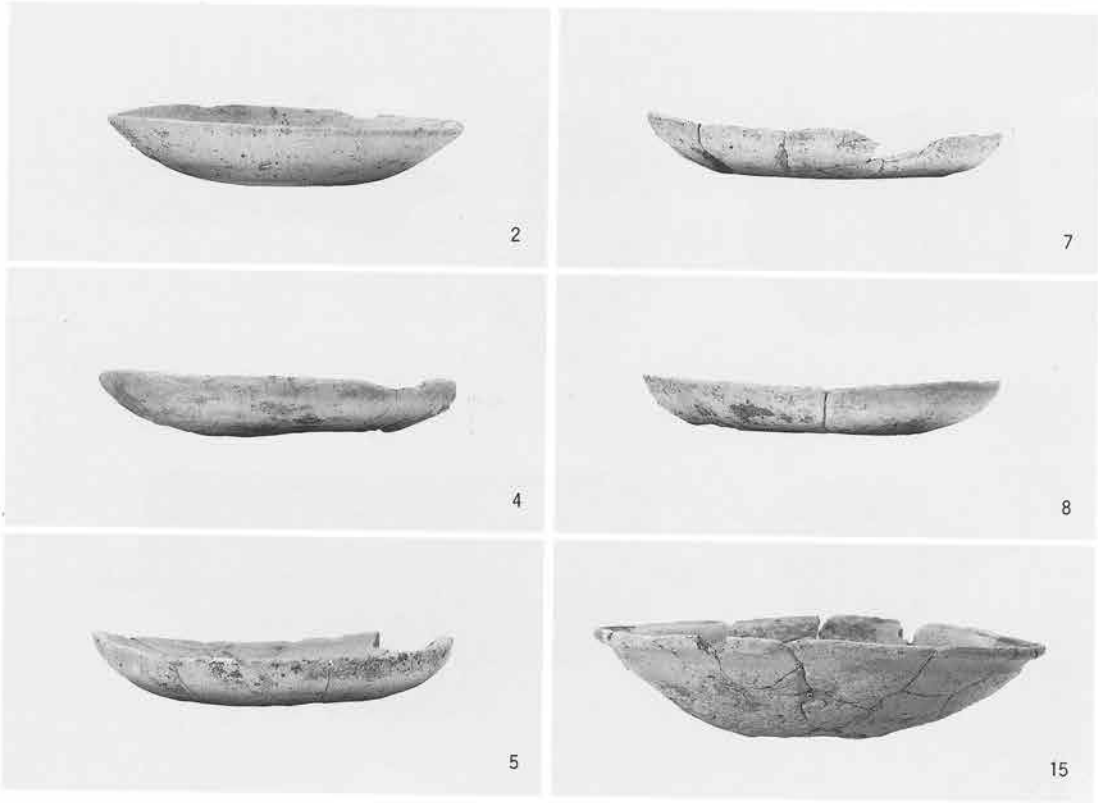
1．流路1（南から）

2．流路1断面（北から）

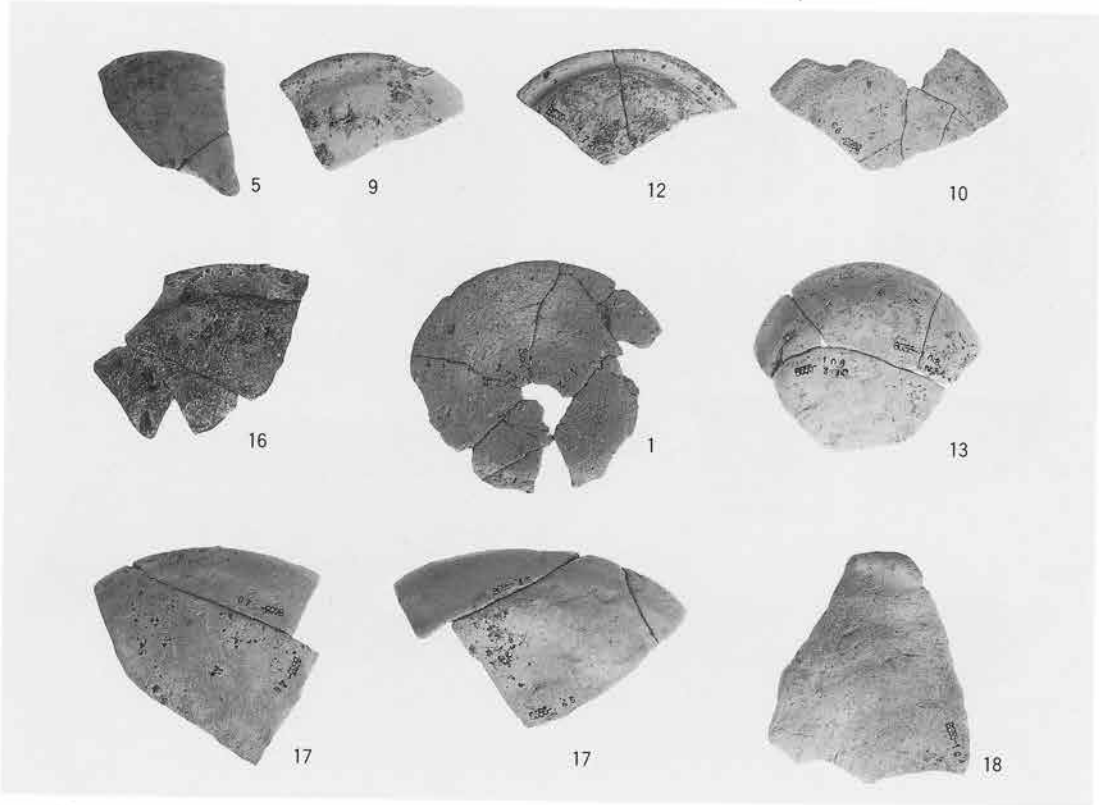
3．流路1土器出土状況（南から）



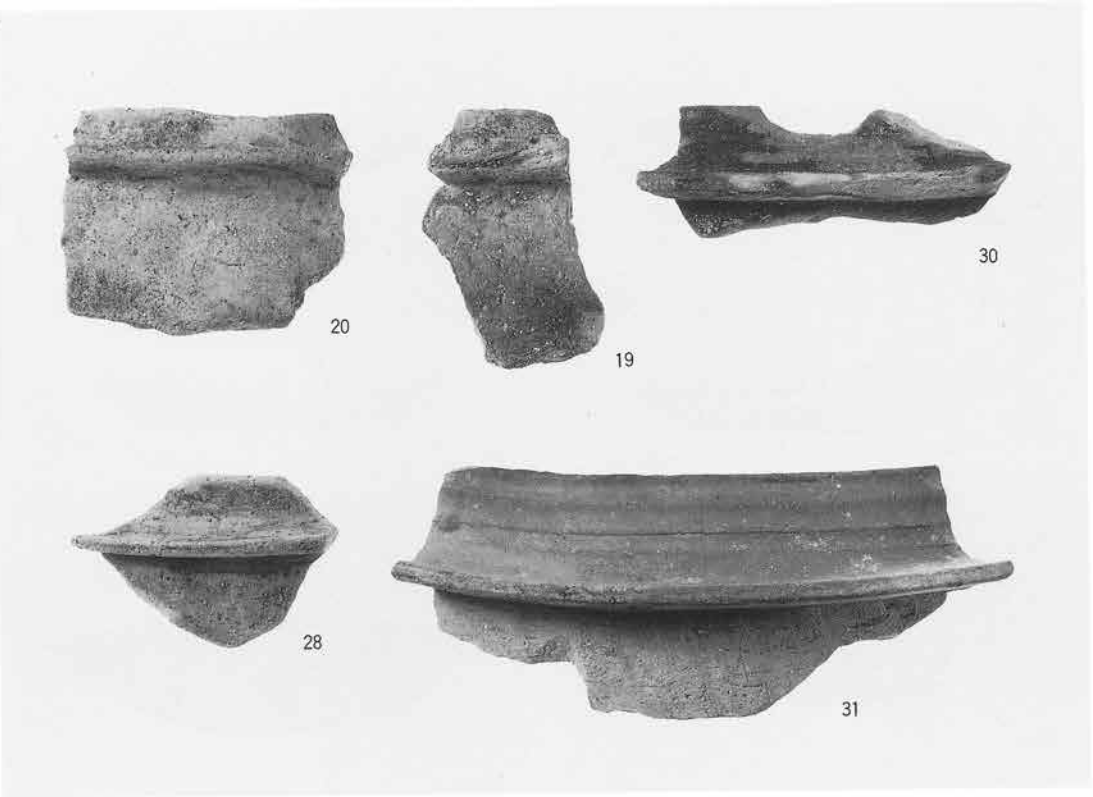
4．流路2杭検出状況（北から）



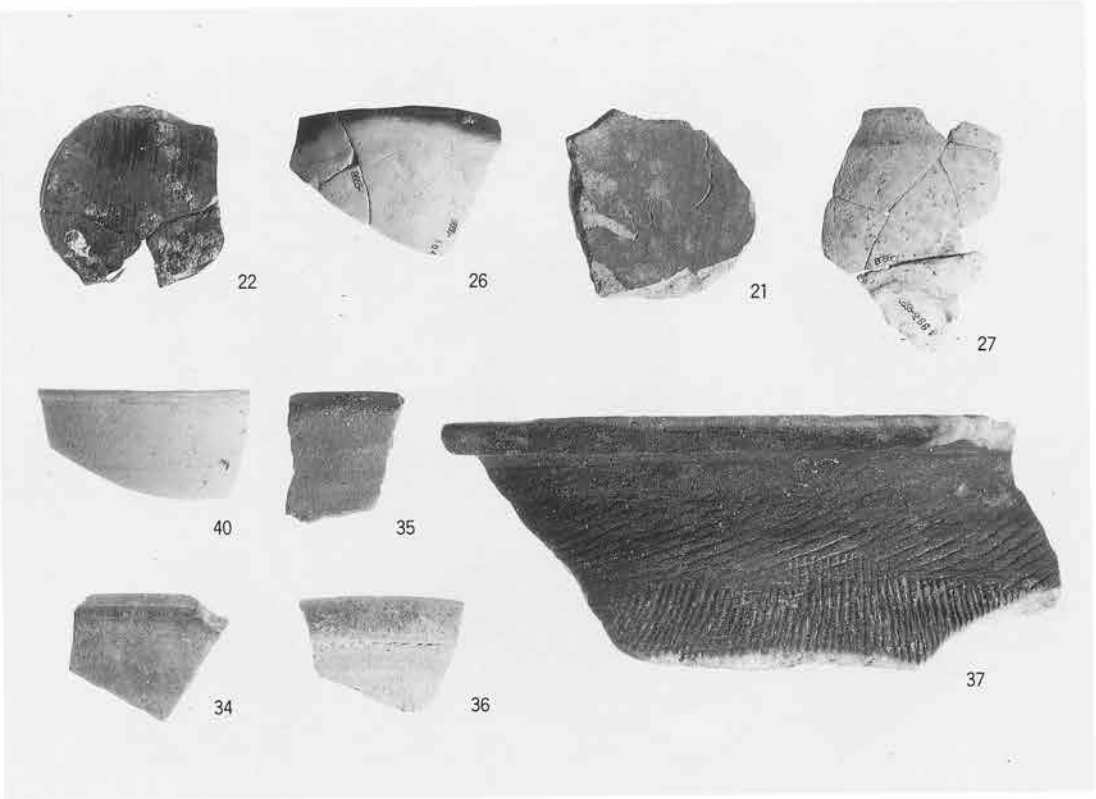
1．土師器(1)



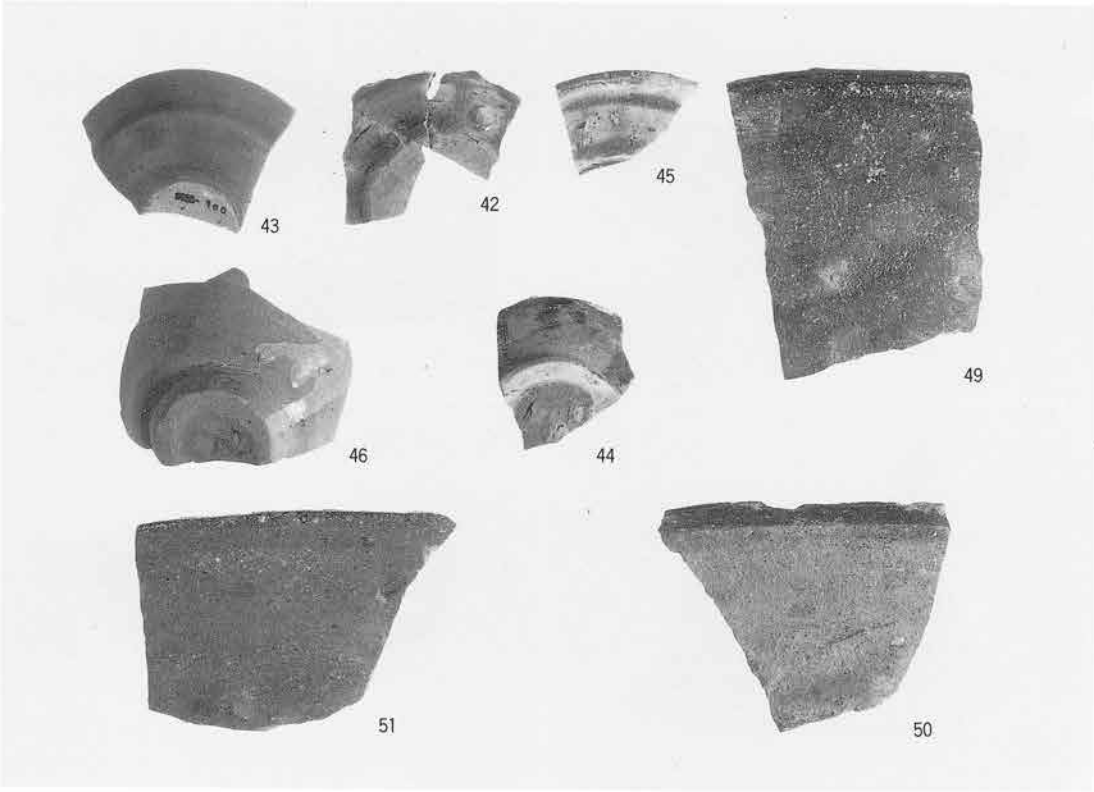
2．土師器(2)



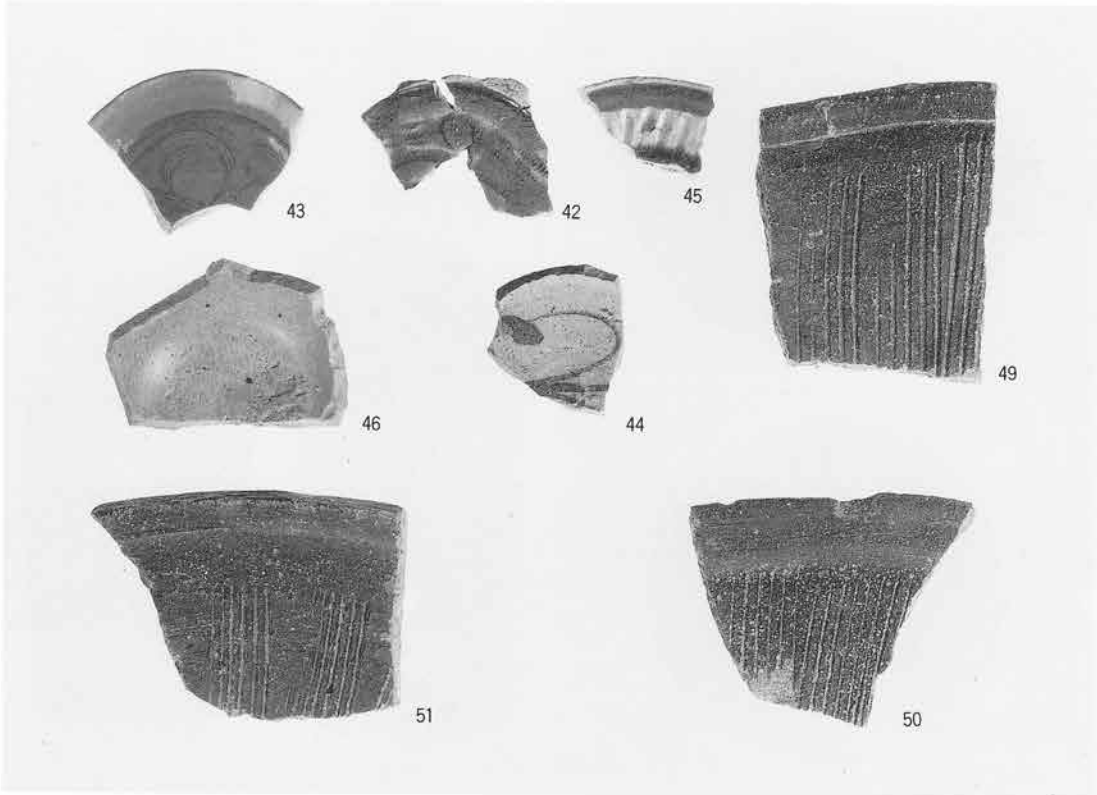
1．土師器・瓦質土器



2．黒色土器・瓦器・須恵器



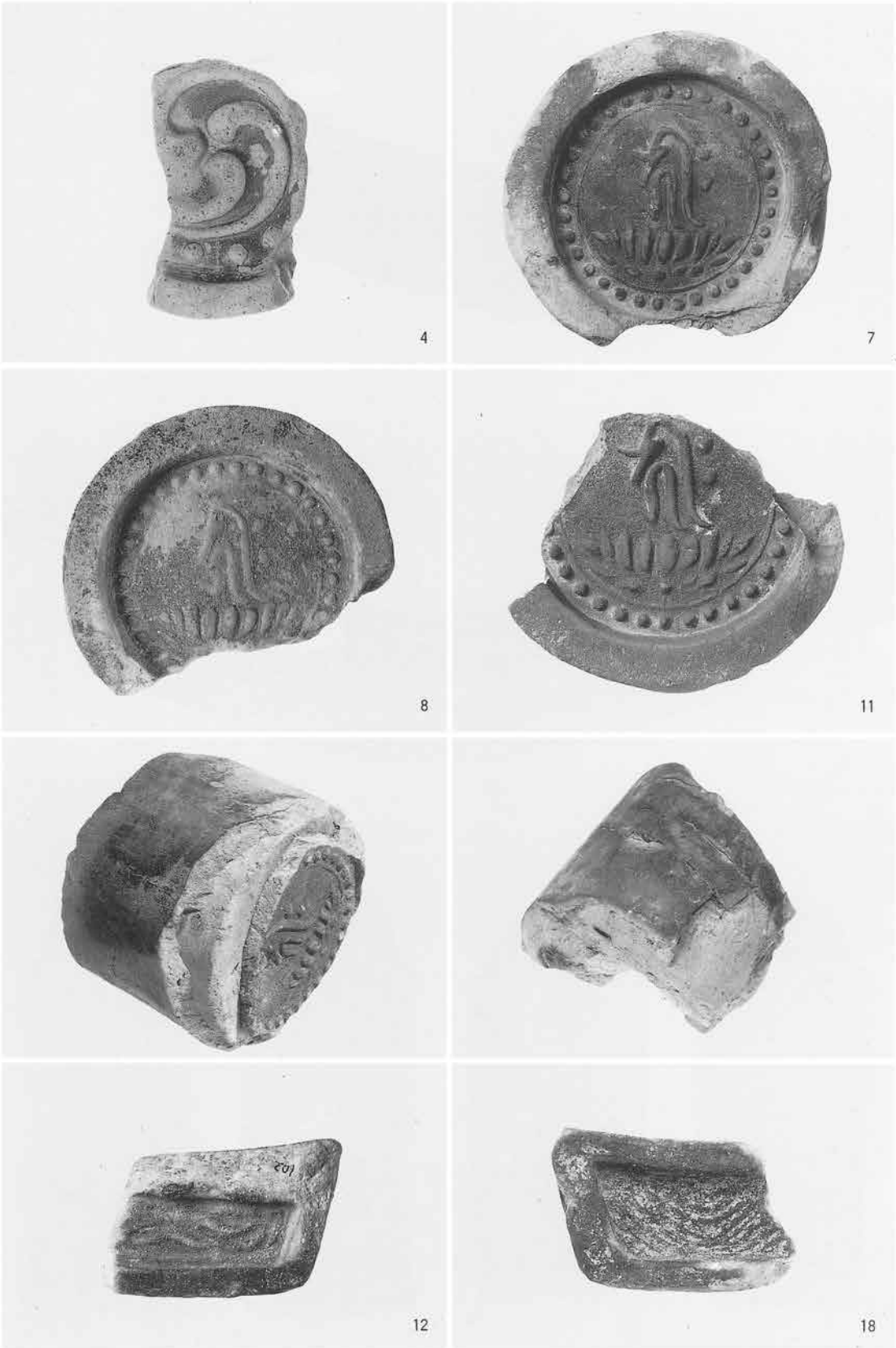
1．中国磁器・国産陶器（表面）



2．中国磁器・国産陶器（裏面）

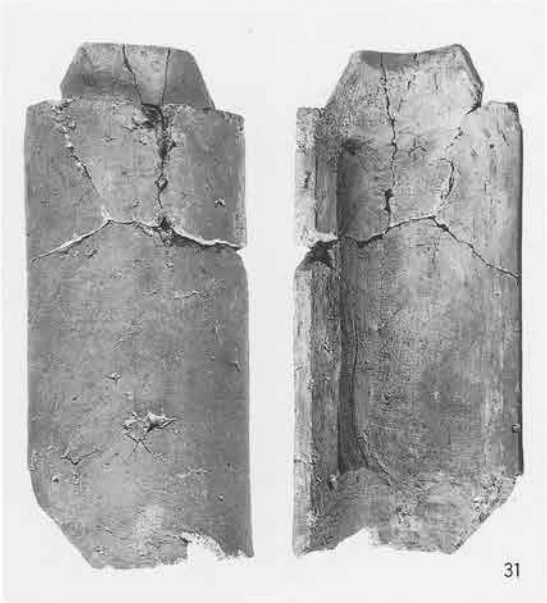
1．黒色土器・瓦質土器・国産陶器・須恵器

2．軒丸瓦（2：軒丸瓦Ⅰa類、3：軒丸瓦Ⅰb類）



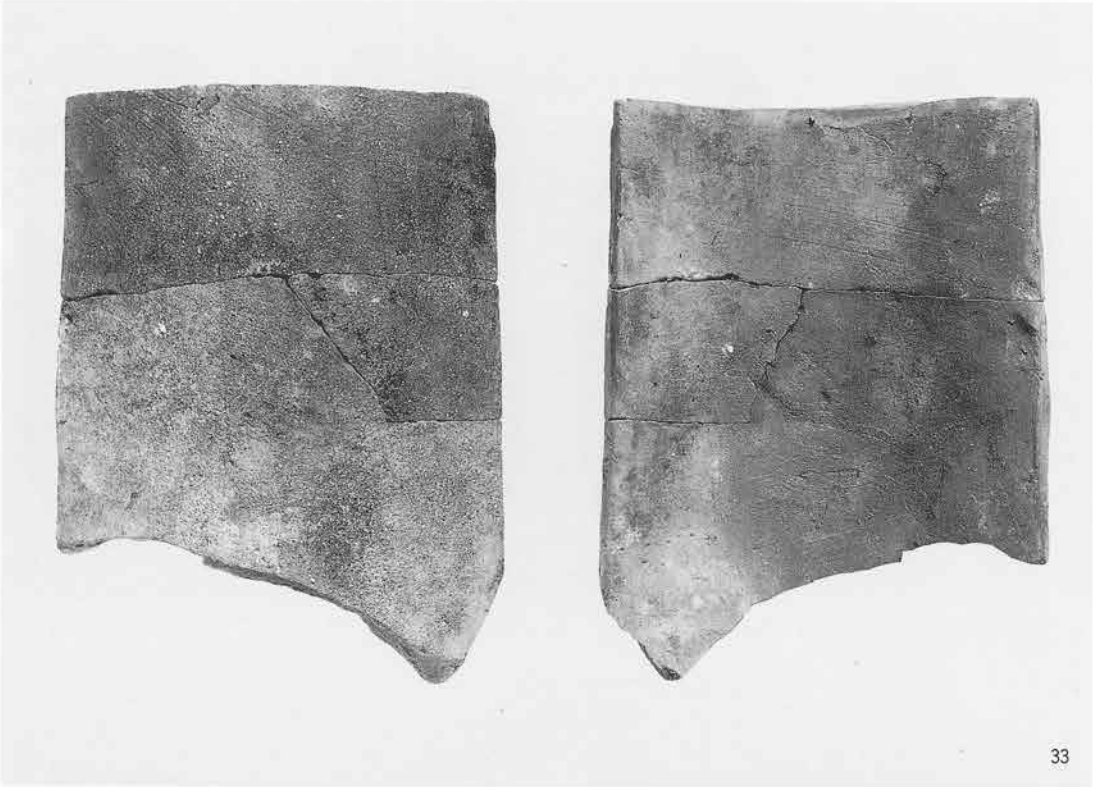
軒丸瓦・軒平瓦（4：軒丸瓦Ⅰb類、7・8・11：軒丸瓦Ⅱ類、接合状況、12：軒平瓦Ⅰa類、18：軒平瓦Ⅱ類）

軒平瓦・丸瓦（16：軒平瓦Ⅰb類、21：軒平瓦Ⅲ類、28：丸瓦Ⅰ類、29：丸瓦Ⅱ類）

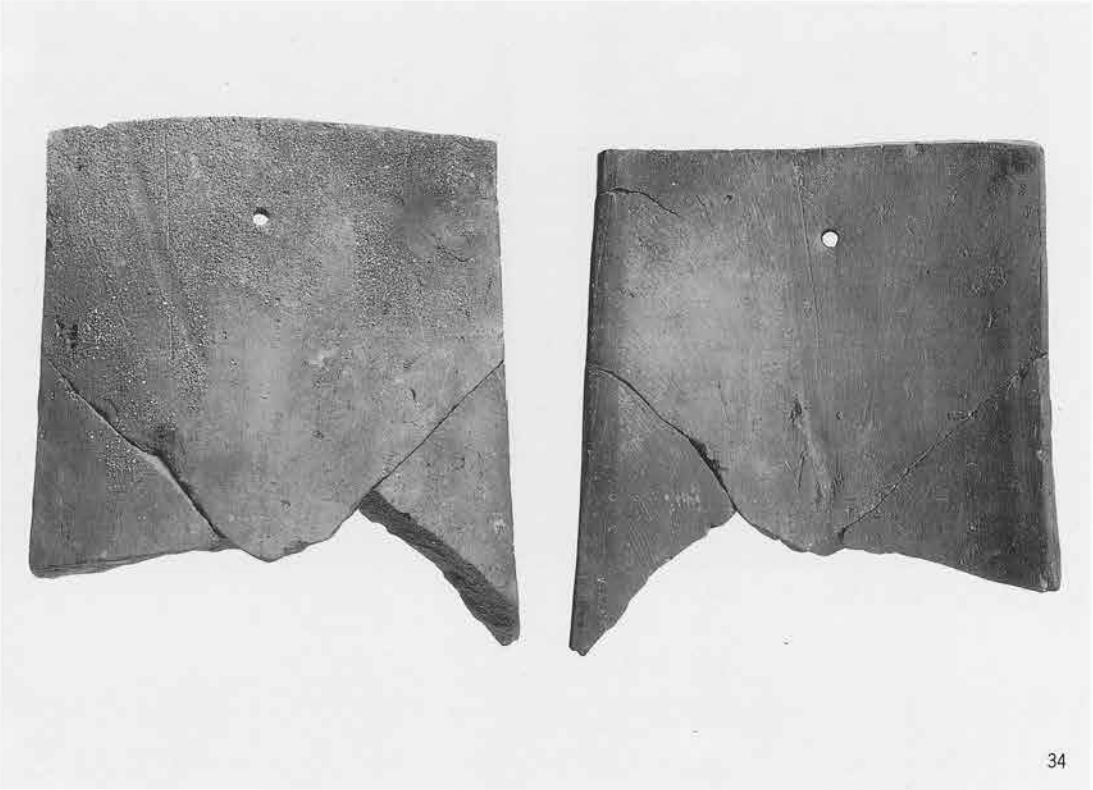


1．丸瓦（30：丸瓦Ⅱ類、31：丸瓦Ⅲ類）

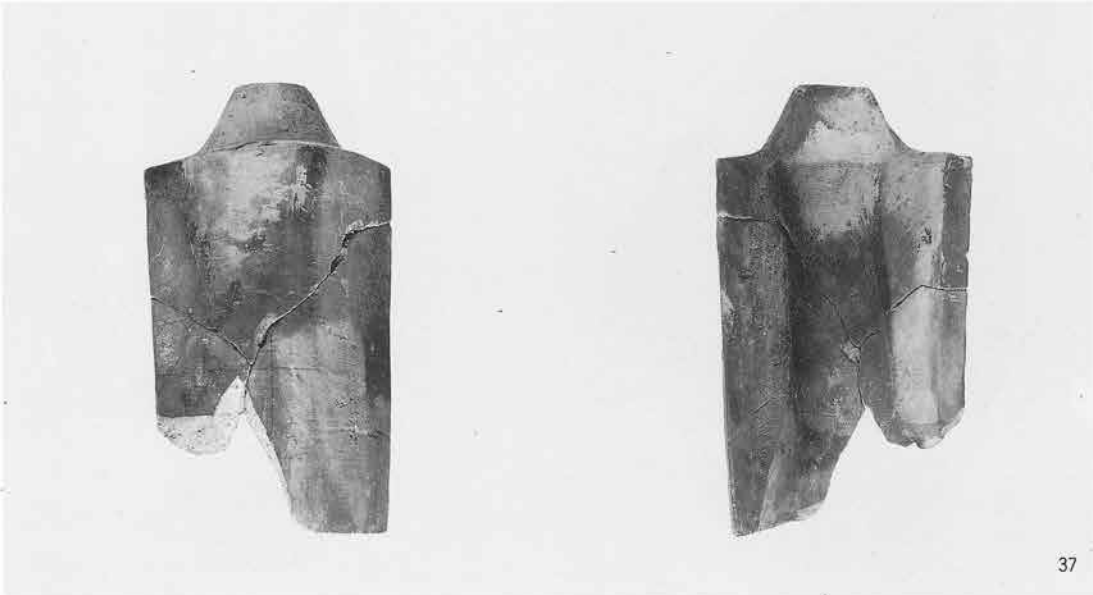
2．平瓦（32：平瓦Ⅰ類）



1．平瓦Ⅱ類

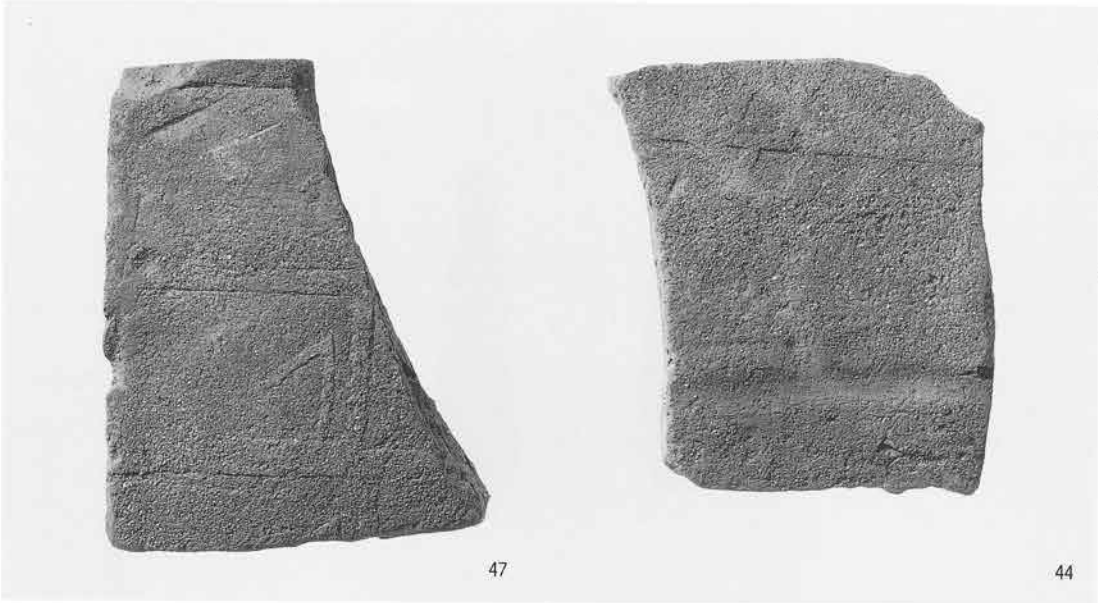


2．平瓦Ⅲ類



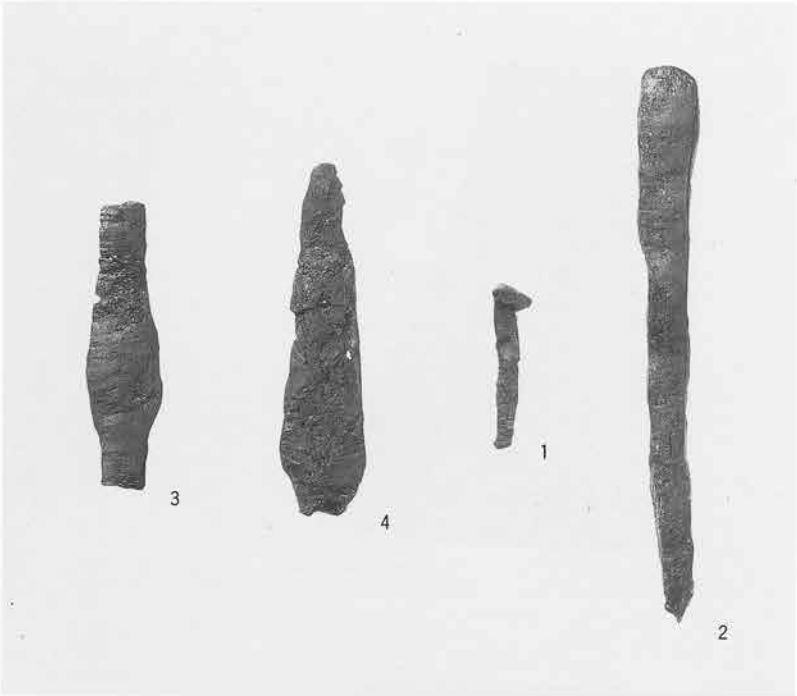
鳥衾瓦・雁振瓦（35：鳥衾瓦、36：雁振瓦Ⅰ類、37：雁振瓦Ⅱ類）

熨斗瓦・鬼瓦（38：熨斗瓦Ⅰ類、39：熨斗瓦Ⅱ類、40～42：鬼瓦）

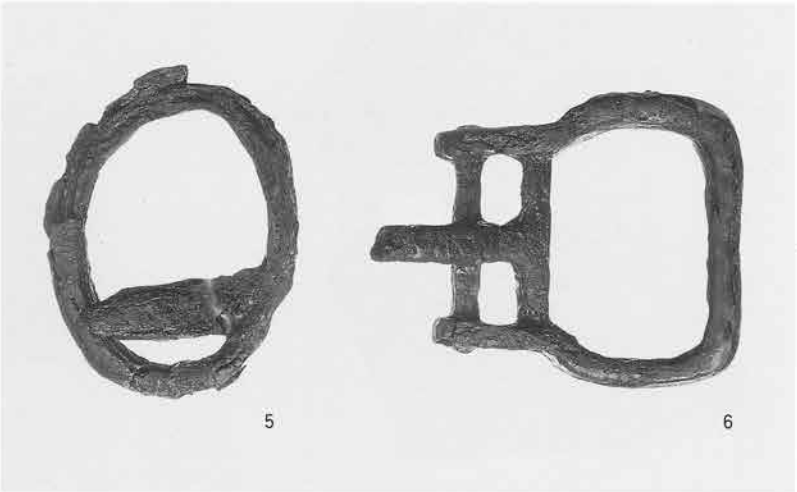


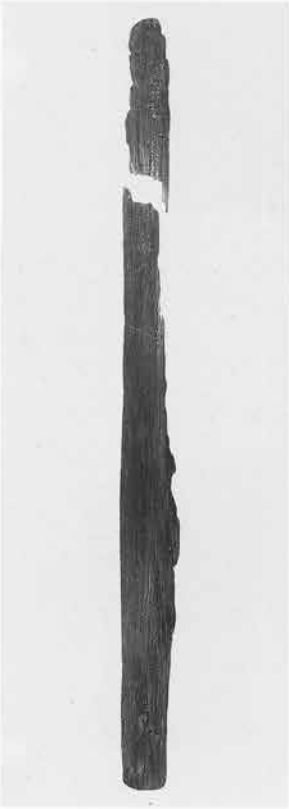
叩き目文様瓦・文字瓦（44：叩き目文様A類、47：叩き目文様B類、49：叩き目文様C類）

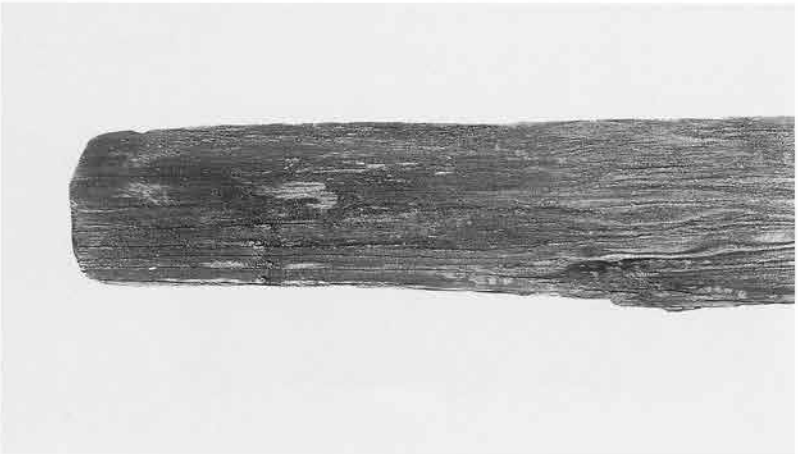
図版二八　遺物



1．鉄製品（1～6）

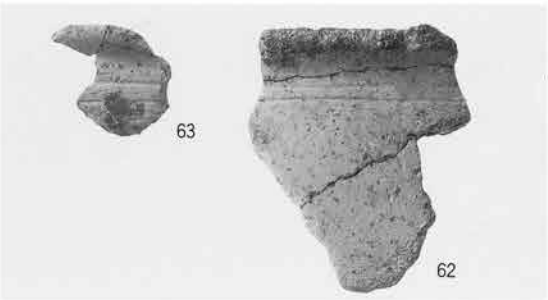




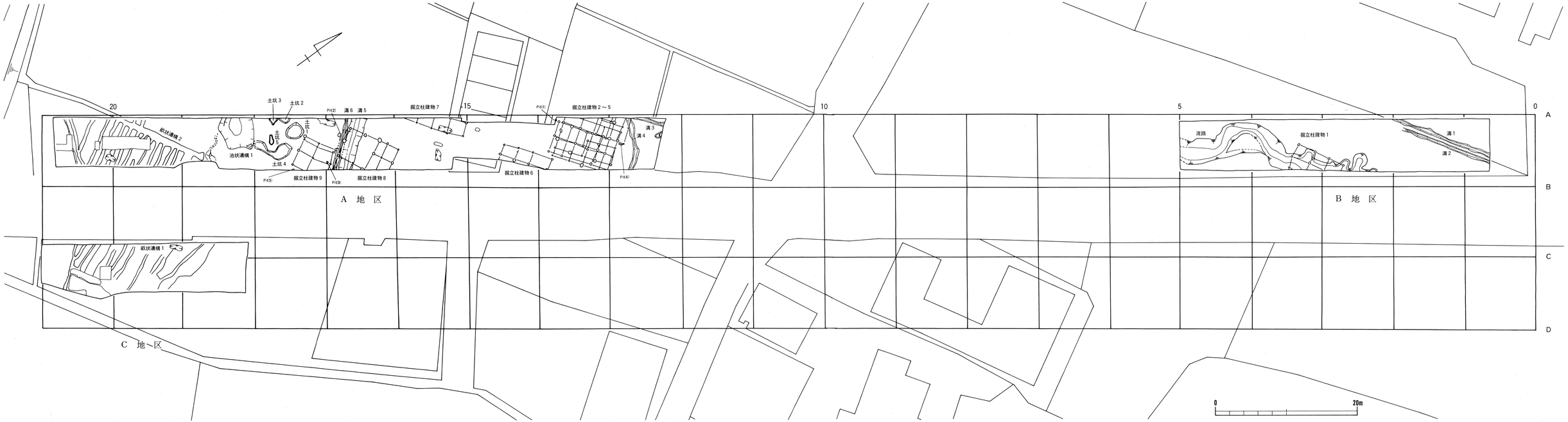


2．五輪塔形卒塔婆

1．流路１出土土器



2．弥生土器


20
15
10
5
0
A
B
C
D
土坑 3
土坑 2
土坑 1
土坑 4
P(2)
溝 6
溝 5
掘立柱建物 7
P(1)
掘立柱建物 2～5
溝 3
溝 4
P(4)
P(5)
掘立柱建物 9
P(3)
掘立柱建物 8
掘立柱建物 6
池状遺構 2
池状遺構 1
A 地 区
B 地 区
C 地 区
流路
掘立柱建物 1
溝 1
溝 2
0
20m

付図　遺構全体図

兵庫県文化財調査報告書　第91冊

北園遺跡発掘調査報告書

—都市計画街路尼崎港川西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

平成３年３月発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５
(TEL. 078-531-7011)

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　日本写真印刷株式会社
〒604 京都市中京区壬生花井町３